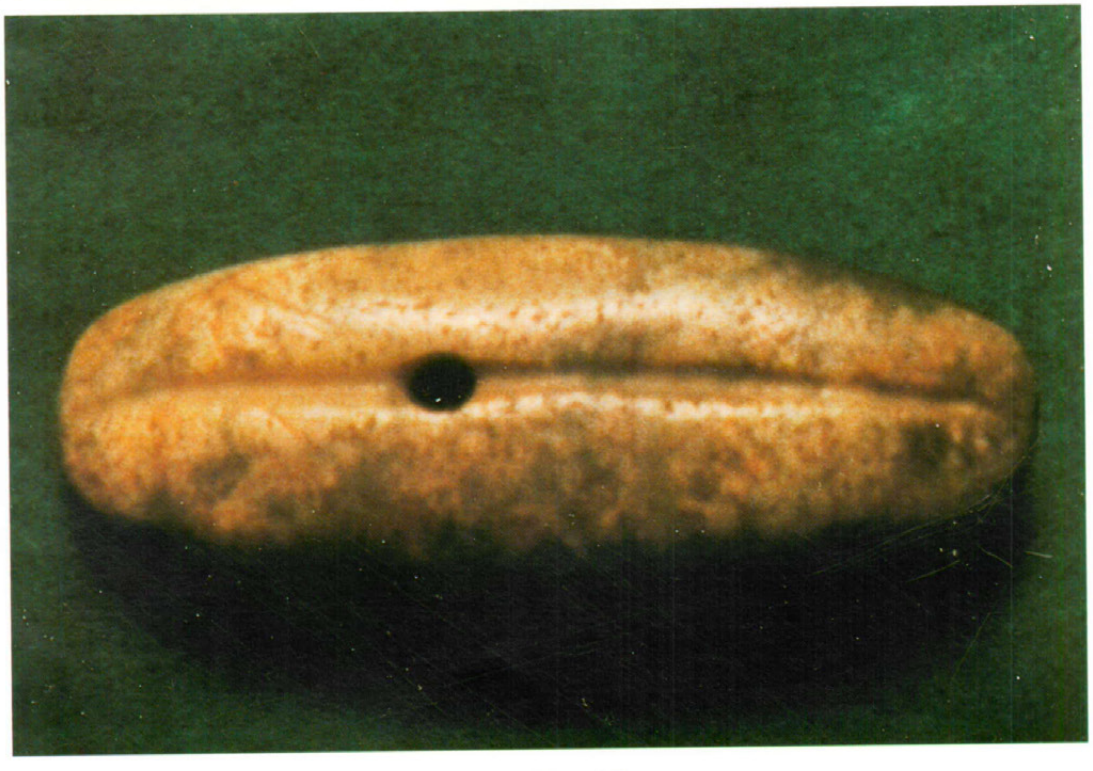
松本市文化財調査報告No.27

松本市寿小赤遺跡

――緊急発掘調査報告書――

1983.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会



上：石　　冠
下：垂れ飾り

松本市文化財調査報告No.27

松本市寿小赤遺跡

――緊急発掘調査報告書――

1983.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

序

この小赤遺跡は、昭和55年度に着工となりました県営ほ場整備事業小赤地区にあり、当初から埋蔵文化財の存在が確認されている遺跡であります。

このため、ほ場整備地区内にかかる遺跡範囲は、判明しておりましたので、昭和57年度の区画整理工事の着工にあたり、県・市教育委員会の皆様と事前打合せにより、調査方法、調査期間、費用負担等について検討をいただき、この結果、発掘調査による記録保存の方針を決定しました。

調査の実施は、市教育委員会に全面的に委託を受けてもらうことになりました。とくに今年度からは、市教育委員会の直営施行による強力な体制で対応していただき、数多くの貴重な発掘をみながら区画整理工事着手前に発掘作業を終了することができました。

このように、今年度予定したほ場整備事業と発掘調査報告書が計画どおり３月中に完了できますことは、県・市教育委員会の適切な指導、処理と、御多忙中調査団に参画され、発掘調査にあたられた皆様の御尽力のたまものと感謝しております。

なお、遺跡発掘にあたり、寿土地改良区の役員、地元関係各位の御協力と御理解により、支障なく調査が行なわれましたことに対して併せて謝意を申しあげる次第であります。

昭和58年３月

長野県中信土地改良事務所長　三　村　敬　一

序

寿地区には県の重要遺跡として周知されている赤木山遺跡群があり、小赤遺跡もその一つになっております。

この度、県営ほ場整備事業を施行するにあたり、所管の長野県中信土地改良事務所から本市教育委員会に当遺跡の緊急発掘調査が委託されたものであります。

本市教育委員会は、団長を日本考古学協会員大久保知巳氏にお願いして小赤遺跡発掘調査団を編成し、調査を行ないました。

調査は、台風や大雨にたたられながらも大久保団長、調査員各位、地元土地改良区関係各位及び地元の歴史研究会の皆さんのご協力により進められました。本書はその結果をまとめたものです。ここに紹介する資料が今後の文化財保護と、寿地区及びその周辺地域の古代史解明の一助になれば幸甚に存じます。

最後に、今回の調査にあたりまして多大なご協力、ご理解を下さいました関係各位に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和58年3月

松本市教育委員会

教育長　中　島　俊　彦

例　言

1　本書は昭和57年8月25日より9月22日にわたって行われた、松本市寿・小赤(こあか)遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2　本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行ったものである。

3　本書の執筆は各調査員が分担して行い、文責は文末に記した。

4　本書の編集は事務局が行った。

5　報告書作成に当っては、遺物整理、実測、トレースに、降旗俊行、島田哲男、滝沢智恵子、山田真一、山下泰永、井口千佳、小口妙子、伊那史彦、藤森幾康、倉科由加理各氏の助力協力を得た。

6　周辺遺跡実地踏査および採集遺物の掲載については、寿・小赤所在古屋人兄氏の全面的なご理解、ご協力をいただいた。記して謝意を表する。

7　出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目　　次

序 ……（i）
序 ……（iii）
例　言 ……（iv）
目　次 ……（v）
　挿図目次 ……（vi）
　図版目次 ……（vi）
第1章　調　査
　第1節　発掘調査に至る経過 ……1
　第2節　調 査 体 制 ……1
　第3節　調 査 日 誌 ……2
第2章　遺跡の立地と地理的環境
　第1節　遺跡付近の自然環境 ……4
　　1　地　形 ……4
　　2　地層とれき ……4
　　3　地形の形成 ……4
　　4　遺跡及び周辺の水系 ……5
　第2節　周辺遺跡 ……9
第3章　調 査 結 果 ……12
第4章　周辺遺跡出土遺物について
　第1節　縄文時代の遺物 ……36
　第2節　弥生時代の遺物 ……42
　第3節　古墳時代の遺物 ……43
　第4節　奈良・平安時代以降の遺物 ……43
　第5節　赤木山遺跡群出土品の提起する諸問題 ……44
第5章　ま　と　め
　第1節　暗渠排水溝址について ……61
　第2節　中世陶磁器について ……62
　第3節　結　語 ……65

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡図 ……7
第２図　東部山麓地帯水田土壌深度分布 ……8
第３図　発掘調査地点位置図 ……11
第４図　Ａ地区平面図 ……12
第５図　Ａ地区暗渠排水溝址実測図 ……13
第６図　Ｂ地区平面図 ……14
第７図　Ａ・Ｂ地区東壁セクション図 ……15
第８図　Ｃ・Ｄ地区平面図 ……16
第９図　Ｃ・Ｄ地区セクション図 ……17
第10図　Ｅ地区グリット図およびグリット東壁断面図…18
第11図　鍛冶屋場遺構実測図および土壙実測図 …19
第12図　鍛冶屋場遺構ピット実測図 ……20
第13図　第IIトレンチセクション図 ……22
第14図　第Ｉ・第IIIトレンチセクション図 …23
第15図　第Ｉトレンチピット群実測図 ……24
第16図　出土遺物実測図(1) ……25
第17図　出土遺物実測図(2) ……26
第18図　出土遺物実測図(3) ……27
第19図　出土遺物実測図(4) ……28
第20図　出土遺物実測図(5) ……29
第21図　周辺遺跡出土遺物実測図(1) ……45
第22図　周辺遺跡出土遺物実測図(2) ……46
第23図　周辺遺跡出土遺物実測図(3) ……47
第24図　周辺遺跡出土遺物実測図(4) ……48
第25図　周辺遺跡出土遺物実測図(5) ……49
第26図　周辺遺跡出土遺物実測図(6) ……50
第27図　周辺遺跡出土遺物実測図(7) ……51
第28図　周辺遺跡出土遺物実測図(8) ……52
第29図　周辺遺跡出土遺物実測図(9) ……53
第30図　周辺遺跡出土遺物実測図(10) ……54
第31図　周辺遺跡出土遺物実測図(11) ……55
第32図　周辺遺跡出土遺物実測図(12) ……56
第33図　周辺遺跡出土遺物実測図(13) ……57
第34図　周辺遺跡出土遺物実測図(14) ……58
第35図　周辺遺跡出土遺物実測図(15) ……59
第36図　周辺遺跡出土遺物実測図(16) ……60

図　版　目　次

口　絵　石冠・垂れ飾り
図版１　遺跡周辺 ……67
図版２　Ａ地区全景及び暗渠排水溝址断面 …68
図版３　Ｂ地区暗渠排水溝址その１ ……69
図版４　Ｂ地区暗渠排水溝址その２ ……70
図版５　Ｂ地区暗渠排水溝址その３ ……71
図版６　Ｂ地区暗渠排水溝址その４ ……72
図版７　Ｃ・Ｄ・Ｅ地区全体図及び調査風景…73
図版８　鍛冶屋場遺構全体図及び第Ｉ第IIトレンチ …74
図版９　出土遺物その１ ……75
図版10　出土遺物その２ ……76
図版11　出土遺物その３ ……77
図版12　周辺遺跡出土遺物(1) ……78
図版13　周辺遺跡出土遺物(2) ……79
図版14　周辺遺跡出土遺物(3) ……80
図版15　周辺遺跡出土遺物(4) ……81
図版16　周辺遺跡出土遺物(5) ……82
図版17　周辺遺跡出土遺物(6) ……83
図版18　周辺遺跡出土遺物(7) ……84
図版19　周辺遺跡出土遺物(8) ……85

第1章　調　　査

第1節　発掘調査に至る経過

昭和51年5月22日（金）晴、中信土地改良事務所関連事業課丸山太一主査、市教育委員会に来庁。県営ほ場整備事業笹賀地区計画地域内の埋蔵文化財発掘調査の地点問合せの折、小赤地区のほ場整備計画のあることを聞く。

6月10日（水）晴、寿小赤、小池地区埋蔵文化財発掘調査打合せ。於　市教育委員室。出席、県文化課臼田武正指導主事、中信土地改良事務所担当係長他3名、市耕地課柳沢主査、市教委、田堂課長、神沢。今年度小池地区内の工事を行うが、耕土の切り盛り1m以下ならば遺跡は保護されるのではないか、工事中基盤の切り盛りの際は立合調査を行う。小赤地区については水田の畦畔抜き程度であろう。

8月20日（木）晴、57年度実施予定の県営ほ場整備にかかわる埋蔵文化財の保護について、県文化課郷道哲章指導主事、中信土地改良事務所岩崎氏、市耕地課河野係長、横内主査、寿土地改良区川上理事長、市教委神沢、百瀬出席。小赤地区については50×150mあまりが遺跡にかかるので調査を要する。発掘調査面積はこのうち10%を予定、期間は57年7月～9月の間である。北原遺跡では西端の石畑が削土の折に立合う必要がある。松山遺跡については道路面と水田面との比高差が5m余りあるので、施工時に立合い調査とする。

第2節　調査体制

調査団

団　長　大久保　知　巳（日本考古学協会員　会社員）

主　任　神　沢　昌二郎（日本考古学協会員　市教委）

調査員　西　沢　寿　晃（日本考古学協会員　信州大学）

三　村　　肇（長野県考古学会員　会社員）

横　田　作　重（長野県考古学会員　会社員）

降　旗　俊　行（長野県考古学会員　松本社会保険事務所）

直　井　雅　尚（長野県考古学会員　市教委）

太　田　守　夫

協力者　島田哲男、瀬川長広、吉沢酉巳、三沢元太郎、大出六郎、高野健介、古屋人兄、荘　秀也、赤羽千鶴、清水千春、白川良章、上条国雄、田中久雄、沖津和子、倉科由加理、滝沢智恵子、山下泰永、三村竜一、山田真一、千村秀彦、井口千佳、山辺歴史研究会

事務局　田　堂　　明（社会教育課長）

神　沢　昌二郎（社会教育課文化係長）

百　瀬　　清（社会教育課文化係主事）

熊　谷　康　治（社会教育課文化係主事）

小　林　一　博（寿公民館主事）

第3節　調査日誌

●1982年8月25日（水）晴、雨　　新村秋葉原遺跡発掘現場より資材、器具運搬。夕刻雨。犀川興産によりバックホー、現場へ搬入。

●8月26日（木）晴　　バックホーにてA地区表土および第二層まで剝ぎとる。第二層より土師質土器片、須恵器片、古銭半欠（皇宋通宝）など検出するも遺構は不検出。他にテントの整理を行い、田の畦畔ブロック搬出も行う。

●8月27日（金）晴　　昨日に引き続きバックホーによる表土除土作業、おくれている田の畦畔ブロック運び出し。除土中、須恵質土器片等少量検出。

●8月28日（土）晴　　A地区南側田（B地区）表土剝ぎ。東西にビニール・パイプ、幅約30cmの板を張った暗渠排水溝、礫のつまった排水溝等が検出される。しかしこの暗渠は新しく、ビニール・パイプは昭和20年代、板の張った暗渠は先端には土管で接続してある。他に更に南へC、D地区、水田西側に南北150mに幅2.20mで第Ⅰトレンチ、東西には80mの南側のトレンチ(第Ⅱトレンチ）と約30mの北側のトレンチ（第Ⅲトレンチ）を入れる。

●8月29日（日）薄曇　　全員で第Ⅲトレンチ東端拡張部に入る。10数個のピット群検出。第1号ピット群とする(後に鍛冶屋場遺構とする)。他に元豊通宝1枚、青磁片4片、B地区上げ土より黒曜石製の有柄石鏃検出。ⅢT北壁、東壁、ⅡT北壁のセクション測図。

●8月31日（火）晴のち曇　　午前中第Ⅲ東拡のピットたち切り、−40cmで砂層になる。測図写真撮影。ⅡT及びⅠT北壁のセクション測図も併行して行なう。午後、ピット群北西隅に落ち込みが見つかりこれを拡張する。3時頃新村公民館長、支所長が古墳移転復元作業の打ち合せに見える。

●9月1日（水）晴　　きのうに続き第Ⅲ東拡の落ち込みを追う。炭化物、焼土点在。ⅠT、ⅡTのセクションも測図。

●9月2日（木）曇　　第Ⅲ東拡落ち込みの実測、セクション測図。

● 9月3日（金）薄曇　第III東拡ピット群及び全体写真撮影。落ち込み実測。A地区南側に水路検出。拳大の石が幅40 cmで東西に通っている。平板測図。直井、山下は古屋氏宅で土器の実測。

● 9月4日（土）晴　午前中A地区遣り方測量準備。午後列石測図。B地区遺構検出。古屋氏宅での土器実測も平行して続行。

● 9月5日（日）快晴　A地区列石測図。B地区遺構検出及び断面図とる。古屋氏宅では周辺遺物測図。

● 9月7日（火）晴　B地区平板測量。C地区遺構検出。

● 9月8日（水）晴　B地区平板測量。C地区遺構検出及び西側セクション測図。南側部分に14コのピットあり。

● 9月9日（木）薄曇　A地区南側よりB地区全体写真撮影。D地区遺構検出。

● 9月10日（金）曇　C地区、D地区平板測量。及びD地区セクション測図。A、B地区の溝たち切り。

● 9月11日（土）曇　昨夜の雨でピットに水がたまり午前中排水作業。C地区ピットたち切り。D地区セクション測図。

● 9月14日（火）曇　記録的な豪雨となり各トレンチ満水のため朝のうち排水作業。10時より北洞下堤下の古屋晶敏氏の畑にグリットを5つ設定し掘り始める。東側南より1G、2G、3G、西側南より4G、5Gとする。2Gで須恵器1片、3Gより石鏃1片、黒曜石2片検出。

● 9月15日（水）晴　4G、5G発掘。測図。

● 9月16日（木）晴　午前中E地区埋め戻し、午後テント撤収。

● 9月17日（金）晴　古屋氏宅にて測図。器材運搬。

● 9月18日（土）曇のち小雨　古屋氏宅にて測図。

● 9月20日（月）小雨　古屋氏宅にて測図。

● 9月21日（火）晴　午前中B地区たち切り写真撮影。午後古屋氏宅にて測図。

● 9月22日（水）晴　朝A、D地区写真撮影。のち古屋氏宅にて測図。

●10月以後　遺物整理、測図、原稿執筆等の作業を行う。

第２章　遺跡の立地と地理的環境

第１節　遺跡付近の自然環境

１　地形

本遺跡は、赤木集落を南北に走る、県道新茶屋塩尻線の西側沿に広がっている。地形からみると、北流する田川及び小田川の右岸、田川現河床より500m（比高２ｍ以下）小田川より200m、田川筋と考えられる堆積面上にある。遺跡の東は、ほぼ南北に走る赤木山の丘陵（東側はN30°W。比高30～60m。遺跡東は40～50m）の山脚へおよそ200mで達する。用水せぎの小田川に沿って、北へ1000分の７のゆるい傾斜をもった水田地域に当っている。赤木山の西側には、赤木山を切って（先行河状）、小田川に合流する北洞・中洞・南洞川の堆積物や、小規模のがいすい堆積物がみられるが、遺跡やその周辺に、その影響は及んでいない。

２　地層とれき

遺跡及びその周辺の地層は、上より粘土層（20～25cm・耕土）、かっ色粘土層（10cm・鉄分の沈澱集積）、以下砂れき層・砂れき土層からなっている。れきの大きさは、中れきが大部分で、20×15×10cmが最大である。形は亜角れき、一部亜円れきで、田川や鉢伏山地からの河流（鉢伏山地からのものは亜角れきが多い）のものと同様である。

れき種は古生層起源の粘板岩、砂岩（硬（こう）砂岩）チャート、けい岩、輝緑ぎょう灰岩と、第三紀層（塩嶺（れい）累層・内村累層）の石英せん緑岩、ひん岩、緑色ぎょう灰岩、安山岩、集かい岩、砂岩、れき岩及びホルンフェルス（接触変質岩）である。ときどき、れき岩や集かい岩から抜けた粘板岩・チャートの小円れきがみられる。これらのれきの量は、古生層・第三紀層起源ともほぼ同じである。特に大きなものは、古生層起源の砂岩（硬砂岩）で、遺跡でも利用されている。れきの堆積状況は、集積の多い部分と少ない部分に別れているが、集積の連続方向でみる限り流れの方向は南北性で、田川の流れと一致している。

３　地形の形成

以上の状況を田川の現河床と比較してみると、れきの形・れき種はほとんど同じで、大きさは現河床の方がやや大きい。したがって遺跡及びその周辺は、田川筋の堆積と考えられる。しかし、周

辺の小地形や微地形、あるいは水系を調べてみると、現河床に直接連続するものでなく、旧田川の堆積物の可能性が強い。下部は旧田川、上部は後に小田川によって運ばれたものである。古生層起源のれきは再堆積、第三紀層起源のれきは再堆積．あるいは小田川やこれに合流した小河流によって運ばれたものである。遺跡の面はこの面と考えられる。

また、赤木集落や塩尻市向井集落のある、田川右岸の地形面を観察すると、(1)現河床面(2)小田川面(3)現河床と小田川の間の高まり面が分類できる。これらの面はいずれも、東西橋上流1 km付近に起点をもち、比高や傾斜度からみて(3)—(2)—(1)の順に形成されたものであることが考えられる。(3)の面には、塩尻市向井の集落遺跡（平安中期以降）があり、本遺跡（中世）より1 mほど高い。(3)と(2)の面は、形成後、現河床の流れの復活により、浸食やはん濫の影響を多く受けることになるが、向井の集落遺跡の立地からみて、平安期以降は安定した地形面であったと考えられる。次に述べるように湿地性であるため、居住地として適当であったか問題が残る。

4　遺跡及び周辺の水系

現在の用水は、田川と直接関係をもっていない。東の内田地区を流下する小河流（せぎ沢—北洞川、洞沢・とうね沢—中洞川、小場ヶ沢川—南洞川、境川—小田川）や、ため池が利用されている。

遺跡やその周辺の水田で特徴的なことは、極めて地下水が浅いことである。湿地—湿田となって、水神の池（新設田川高校敷地）の範囲に及んでいるという。当地区の青木尊樹氏によると、地下水は極めて浅く、湿田改良のため暗渠（きょ）排水の施設が広く施されている。またこの地下水は浅層を流れているためか、夏季などの渇水期には流れが止まる。かつてはハンノキが茂っていた。地区の井戸の深さは1.8～3.6m位であるという。

実際に、遺跡内にも暗渠が発見され、相当量の水がN30°Wの方向に流れていた。

地質上では、当然堆積層の浅い部分に、不透水層の存在が考えられるが、今回はそこまで調査が及んでいない。したがって、他の機会に調査した周辺の資料によって、不透水層を推定すると、次の二つがあげられる。

1．田川の右岸の扇状地状の地形面でみられるように、水田の下部に強い粘土層の不透水層ができると、地下水はここに停滞し、順次下に向って流れる。ゆう水となって、湿地度を増したり、傾斜の小さい場所では湿田となる。この場合、不透水層が

　a．ローム層である。

　b．沖積土とローム質土の混合堆積物である。

　に分けられる。塩尻市の堀ノ内・大小屋・一つ家・飯田村・桟敷等は後者で、耕土に続く含れき土層の下にこの粘土層があって、湿田となるので、暗渠によって排水が行われていた。

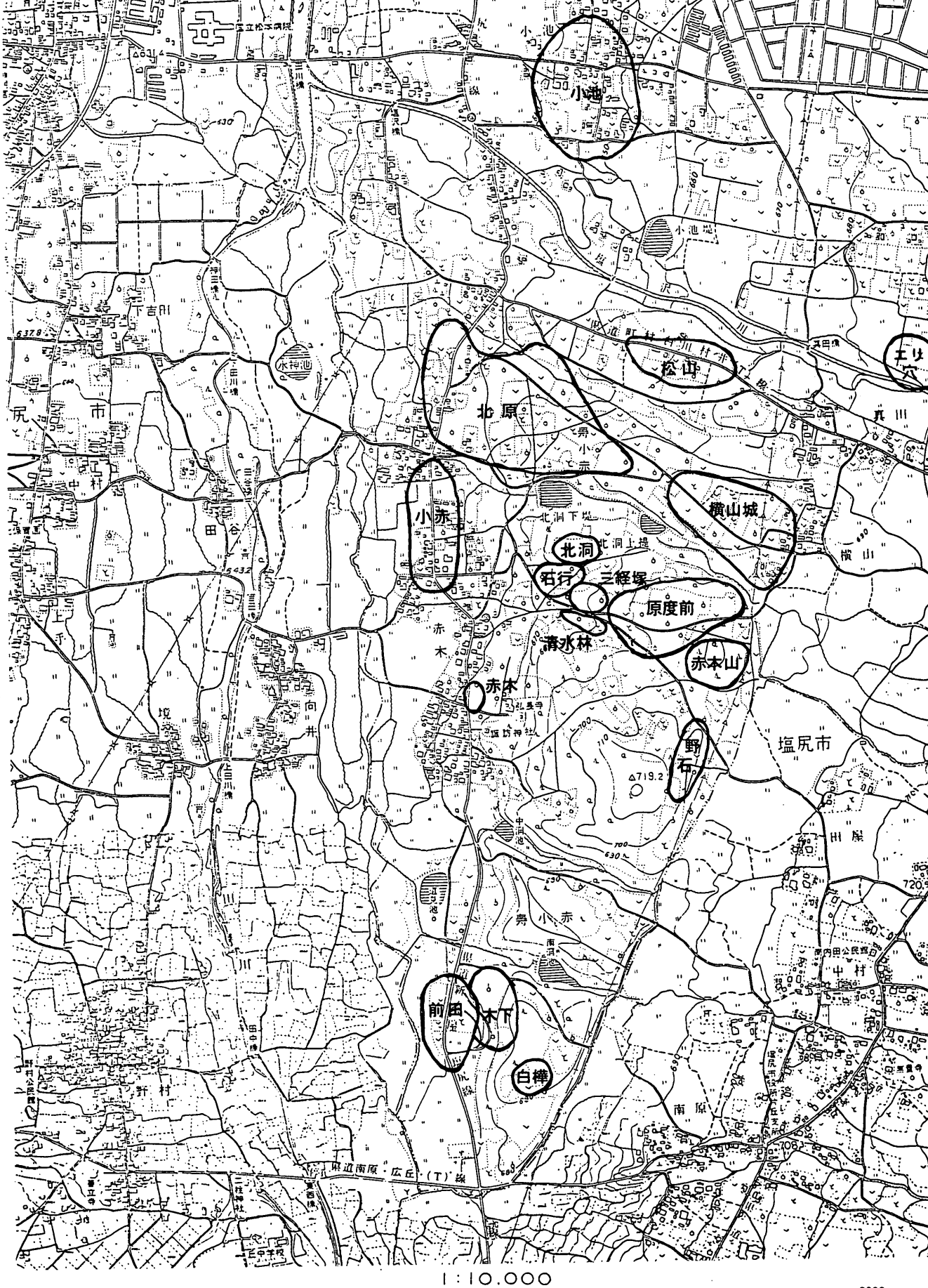
2．赤木山の下部層をつくっている、いわゆる赤木層である。

　赤木山は、電探の結果、内部に石英せん緑岩やひん岩の存在は予想されていない。粘土層で構

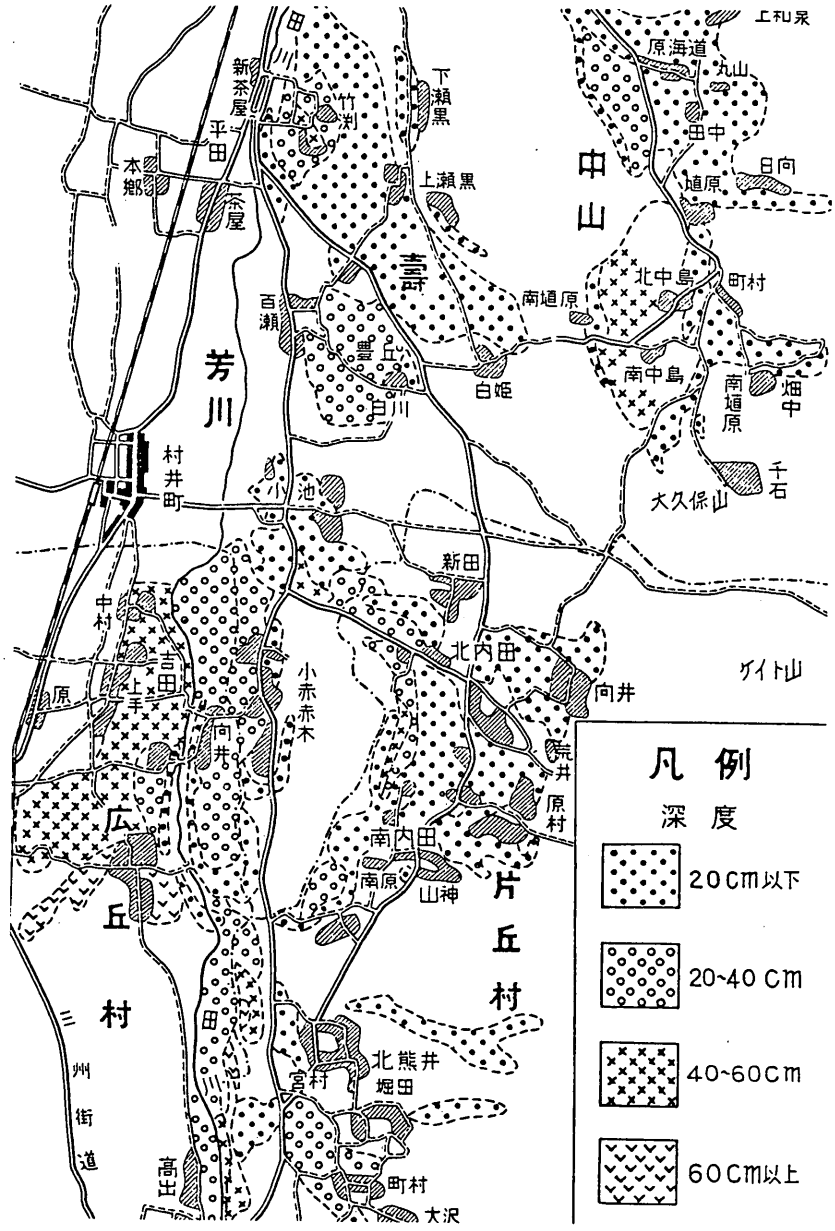
成されている。赤木層はローム質の河成堆積物で、石英せん緑岩のれきが多い、5 m以上のローム質水成角れき層である。青いれきと泥の層で、一部ではかなりち密になっている。上部には20 cmの水成ローム層、1 mを越える風成ローム層、最上部にローム質かくれき層がのっている。

以上を考察してみると、1－bが最も可能性が強い。すなわち、現在赤木層の厚さ、連続状態が明らかでなく、赤木山が浸食台地か断層台地かの結論もでていない。それによって赤木層の堆積環境も異なるので、不透水層の所属は速断できない。ただローム層や赤木層の下部にある地下水であると、被圧水になる。その場合山脚近くにゆう水することが多く、かれることが極めて少ない。ローム層の上を流れることは、地形上ローム層の連続が認められない。地下水が浅層を流れること。渇水時には、内田地区より流下する小河流の水量と関係があることから、上記の小河流や旧田川による、1－bの状態と考えられる。今後地域の地層のボーリング資料が豊富になることを待ちたい。したがって、この湿地状の土地は居住地として、自然堤防状の高まりにのった向井集落や、がいすい・小扇状地状の高まりにのった赤木集落に比較して、かならずしも適地ではなかったであろう。

（太田守夫）


小池
松山
北原
小赤
横山城
北洞
石行
三経塚
原度前
清水林
赤本山
赤木
野石
塩尻市
前田
木下
白樺
南原
1:10,000
0
200
1000
2000m

第１図　周辺遺跡図



第2図　東部山麓地帯水田土壌深度分布

第2節　周辺遺跡

小赤遺跡は松本市東部の山麓遺跡の1つで赤木山の西裾にあり、北流する田川より450m東に位置し、標高は645mである。遺跡の現況は人家に連なる畑および水田である。

遺跡の範囲は県道新茶屋塩尻線をはさんで東西150m、南北350mあまりである。

赤木山は全山が遺跡ともいえる程遺物の出土が多く、その時期も縄文中期を主体として縄文前期から後・晩期、弥生時代中期、平安時代と、長期にわたる遺物の出土をみている(1)。

赤木山の南側から遺跡名を挙げると、白神場（白樺）、前田、木下、南洞、野石、赤木、赤木山、原度前、清水林、三経塚、石行、北洞、小赤、北原、唐沢、野田、横山城等である。

前田、木下遺跡では多量の打製石斧が、原度前遺跡では中期初頭の土器の他、口絵、第36図97に図示した石冠が採集されている。北原遺跡でも打製石斧、磨製石斧等の他、有孔玉器（口絵、第36図98）が出土している。更に清水林遺跡では、石鏃、石斧等と共に独鈷石が出土している。石行遺跡では縄文晩期の土器片が多量に採集されている(2)。横山城遺跡では弥生中期末の住居址が検出されている。

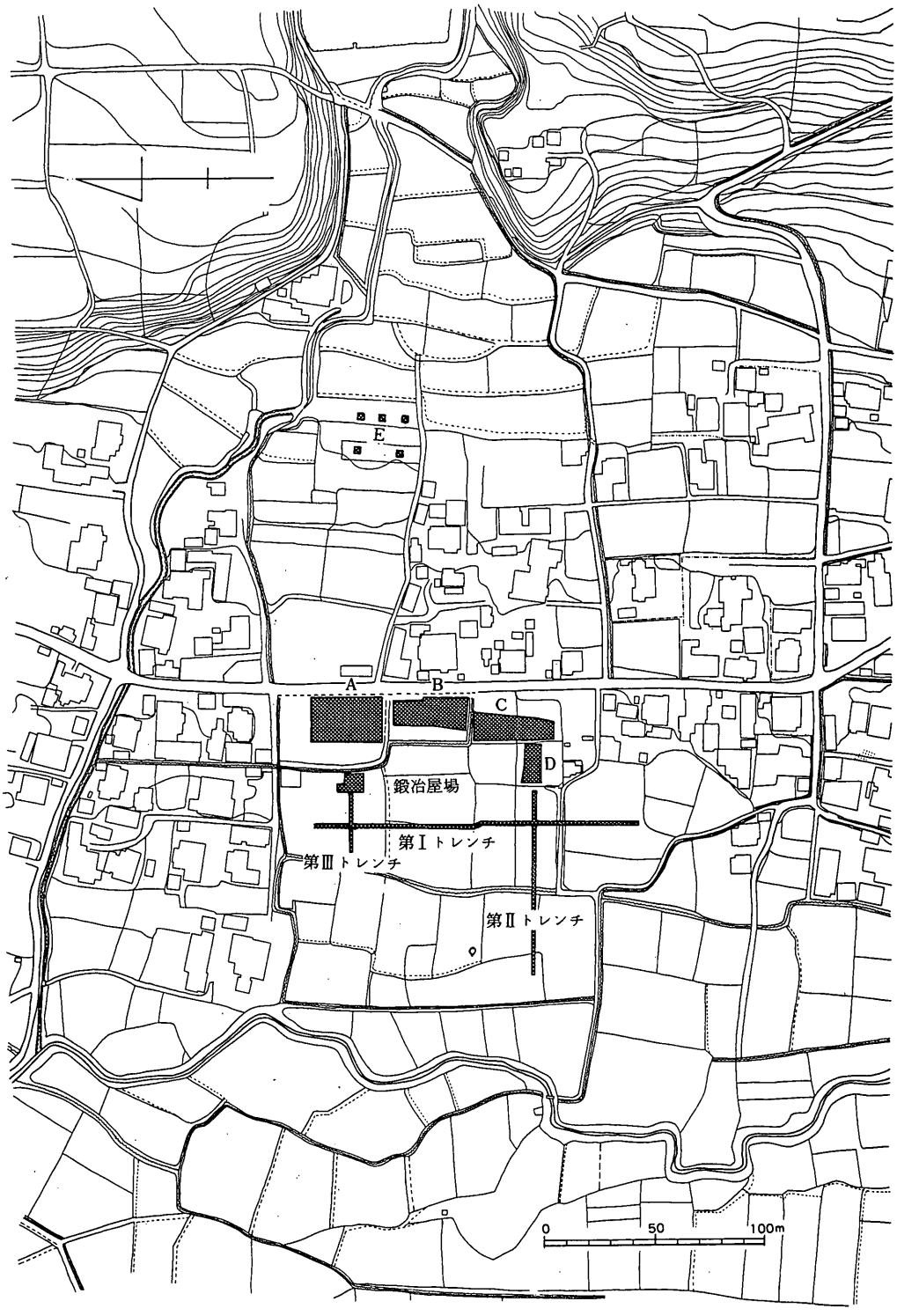
赤木山の東麓には現水田との接線近くに土師器、須恵器の出土が南北約1 Kmにわたってみられ、更に東隣内田地区には標高800m余の山林中に縄文早期の押型文土器を出土した五斗林遺跡があり、その南接する雨堀遺跡では縄文中期初頭より後葉に至る住居址19軒と小竪穴が多数検出され、堀と呼ばれている窪地内からは多量の縄文中期初頭の土器片が出土している。

雨堀遺跡より下って内田神社周辺は宮下遺跡であり、縄文の遺物が採集されている。更にその北側には長泉寺、くねの内遺跡などが続いており、現内田保育園周辺では縄文中期と思われる土器片と共に焼土が検出されたといわれている。内田運動場南東には釈迦堂遺跡があり、ここからも縄文中期の土器片の出土があった。北西の塩沢川右岸に接する畑からは縄文後・晩期のエリ穴遺跡があり、昭和42年から45年にかけて藤沢宗平氏が発掘調査を行い、多数の耳飾りを検出したことで知られている。目を西側に転ずれば、小赤遺跡の南西約400mに57年度塩尻市で発掘調査した向井遺跡があり、平安時代の住居址85軒の他、柱穴群が検出され、多数の土器・鉄器の出土をみた。更に田川を渡って南西1.7Kmあまりの丘中学校周辺の高出遺跡他では旧石器をはじめ、弥生時代の方形周溝墓、平安時代あたりまでの遺構が検出されている(3)。松本市に戻って寿、小池遺跡では土師器、須恵器片が出土しており、百瀬遺跡では竪穴住居址からいわゆる百瀬式土器が出土し、弥生土器を考える上で重要な資料となっている。他に田川団地の寿田町周辺でも土師、須恵器の表面採集がなされている。

(1)寿小赤在住の古屋人兄氏によって赤木山周辺の遺物が採集されており、同氏の教示によって記したところが多い。

(2)藤沢宗平氏「一志茂樹博士喜寿記念論集」――松本盆地における縄文文化から弥生文化への推移について――昭46. 6.

(3)塩尻市、平出考古博物館小林康男氏の教示による。



第３図　発掘調査地点位置図

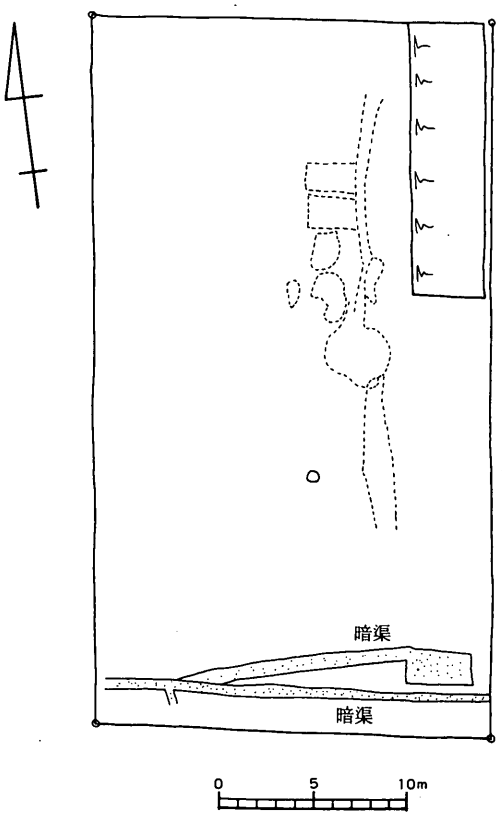
第3章　調査結果

概　　要

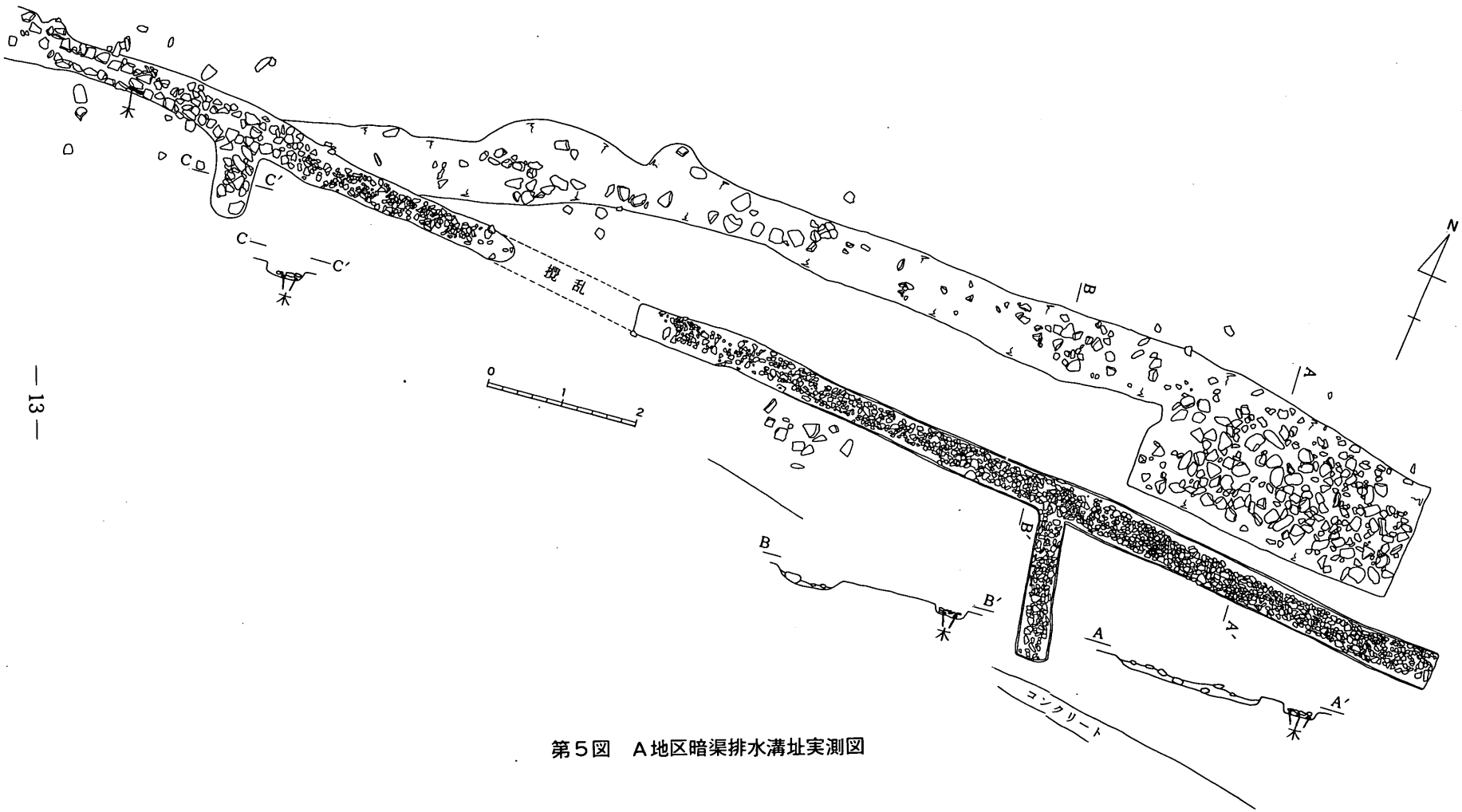
県道西側の水田を主体として、A～D地区及び東西トレンチ2本、南北トレンチ1本を設定した。主なる遺構はA，B地区の排水暗渠と第Ⅲトレンチ拡張部の鍛冶屋場とも思える遺構のみであった。更に県道東側の畑をE地区としグリットをあけたが遺構には当らなかった。

A地区（第4・5・7図　図版2）

遺　構　東西21m、南北37mの範囲を掘った。地層は耕作土、耕作土の溶脱層、茶褐色に黄色の粒まじりのもの、黒褐色土層と続く。遺物検出面は第Ⅲ層の上面より30cm以下であり南側に2本の東西に走る礫列が検出された。1本は巾80～90cmで、深さ10cmあまりの溝状遺構でその内部には10～20cm大の礫が粗らに入っていた。溝の東端には東西4m、南北2m余りの集石があり、礫の大きさも10～30cm大と大きく、あたかも集水桝としての遺構のごとく思えた。しかしその礫の厚さは薄く、部分的に1段分、約15cm程度であった。そのすぐ南に並行する礫列はB地区内の暗渠とつながるもので、巾50cm深さ15cm余りのこぶし大の石を入れたもので、礫を除くと径10cm余りの丸太を二本並べてあり、明らかに排水用の水路であることを示していた。遺物の検出はあったが、暗渠排水用の溝以外の遺構には当らなかった。



第4図　A地区平面図



第５図　Ａ地区暗渠排水溝址実測図

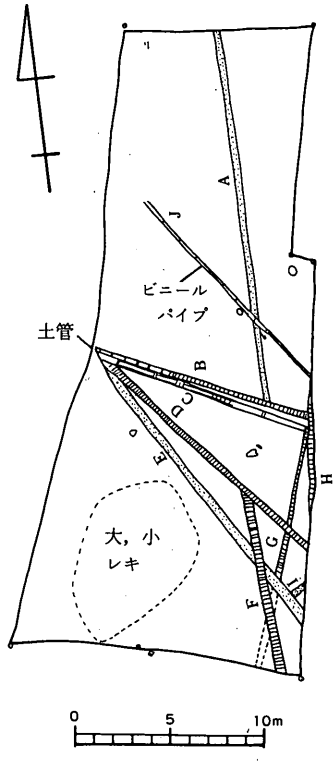
遺　物　全般的に地表下30 cm あたりより土師質土器片が出土。暗渠の礫列中より青磁片(第16図18)、鉢と思われる白瓷系陶器（第16図９）、糸切りで籾痕のある厚手の甕底部（第17図23)、と共に波佐見窯のくらわんか碗に酷似した染付茶碗が出ている(第18図50)。他に無釉の陶器、常滑系の甕破片などが出土している。なお半欠の皇宋通宝及び元豊通宝（第20図38，39）各１枚が単独に出土している。

Ｂ地区（第６・７図　図版３～６）

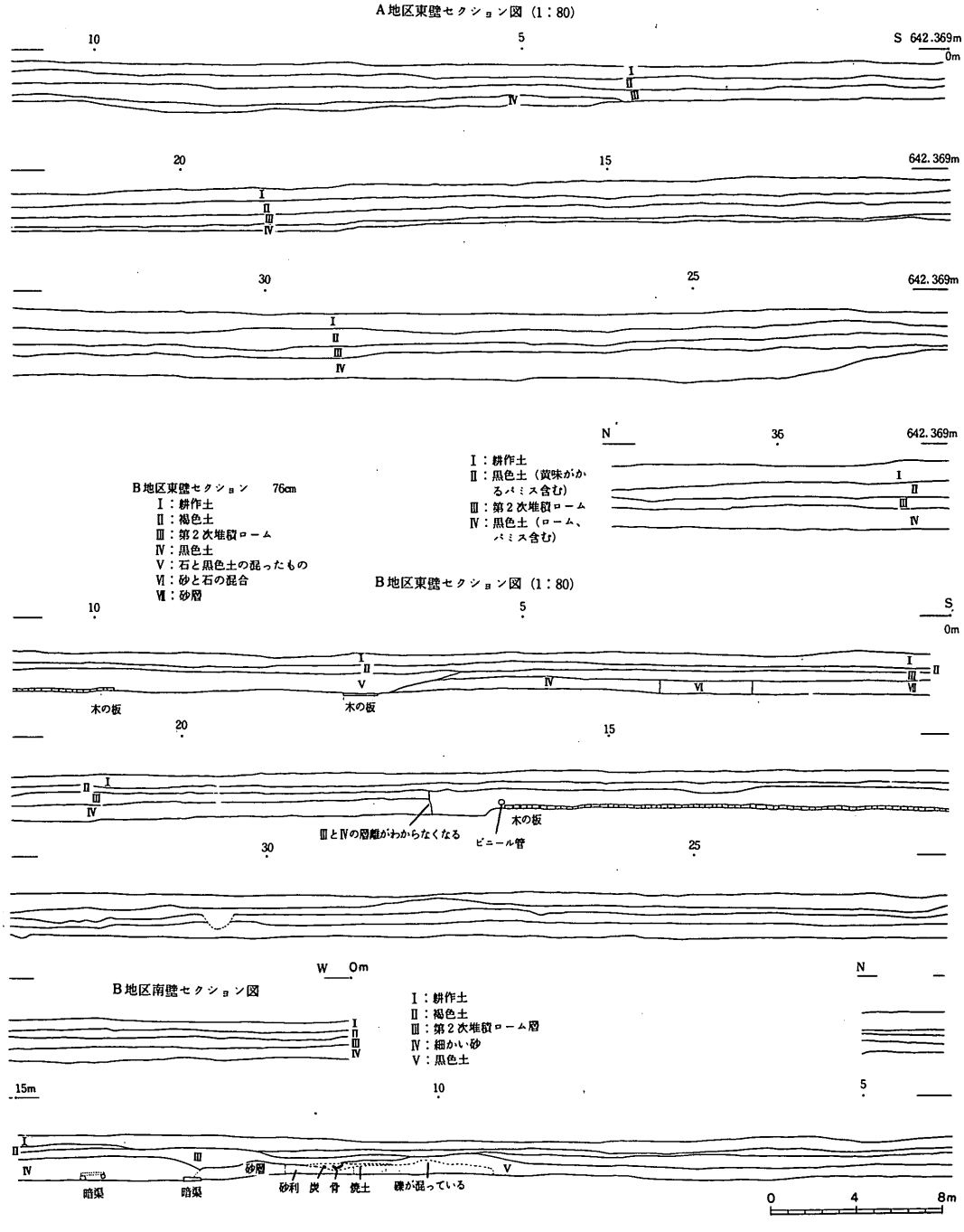
遺　構　Ａ地区の南側に続く水田で東西10～15m、南北32m 余りあり、地層は南側部分が砂礫層になり、旧河川であることを示す。Ｂ地区の東側中央部分の地層は耕土15 cm、その下30 cm 余りには小礫を含む茶褐色土層で、その下層は砂礫層になる。

遺構は10本の暗渠排水溝が東西、南北に走り、北側、西側水田に続いている。溝の巾はほぼ40 cm 余で、作り方によって３つに分けられ、そのうちＡ、Ｅ、Ｉはこぶし大の石が入っているもの、Ｃは木の樋を使ったもの、Ｂ、Ｄ、Ｆ～Ｈは割板を蓋に使っているもの、他にＪは現代のビニールパイプを使っているものである。Ｂの西側には土管が接続されており、板を使用した溝は径10 cm 内外の丸太を２本並べ、それに蓋板を釘付けしてある。

遺　物　Ａ地区とほとんど同様で、白瓷系の甕片及び鉢片、青磁碗片などで、暗渠排水溝と遺物とは関連がない。白瓷系の甕（第16図13）青磁片などより遺物は中世のものと思われる。他に縄文時代のタタキ石、石鏃及び剝片礫(第19図１～３)、中世のものと思われる砥石（第19図９）の出土をみているが、いずれも単独出土である。



第６図　Ｂ地区平面図



第7図　A，B地区東壁セクション図

C地区（第８・９図　図版７）

遺　構　B地区と農道を隔てた南側で東西約10m、南北32mの範囲で北端の地層は耕作土が20cm、黒褐色土層が45cm～50cm、それ以下はやや褐色の土層である。しかし南側部分は砂利層があらわれ、南西部では第II層の下は厚い砂礫層になっている。

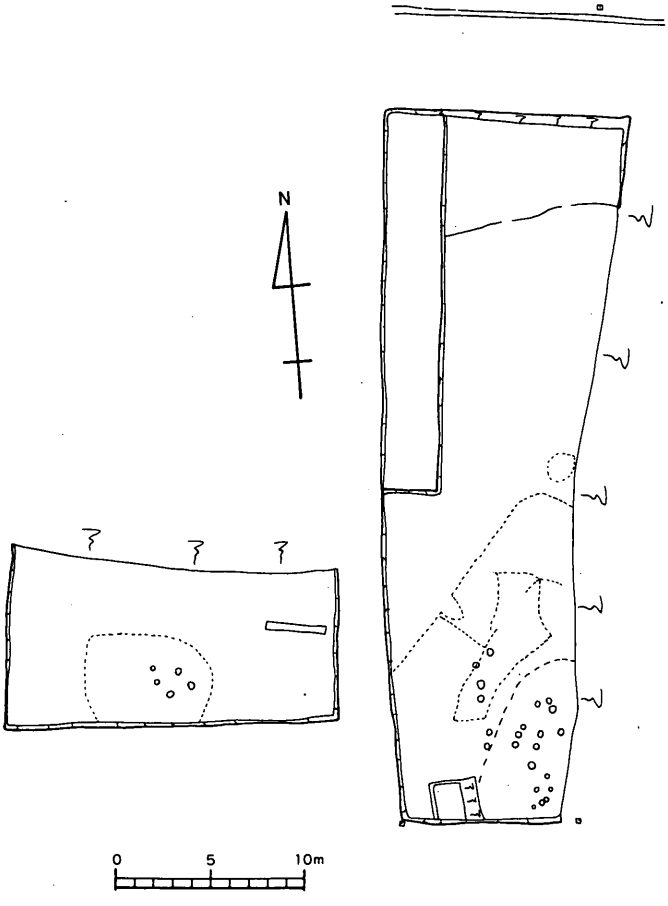
当地区では南寄りに径10～30cm、深さ５～30cmの小ピットが不規則に22本あったがその性格はわからない。

遺　物　土師質土器片（第18図45）白瓷系鉢片（第16図10）、須恵質甕片（第17図24）など，中世の遺物の他に鉄釉擂鉢（第18図48）などの少量の破片が検出されたのみである。

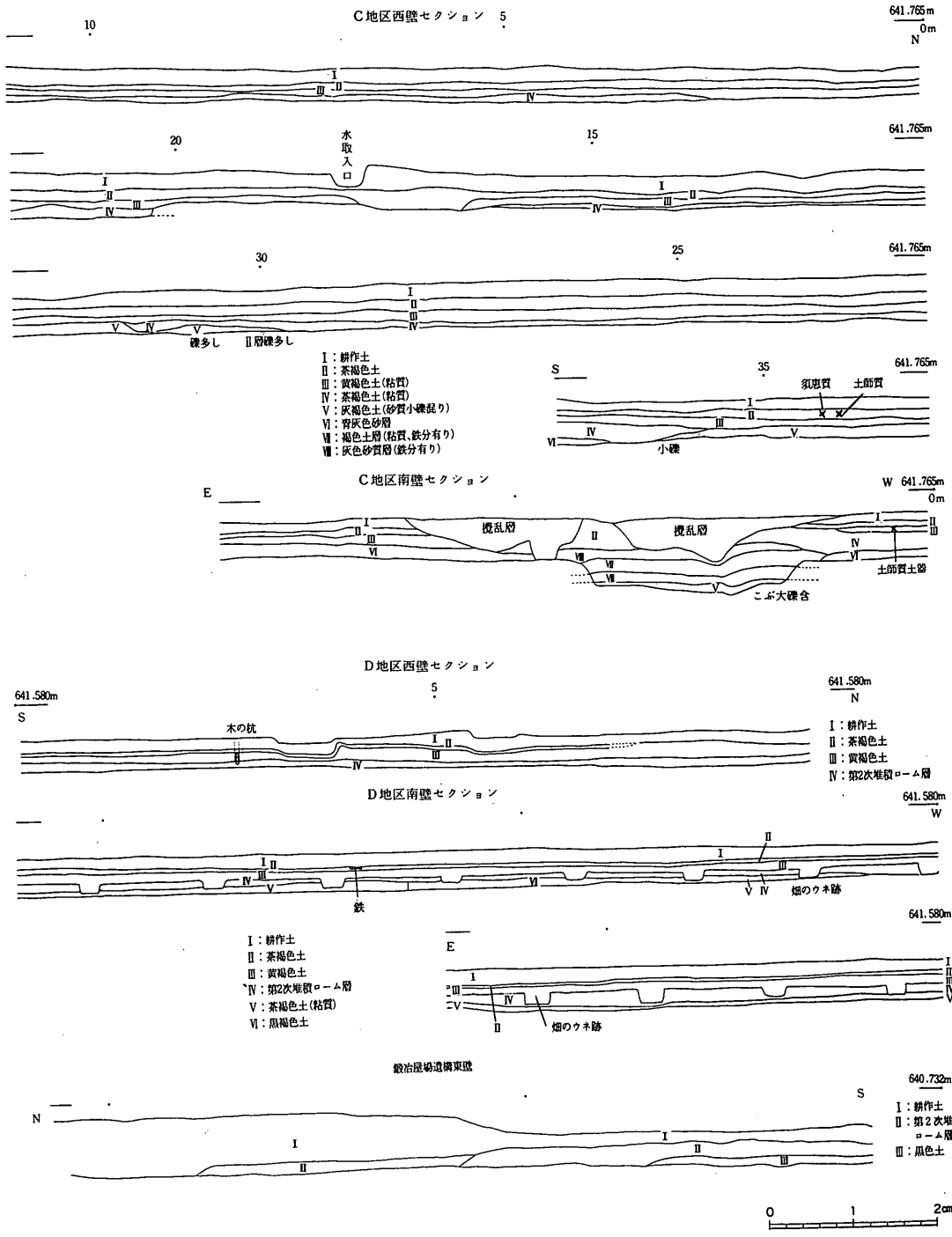
D地区（第８・９図　図版７）

遺　構　C地区の西側で東西18m、南北８ｍの範囲である。中央南側に５本の小ピットがあり、その大きさは10～30cmで、深さは10～20cmである。ピットのみでこれが何の遺構かは不明である。畑の畝が南北に10条余り通っている。

遺　物　天目茶碗破片、鉄釉陶器破片、染付破片、コバルト色の仏器片（第18図52）などが出ている。



第８図　C，D地区平面図

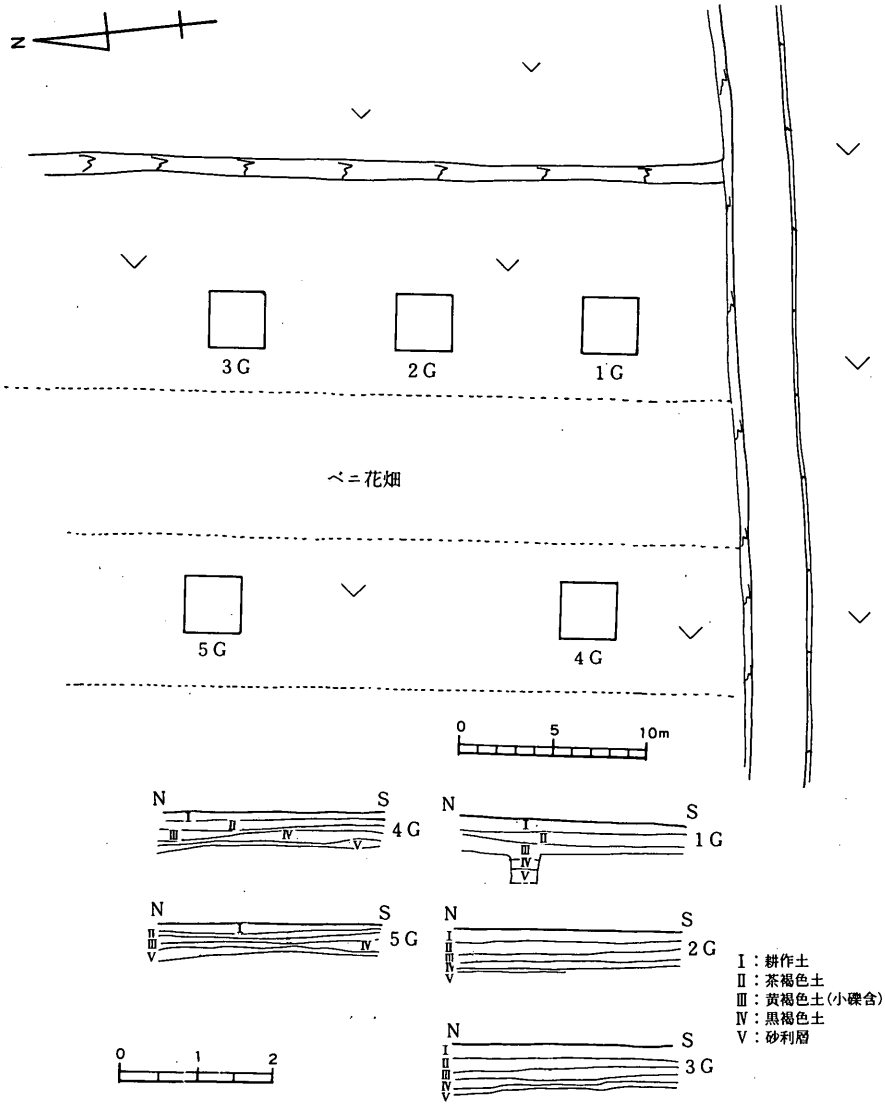


第9図　C，D地区セクション図

E地区（第10図　図版７）

遺　構　県道東側の北洞堤下の西傾する畑をE地区とし、そこに３×３ｍのグリットを５ケ所あけた。第１グリットは炭焼き跡と思える炭、焼土の落込みがあったのみである。第２～５グリットについても遺構には当らなかった。

遺　物　表面採集をも含めて、白瓷片、須恵質土器片の他、現代の文様を印刷した茶碗などが出土している。（第18図51）

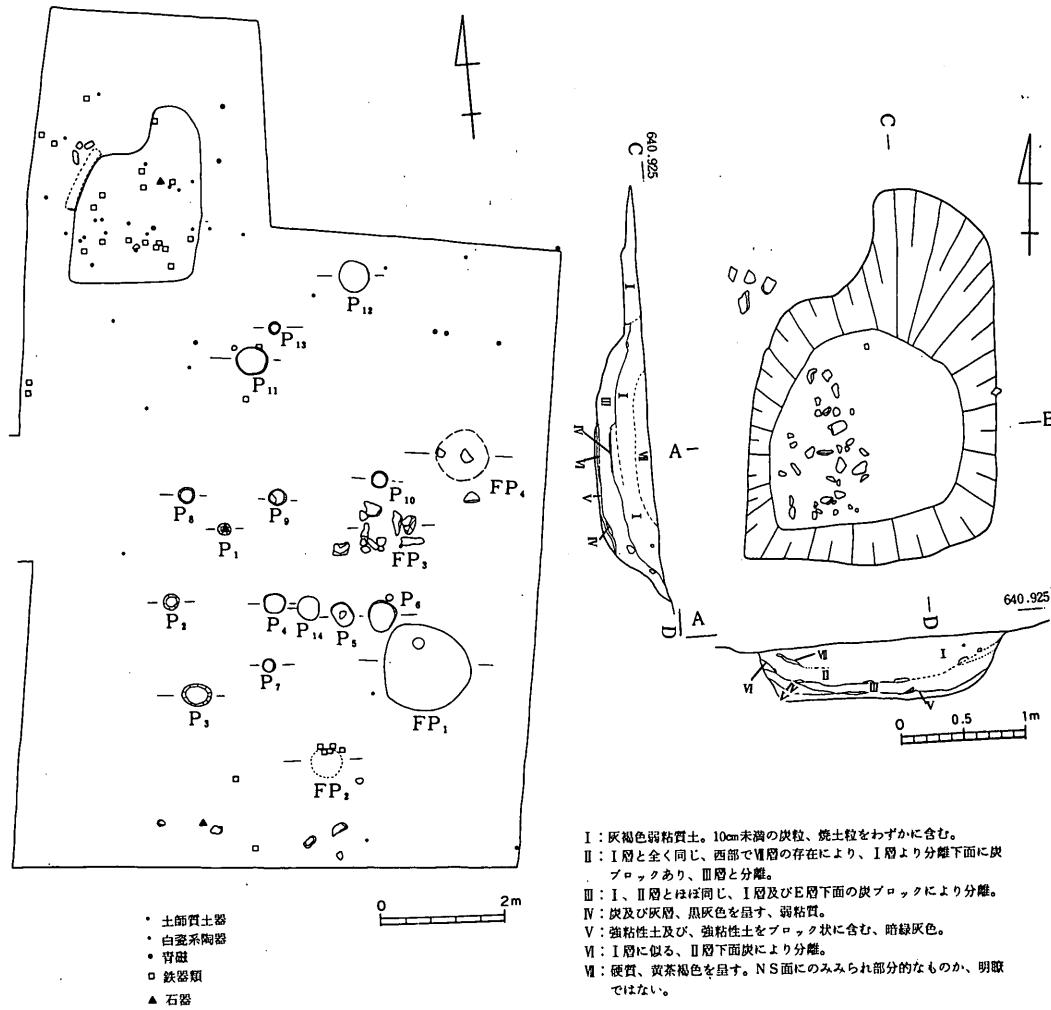


第10図　E地区グリット図およびグリット東壁断面図

鍛冶屋場遺構（第11・12図　図版８）

遺　構　Ａ地区の西側水田で第Ⅲトレンチの東端にあたる。東西８ｍ、南北10ｍ余りでその西北に２ｍ程の拡張部分がある。

本址のほぼ中央に１×0.8ｍ余りの集石があり、その周辺に直径20cm から50cm のピットが14本あり、他に焼土、炭化物を含む落込みが三ケ所にみられた。ピットは P_1、径22×20cm　深さ42cm 以下順に P_2、24×25—43、P_3、50×38—21、P_4、36×34—70、P_5、33×42—46、P_6、44×50—13、P_7、



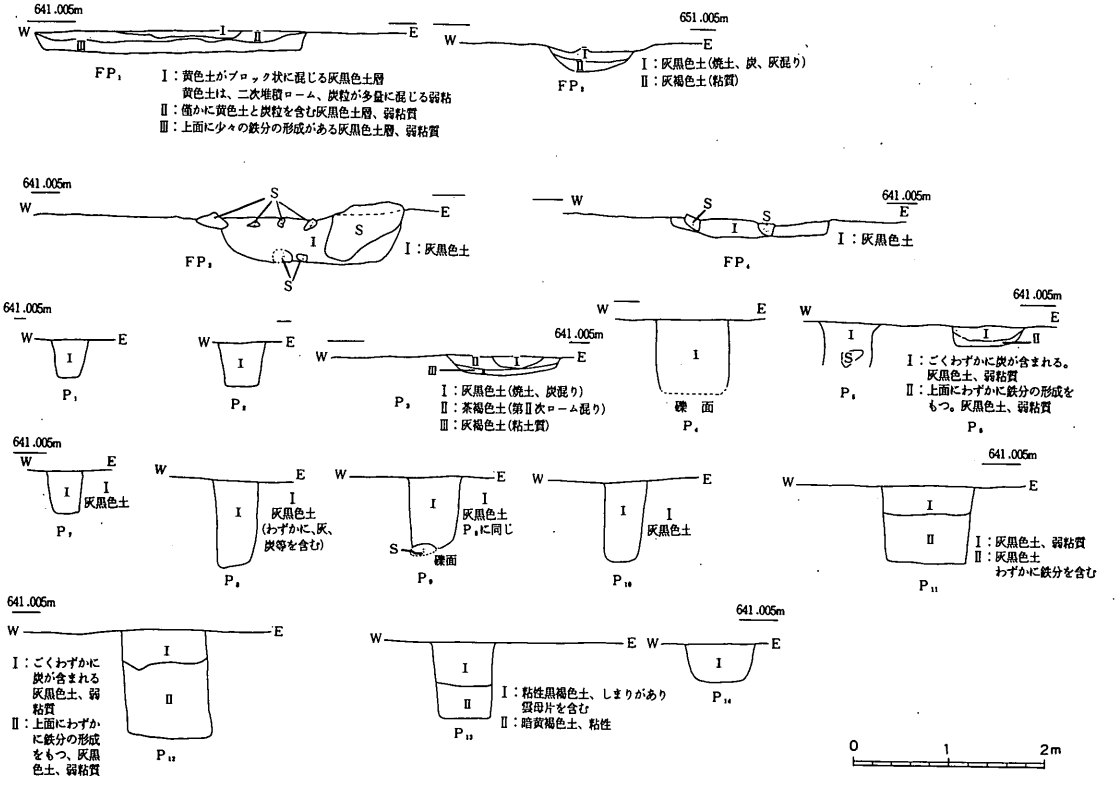
第11図　鍛冶屋場遺構実測図および土壙実測図

22×22—45、P_8、24×24—93、P_9、28×26—74、P_{10}、26×26—83、P_{11}、50×44—78、P_{12}、50×50—11、P_{13}、20×20—80、P_{14}、34×40—39、炭化物のある落込みはFP_1、140×140—23、FP_2、55×50—25、FP_3、55×46—45、FP_4、83×82—18である。

特にFP_2周辺からは鉄釘及び鉄滓が多量に出土した。P_1よりは砥石（第19図８）が出土した。

本址の北西部には東西２ m、南北３ m、深さ60cm 余りの黒色土及び炭灰の落込みがあり、落込み内外には50点余りの白瓷系の坏片、甕片、土師質土器の坏などの他鉄片の出土があった。この落込内の黒色土は他と比較して明らかに黒く微粒であり、それは長期に亘って水溜りとなっていたためではないかと思われる。鉄器及び鉄滓、炭化物の多い落込みなどと重ね合せて、本址を鍛冶屋場と考えたい。

遺　物　上層からは青磁碗片及び白瓷片、土師質土器片、黒曜石片などが出ており、床面密着の遺物も同様なものが出土している。青磁碗片（第18図44・45）は緑茶色の外面にしのぎ蓮弁が施されており、又、薄青緑の青磁片もあるが、共に釉が１ mm 近くもあって厚い。その他糸切底の白瓷の皿、小形つぼ片、常滑系甕片、鉄釉陶器片、白磁小皿片などが出土している。



第12図　鍛冶屋場遺構ピット実測図

第Ⅰトレンチ（第14・15図　図版８）

遺　構　南北に長く巾2.2m、長さ150mでその比高差は約１ｍである。遺構はトレンチ北端近くに14個のピットを検出した。ピットは地表下約80cmにあり、南からP_1、径20×22—20cm、P_2、24×30—27、P_3、30×24—22、P_4、16×15—22、P_5、13×15—18、P_6、28×30—19、P_7、18×24—15、P_8、28×30—42、P_9、23×34—35、P_{10}、16×20—31、P_{11}、25×24—23、P_{12}、18×22—15、P_{13}、23×15—15、なおP_{14}は半分しか検出していない。

P_{11}～P_{13}にかけては、他よりも覆土が深くあるいは住居址等の存在もと思わせたが、結局決め手を欠き、トレンチの拡張は行わなかった。

遺　物　遺物は極く僅かで土師質土器片（第18図39）と擂鉢破片（第18図49）を検出したにすぎない。

第Ⅱトレンチ（第13図　図版８）

遺　構　第Ⅰトレンチに直交する東西80mに及ぶトレンチで、D地区より西に延びる。トレンチ内には遺構はなく、西側に行くに従って耕土が浅く、河川敷の様相を呈している。

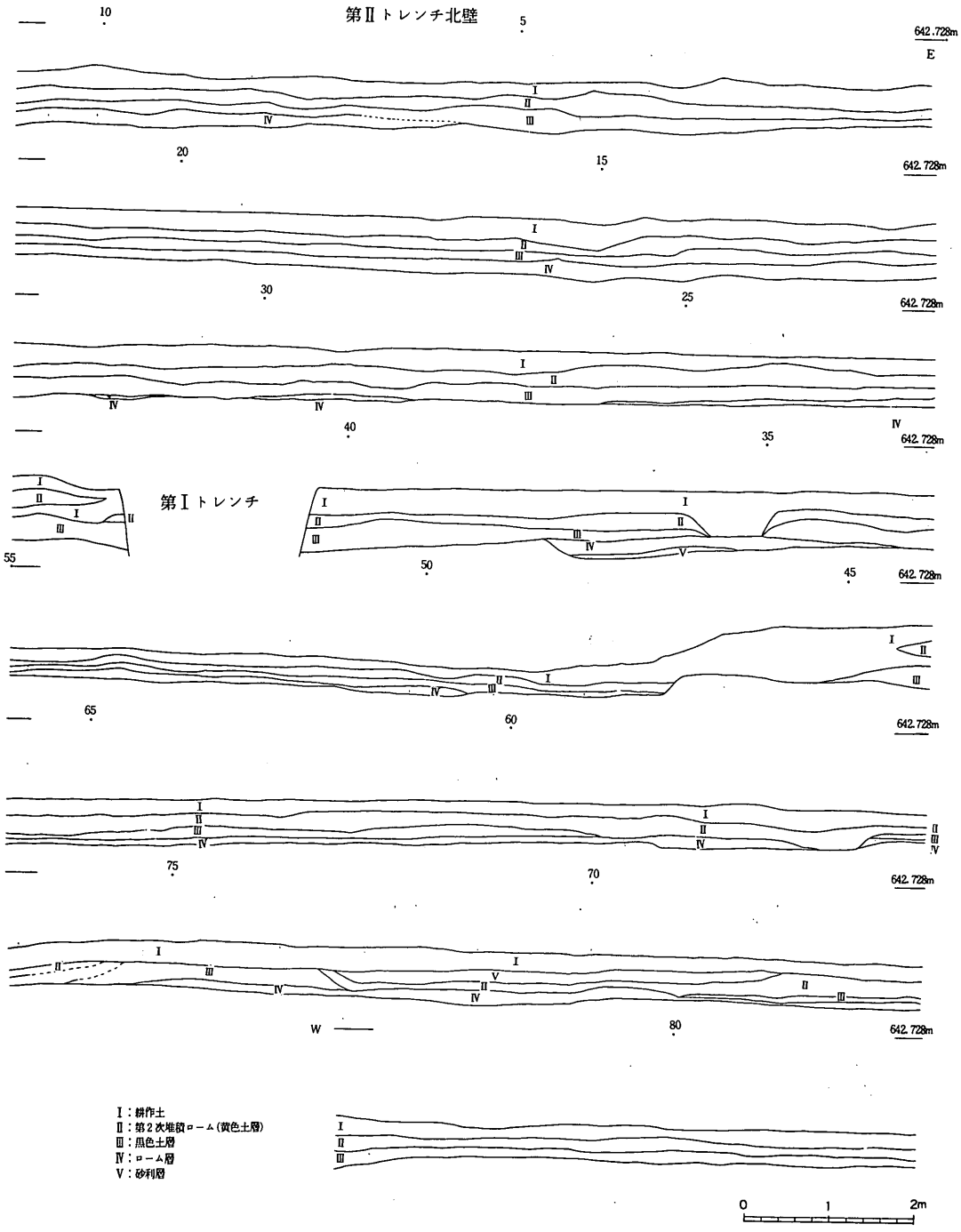
遺　物　僅かに須恵器片を１片検出したのみである。

第Ⅲトレンチ（第14図　図版８）

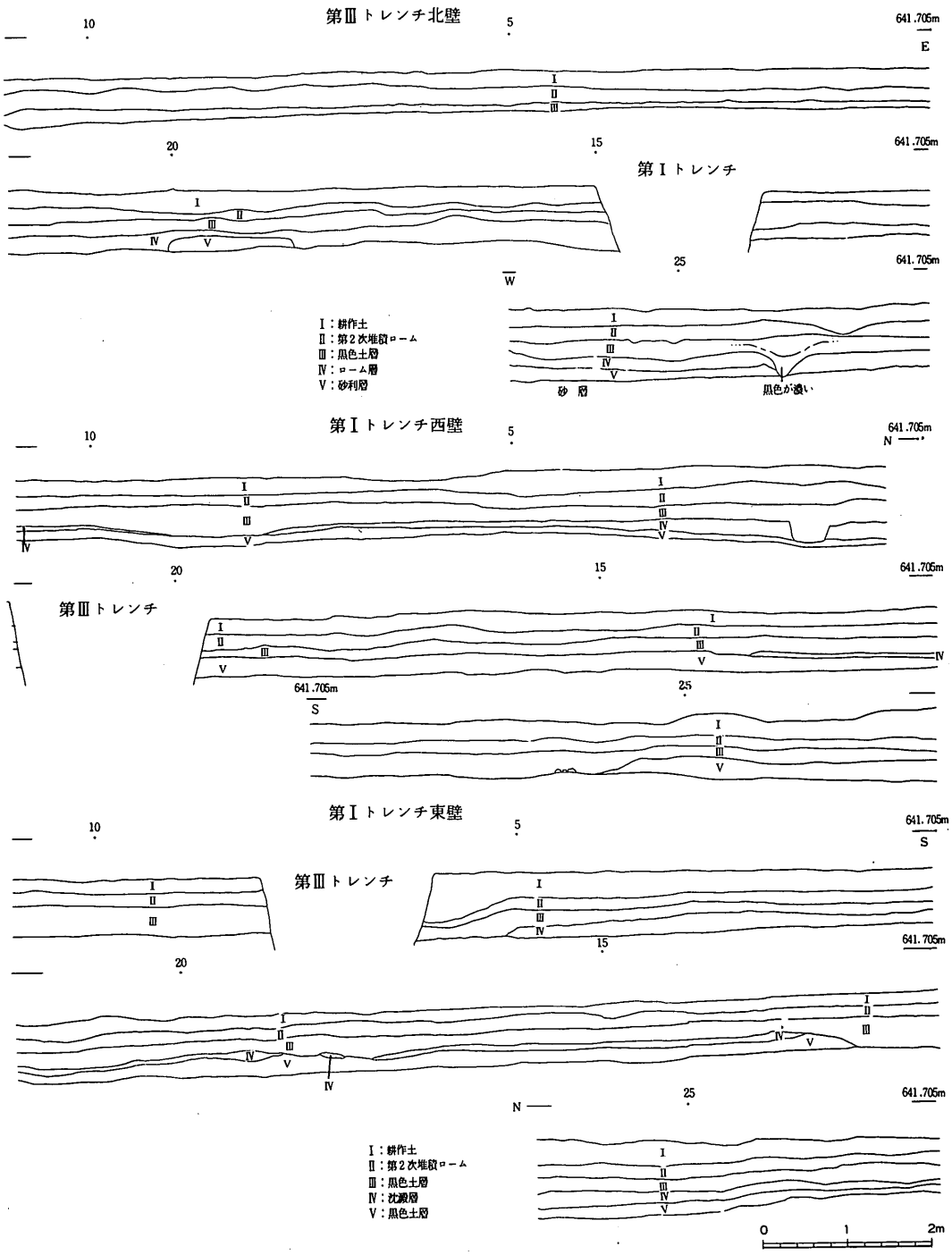
遺　構　鍛冶屋場遺構をも含めて第Ⅲトレンチとしたが、前記のように鍛冶屋場遺構については別記した。トレンチは東西27mで、第Ⅰトレンチの北側より15mで直交し、更に西側まで続いているが、西端では耕作土が浅く、遺構は何もなかった。

遺　物　何もなし。

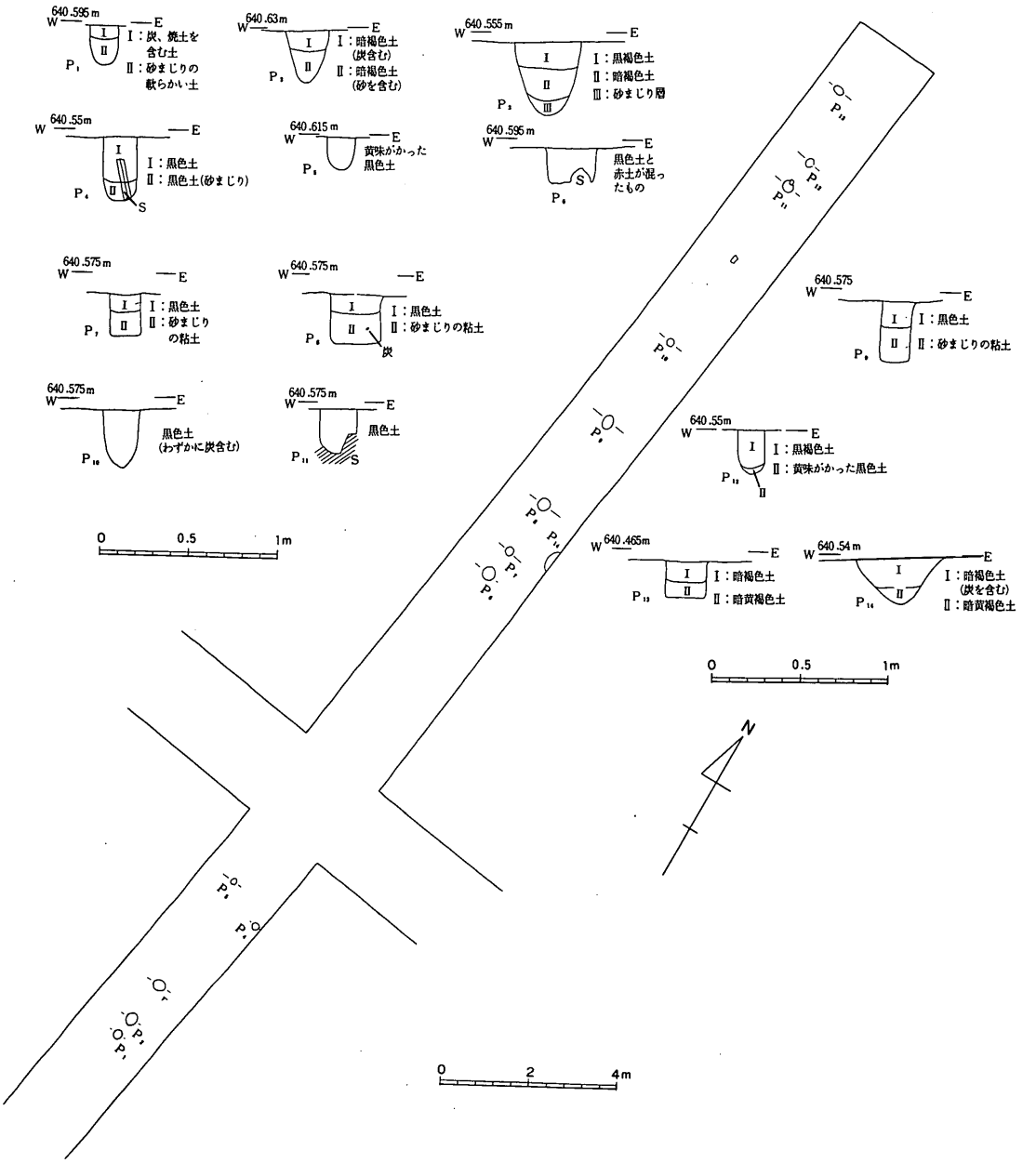
（神沢昌二郎）



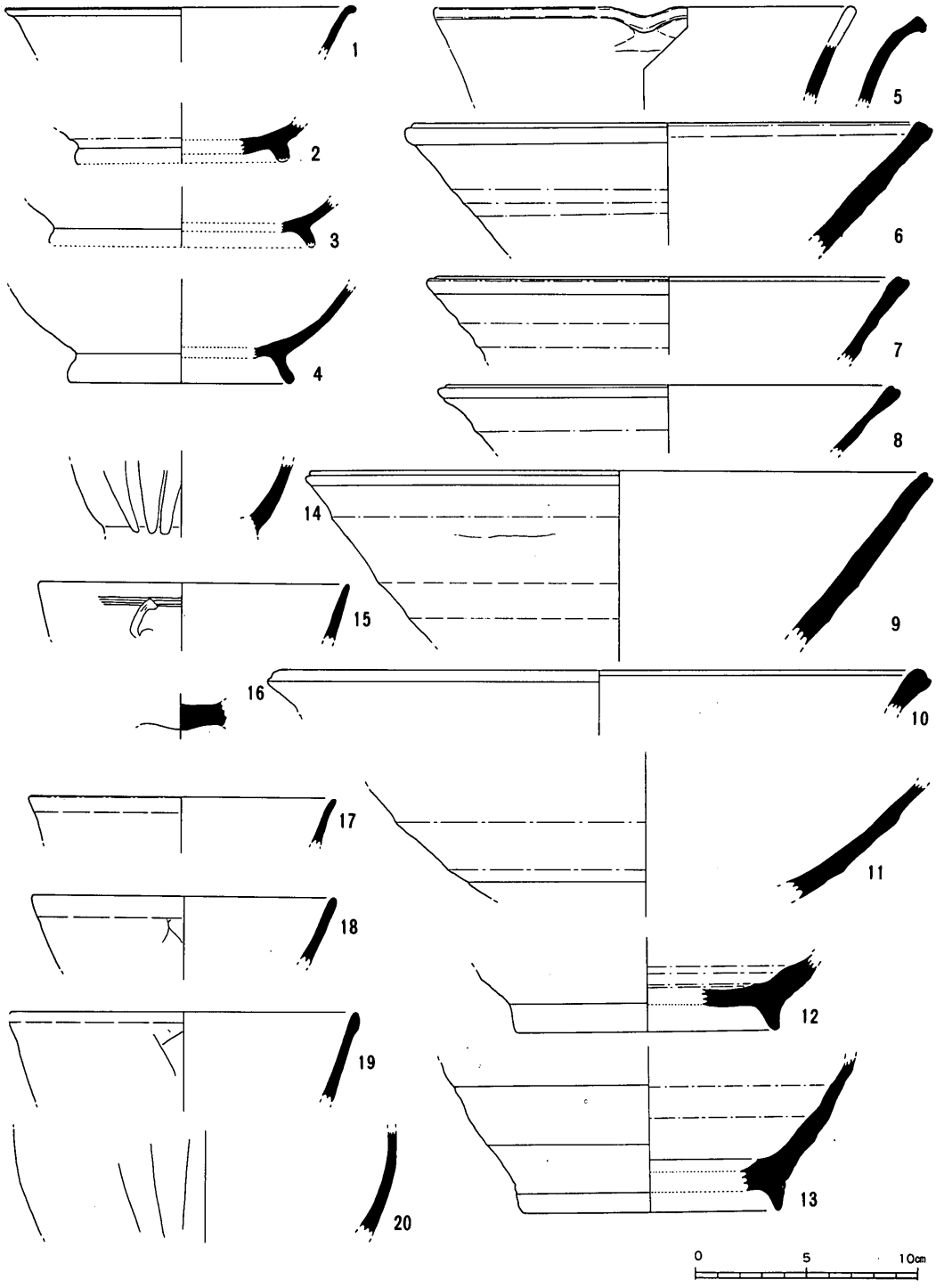
第13図　第Ⅱトレンチセクション図



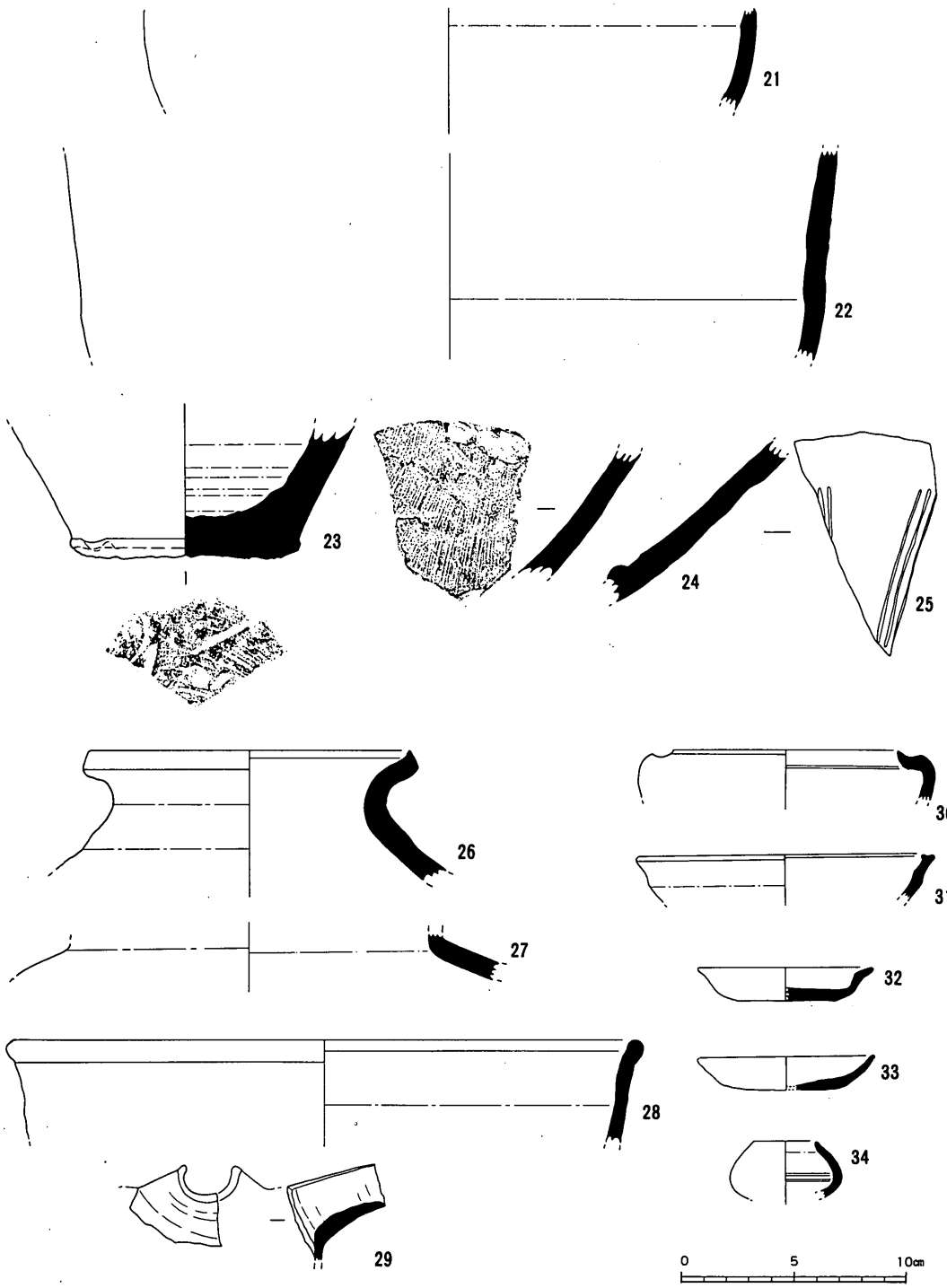
第14図　第Ⅰ,第Ⅲトレンチセクション図



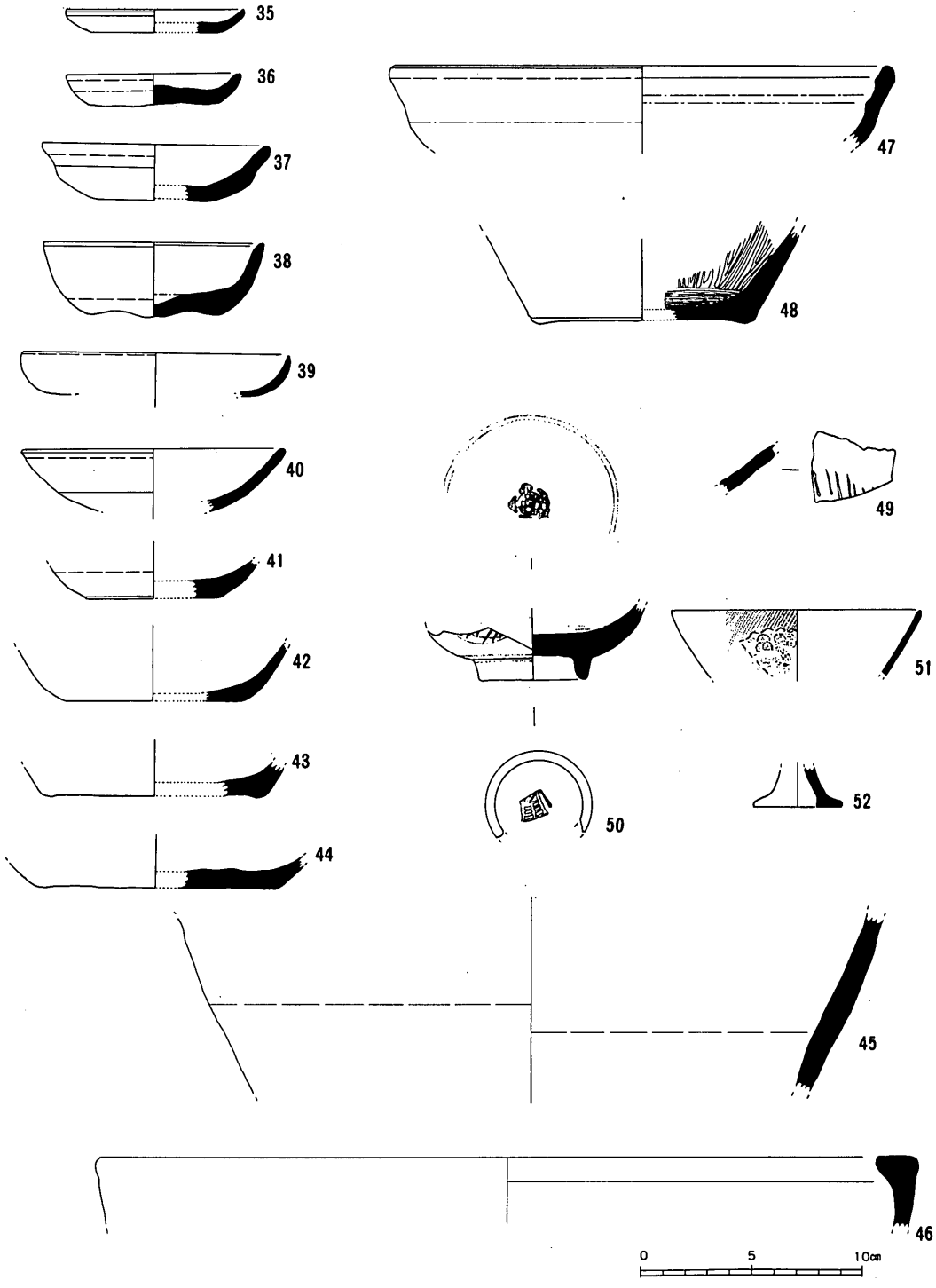
第15図　第Ⅰトレンチピット群実測図



第16図　出土遺物実測図（1）

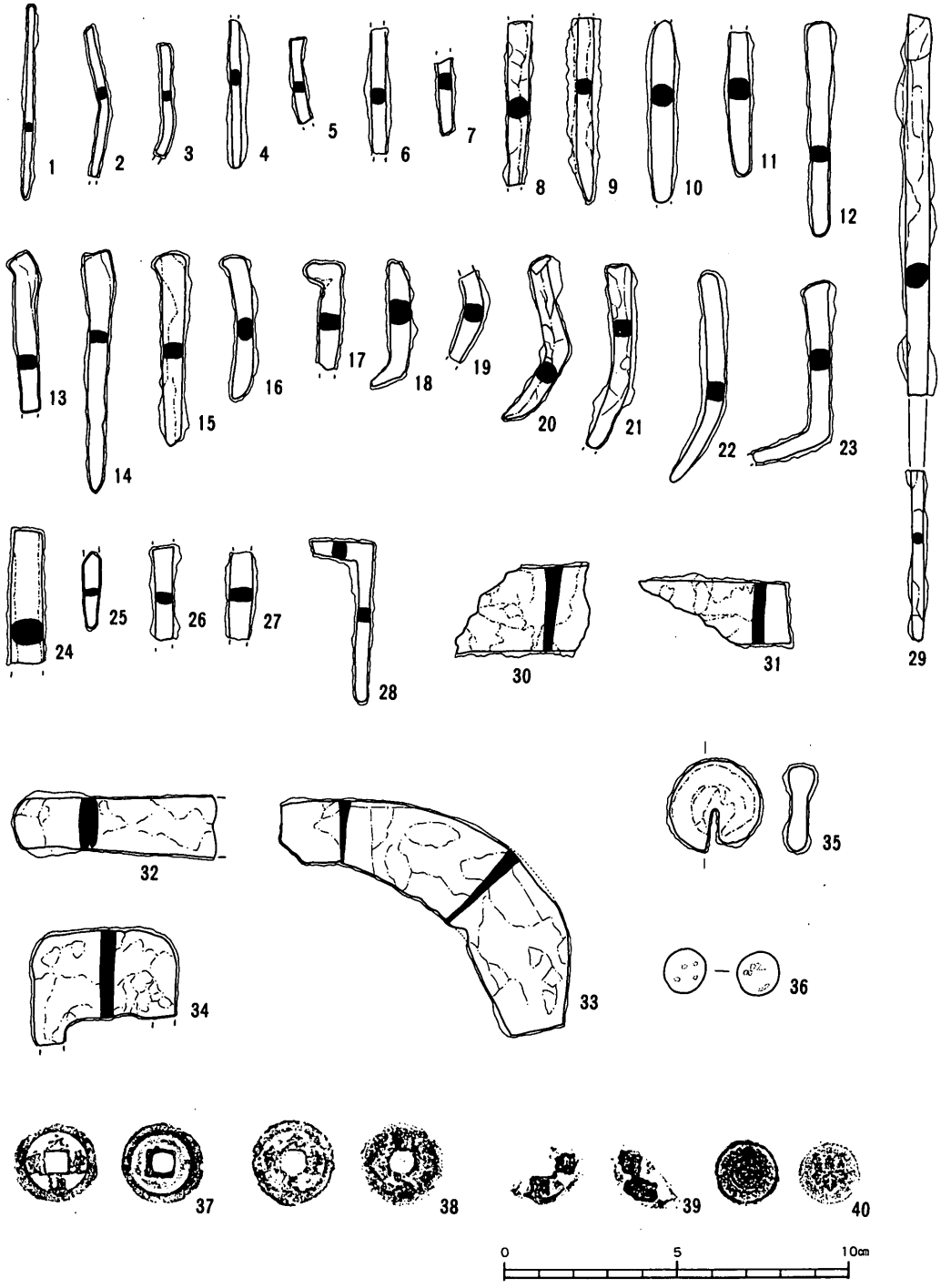


第17図　出土遺物実測図（2）



第18図　出土遺物実測図（3）

第19図　出土遺物実測図（4）



第20図　出土遺物実測図（5）

表1　小赤遺跡出土遺物観察表（土器）

図番号 遺物番号 図版番号	器種	寸法 口径 底径 器高	残存度	文様・施釉・色調・胎土等	備考
16 1 9	碗 口縁部	16 cm		内外ともロクロなで 外面明灰白色　内面灰白色 胎土かなり緻密	白瓷
16 2 9	碗 底部	(9.6)		全面ロクロなで　付け高台 外面暗灰白色　内面灰白色 胎土きめ細く微粒な白色粒含む	〃
16 3 9	碗 底部	(10.9)		底部ロクロなで 外面灰白色一部褐色　内面灰白色 胎土かなり緻密　わずかに白色粒含む	〃
16 4 9	碗 底部	9.9		内面灰釉がかかっている　付け高台 外面暗灰白色　内面暗灰白色 胎土緻密	〃
16 5 9	擂鉢 口縁部	18.7		内外ともロクロなで　注ぎ口は手で作ったあとあり 内面灰釉がところどころに付着　外面灰白色　内面灰白色 胎土きめ細かいが白色粒・黒色粒を含む	白瓷系
16 6 9	鉢 口縁部	22.8		内外ともロクロなで 外面くすんだ白黄褐色　内面白黄褐色 胎土きめ細かいが石英・白色粒含む	〃
16 7 9	鉢 口縁部	20.8		内外ともロクロなで 外面灰白色　内面白っぽい灰白色 胎土緻密　石英・白色粒・黒色粒を含む	〃
16 8 9	鉢 口縁部	20.2		内外ともロクロなで 外面灰白色　内面灰白色 胎土緻密であるが石英・白色粒・黒色粒などがかなりあり	〃
16 9 9	鉢 口縁部	27.8	1/5	口縁外面横なで　外面下部回転ヘラ削り　内面輪積み痕あり 外面灰色で部分的にやや褐色　内面やや白っぽい灰色　一部茶褐色 胎土緻密　白色粒・黒色粒含む。	〃
16 10 9	鉢 口縁部	28.8		外面ロクロなで 外面くすんだ黄白色　内面褐白色 胎土きめ細かい　石英・白色粒含む	〃
16 11 9	鉢又は甕 底部付近			内外ともロクロなで 外面白灰色　内面明白灰色 胎土かなり緻密　わずかに石英・白色粒・黒色粒あり	〃
16 12 9	壺 底部	11.7	1/5	ロクロなで　回転ヘラ削り　付け高台 外面白灰色　一部灰褐色　内面白灰色　底部から立ち上る部分に自然釉がとんでいる 胎土かなり緻密	〃
16 13 9	甕 底部	11.5	1/4	ロクロなで　回転ヘラ削り 外面灰白色　一部灰色　内面灰白色で自然釉（白色から明褐色）付着 胎土かなり緻密で白色粒・石英・黒色粒若干含む	〃
16 14 9	碗 胴部			茶緑の釉　1 mm 内外の厚さにあり しのぎ蓮弁 胎土灰白色	青磁

16 15 9	碗 口縁部	13.9		剛花文 薄茶釉　貫入あり　釉0.3 mm	青磁
16 16 9	碗 高台部分			青白色　高台内トキン　高台無釉 灰色　茶色の斑点あり 胎土灰白色	〃
16 17 9	碗 口縁部	13.7		薄茶緑釉　釉薄い	〃
16 18 9	碗 口縁部	13.7		しのぎ蓮弁文 薄緑釉	〃
16 19 9	碗 口縁部	15.6		しのぎ蓮弁文 薄茶の緑釉	〃
16 20 9	碗 胴部			茶緑の釉1 mm 内外 しのぎ蓮弁 胎土灰白色	〃
17 21 10	甕 胴部			ロクロなで 外面黒灰色　内面灰色 胎土きめ細かい　白色粒・赤褐色粒若干含む	須恵質
17 22 10	甕 胴部			縦になでた部分あり 内部は指おさえで凹凸多し　外面ねず茶　内面薄茶褐色 胎土灰白色　小粒多し	〃 産地不明 (常滑か？)
17 23 9	甕 底部	9.0	1/4	ロクロなで　糸切底　底部に籾痕あり 胴部外面暗灰色　内面暗灰色　底部外面白灰色　内面暗灰色で一部黒灰色 胎土白色粒含みわずかに大粒の白色粒あり	〃
17 24 10	甕 胴部			外面ハケ目 外面白灰色　内面暗灰色 胎土緻密　白色粒含む	〃
17 25 10	擂鉢 胴部			ロクロなで 外面灰色　内面白灰色	〃
17 26 10	壺 口縁部	14.3		灰釉外面に厚くかかっている 胎土灰色　黒色の小粒含む	瀬戸常滑
17 27 10	瓶子 頸部			灰釉外面薄緑色の釉　内面灰色 胎土灰色　緻密	〃
17 28 10	鉢 口縁部	27.9		灰釉　内部全面と口唇外部まで 茶緑の釉　長石の吹き出し 胎土　赤茶色	〃
17 29 10	片口 注口部			鉄釉、黒いゴマ状の斑点 円形にロづくりをしてから片口部分を切ったもの	〃
17 30 10	小壺 口縁部	10.0		内面鉄分付着　外面一部灰釉 外面やや緑っぽい灰白色　内面灰白色	瀬戸系
17 31 10	長頸瓶？ 口縁部	12.7		内面外面ともロクロなで 灰釉 胎土かなり緻密で砂粒まじり	〃

17 32 10	折縁皿	7.7 4.4 1.5		糸切底　薄い灰釉 胎土灰白色	瀬戸系
17 33 10	小皿	7.7 (3.7) (1.5)		無釉　糸切底 白っぽい灰白色	〃
17 34 10	小壺？ 口縁部	2.8		灰釉（薄緑茶色）　貫入あり 胎土灰白色	〃
18 35 10	皿	8.0 (5.7) (1.0)		ロクロなで 外面褐色　一部茶褐色　内面やや黒っぽい褐色 胎土きめ細かいがもろい	土師
18 36 10	皿	7.8 5.9 1.4		内面外面ともロクロなで 外面赤褐色　内面赤褐色 胎土　白色粒など含む	〃
18 37 10	皿	10.2 (5.1) (2.5)		外面白黄褐色　内面黄褐色 胎土きめ細かいがもろい	〃
18 38 10	皿	10.0 6.0 3.3	1/4	内面ロクロなで 外面明赤褐色　内面赤褐色 胎土もろく砂粒を含む	〃
18 39 10	坏 口縁部	11.0		ロクロなで　口縁部の外面横なで 外面明茶褐色　内面白褐色 胎土きめ細かいが細かい砂粒若干含む	〃
18 40 10	坏 口縁部	11.8		内部内黒整形 外面明赤褐色 胎土きめ細かい　褐色粒わずかに	〃
18 41 10	皿 底部	(6.0)		外面暗褐色　内面明褐色 胎土きめ細かいが砂粒を若干含む	〃
18 42 10	坏 底部	(7.9)		外面明赤褐色　内面明赤褐色 胎土きめ細かいがもろくわずかに白色粒含む	〃
18 43 10	皿 底部	(10.0)		ロクロなで　糸切り底 外面赤褐色　内面明赤褐色 胎土きめ細かいがややもろく砂粒(0.2～0.4mm)を若干含む	〃
18 44 10	皿 底部	(10.9)		外面明赤褐色　内面明赤褐色 胎土もろく白色粒・褐白色粒（0.2～0.6mm）を若干含む	〃
18 45 10	内耳ナベ 胴部			外面黒褐色から赤褐色　内面やや黒っぽい赤褐色 胎土あらく雲母白色粒・黒色粒などの砂粒を含む	土師質土器
18 46 10	捏鉢 口縁部	36.8		無釉 口唇巾広平ら　色調茶褐色 胎土茶褐色　粒子細かい	〃
18 47 10	鉢 口縁部	22.3		外面明赤褐色から黒褐色　内面赤褐色から灰黄褐色 胎土あらく砂粒を含む	土師
18 48 10	擂鉢 底部	(10.0)	底部1/5	外面回転ヘラ削り 外面明白褐色　底部は茶褐色　胴部にも筋状に茶褐色入る 内面茶褐色　稜部は若干白っぽい　胎土緻密　石英・白色粒若干	陶器

18 49 10	擂鉢 胴部			内面外面ともロクロなで　灰釉 外面白みがかった肌色　内面淡い肌色 胎土緻密　わずかに白色粒含まれる	陶器
18 50 10	茶碗 底部	(4.8)		白磁染付　くらわんか碗 外面青白色　内面青白色 胎土緻密	染付磁器
18 51 10	茶碗 口縁部	11.3		磁器 明治・大正の印刷文	〃
18 52 10	仏器 底部	4.0		濃藍の釉0.8 mm 底部やや広がる	〃

（　）内数字は推定値

表2　小赤出土遺物観察表（石器）

遺物番号	器　種	寸法	長径 短径 厚さ	重　量	備考・出土地点
1	石　鏃		3.7cm 1.4 0.5	2.4g	B　表採 有茎 黒曜石
2	剝片石器		2.7 2.0 0.6	3.3	B 黒曜石
3	剝片石器		2.7 1.4 0.5	2.32	B　検出面 黒曜石
4	横刃型石器		7.4 3.2 0.8	23.2	D 頁岩
5	たたき石		11.7 5.8 3.6	300.5	B　検出面 砂岩
6	丸　石		4.0 3.5 3.7	65.7	鍛冶屋場 砂岩
7	滑石製品		(3.6) 2.2	67.57	鍛冶屋場 滑石（器種不明）
8	砥　石		(8.7) 3.6 3.0	151.3	鍛冶屋場 ピット1内 4面使用
9	砥　石		(9.0) 5.6 2.4	227.3	B 2面使用
10	瓦製品		5.1 5.0 1.7	50.2	B　検出面 瓦を丸くすってある
11	打製石斧		8.4 5.6 1.1	72.3	木下 （表採） 粘板岩
12	打製石斧		10.8 6.5 1.8	131.2	木下前田 （表採） 粘板岩
13	磨製石斧		(7.6) (4.7) 1.9	125.1	木下前田 （表採） 流紋岩

（　）内数字は推定値

表3　小赤出土遺物一覧表（鉄器）

遺物番号	器　種	寸法 長径 短径 厚さ	重　量	備考・出土地点
1	釘	5.6cm 0.3	1.32g	鍛冶屋場
2	釘	(4.4) 0.3	1.12	鍛冶屋場 折れて曲ったもの
3	釘	3.3 0.3	0.68	鍛冶屋場 折れて曲ったもの
4	釘	4.3 0.3	2.43	鍛冶屋場
5	釘	2.5 0.3	0.67	鍛冶屋場 欠損
6	釘	3.6 0.4	2.89	鍛冶屋場 欠損
7	釘	2.2 0.4	1.34	A地区 欠損
8	釘	4.8 0.6	4.28	鍛冶屋場 欠損
9	釘	5.4 0.5	5.67	鍛冶屋場
10	釘	5.4 0.6	6.98	鍛冶屋場
11	釘	4.2 0.6	3.05	B　検出面
12	釘	6.1 0.5	3.30	鍛冶屋場
13	釘	4.8 0.5	3.80	鍛冶屋場
14	釘	7.0 0.6	5.20	A地区
15	釘	5.6 0.6	4.75	鍛冶屋場
16	釘	4.2 0.4	5.00	鍛冶屋場
17	釘	3.2 0.6	3.45	鍛冶屋場 欠損 頭部カギ型
18	釘	3.7 0.6	3.70	鍛冶屋場
19	釘	2.6 0.5	3.40	鍛冶屋場
20	釘	4.9 0.6	5.54	鍛冶屋場
21	釘	5.3 0.5	7.35	鍛冶屋場
22	釘	6.3 0.5	6.15	鍛冶屋場
23	釘	5.6 0.5	6.54	鍛冶屋場
24	釘	4.0 1.0	7.50	A地区 釘か？
25	釘	2.2 0.3	0.63	A地区
26	鉄　器	2.8 0.5	1.60	鍛冶屋場
27	釘	2.6 0.7	2.65	鍛冶屋場 釘か？
28	釘	4.7 0.4	4.03	A地区 カギ釘
29	鉄　器	(18.2) 0.7	18.82	鍛冶屋場 鉄板を巻きこんで作った型
30	鉄　器	3.4 2.5 0.4	7.26	鍛冶屋場 刀子か？
31	鉄　器	4.3 1.8 0.3	5.63	鍛冶屋場 刀子か？
32	鉄　器	5.8 1.6 0.5	7.55	鍛冶屋場 刀子か？　2枚重ねて作っている
33	鎌	(10.4) 2.8 0.4	29.3	鍛冶屋場
34	鉄製品	3.2 4.2 0.5	9.38	鍛冶屋場 帯金具か？

遺物番号	器　種	寸法 長径 短径 厚さ	重　量	備考・出土地点
35	鉄製品	2.8 2.6 0.4	10.68	鍛冶屋場
36	鉛　玉	1.3 1.2	11.31	A地区
37	古　銭	2.4	2.18	鍛冶屋場 元豊通宝（草書体）

遺物番号	器　種	寸法 長径 短径 厚さ	重　量	備考・出土地点
38	古　銭	2.4	2.64	A地区 たたかれてビタ銭状になっている 元豊通宝（草書体）
39	古　銭		(0.64)	A地区 半分欠損 皇宋通宝（隷書体）
40	銅　銭	1.8	1.66	A地区 五厘銭（大正8年）

（　）内数字は推定値

第４章　周辺遺跡出土遺物について

周辺遺跡の項でも述べた様に、赤木山は全山が遺跡ともいえる程大小の遺跡が集中した地域である。そして旧石器から中世までに渡る多くの遺物が採集されて、松本平では屈指の大遺跡群とみられている。然るに、この赤木山一帯からの出土品は、藤沢宗平氏により以前にその一部が紹介されているにすぎず、その実態が未だ学界一般に知れわたるには至っていない。今回、赤木山遺跡群の１つ、小赤遺跡に調査が及んだのを幸いに、周辺遺跡出土の遺物として一章を設け、赤木山遺跡群出土の遺物を取り上げ紹介することにした。とは言え、その出土品は多岐にわたっており、今回はごく一部を提示できたにすぎない。しかし、今回紹介する遺物により、赤木山遺跡群の重要性が広く世に認められるようになることを願っている。

尚、今回提示した遺物は、すべて寿小赤在住の古屋人兄氏が採集保管されていたものである。氏は先代故古屋五平氏と２代半世紀にわたり赤木山を歩き続けられ、山中殆どの遺跡からの採集品を所持しておられる。その量は厖大なものである。さらに、氏の代になって採集されたものについては、出土地点・状態も克明に記憶されており、遺物は遺跡ごと整然と区分して保管され、我々が赤木山遺跡群の実態を究明していく上で、大いに役立つことは言うまでもない。本章を記すに先立ち、郷土の埋蔵文化財保護の先覚者とも言うべき古屋人兄氏の業績を顕彰すると共に、我々の調査に協力を惜しまなかった氏に、深甚の敬意を表する次第である。

第１節　縄文時代の遺物

１　原度前（はらどまえ）遺跡出土品（第21図１～３、第36図97）

第21図１～３は縄文中期初頭に位置づけられるものである。１は、口径37 cm あまりの大形の深鉢形土器になるものと思われ、まばらに施されたLR縄文の地文の上に半截竹管で平行沈線を描いている。口唇にも同様工具により刻みをつけている。２は、口縁に突起をもつ深鉢形土器と考えられ、やはり半截竹管により平行沈線が描かれている。３は、深鉢の胴部下半及び底部で、下方へ反り出していく、この時期頃の特徴的な器形をもっている。施文は、２種類の幅の半截竹管を使い分けている。半隆起状の渦巻きには、幅の太い竹管で刻みがつけられている。

以上３点の他、本遺跡からは相似する文様をもった土器片が少量得られている。

第36図97は、本遺跡から採集された石冠である。ただし、前述の縄文中期初頭の土器よりは、出土地点がかなり東へずれる。完形品で、黒く光沢をもつ見事なものである。所産時期については、

周辺からの類例を全く欠くが、藤沢宗平氏は縄文晩期のものとみている。

2　木下遺跡出土品

土器（第22～24図４～11）

縄文中期中葉の土器群である。４は、円形と菱形を組み合わせた突起を口縁上に１ヶもち、そこから垂下する隆帯を中心に、器全面が長方形区画文で埋められる深鉢形土器で、口径32 cm、残存部高32 cm（突起部を除く）を測る大形品である。施文は、半截竹管による半隆起平行沈線で区画の外郭をつくり、その内部は同様工具で連続爪形文を刻むか、ヘラ状工具で斜沈線を平行に充塡している。また所々に三叉文風の陰刻もはいる。内面及び口縁上面はヘラ状工具により横位のナデ調整を行っている。焼成は良好で堅く、全体的に整った土器である。５は、口径19 cm 程の小形の深鉢形土器で、４と同様な長方形区画文により器面を埋められるが、器形に特徴がある。即ち緩やかに外反してきた胴部が、口唇部下方４ cm で急激に「く」の字に強く屈曲して内傾に転じ、口縁部付近に至って再び僅かに外開するという器形を呈す。屈曲部以上は無文帯とし、それ以下に半截竹管による半隆起線を用いた長方形区画文を縦位に配している。区画文の内部は半截竹管を多種に用いて、平行沈線・刺突・押し引き等を施文している。土器全体からみるとこの区画文は、縦位に１単位を構成しそれが７単位で器面を一周して、しかも繰り返しは殆どない。創意に満ちたもので、施文は細かく丁寧である。内面はヘラで横位調整されて、下半部は僅かに黒変している。６は、口径22 cm を測る深鉢形土器で、残存部高24 cm である。外反しながら立ち上がり、口唇部下４ cm あたりで緩やかに内湾して、小さく外反する口縁に至る器形をとる。文様は横帯で区分できる。口縁からその下部7.5 cm までの第１帯は無文、第２帯は刻みをもつ隆帯で交互に三角形を形づくり、第３帯は RL 縄文を横位に充塡している。外面無文帯及び内面はヘラで横位に調整されており、焼成は良好で堅緻な土器である。７は、口径28 cm、底径16 cm、器高38 cm を測る大形の深鉢形土器である。底部近くがやや張り、胴部下半が僅かにくびれながら外反気味に立ち上がり口縁端部に至る器形を呈す。幅広な突起を１ヶもつが、この突起はほぼ左右対称形で、現代の手さげ鞄の手懸けの様な、一寸、類例をみない形をしている。文様は胴部上半¼とそれ以下の２帯に分かれ、かなり簡素なものである。胴部上半¼は無文帯で、それ以下と区切る部分には竹管状工具を縦に割って連続刻印した如き文様が並ぶ。胴部下半の文様帯は、ヒダ状圧痕文の地文上に、斜の刻みをいれた長さ８～９ cm の隆帯を垂直に２本づつ２組とそれを30°ほど傾け、かつ平行に配した２組を交互にめぐらし４単位で器面を一周させている。内面調整は器面の荒れが激しく不明である。８は、深鉢形土器の胴部片で残存部高22 cm、同上端部径26 cm、同下端部径14 cm を測る。文様は横帯で４段に分かれる。第１段はヘラ状工具による縦の平行沈線、第２段は両側に連続爪形をもつ太い隆帯を、大きくジグザグに貼りつけて、三角形を交互に入り組む様に構成し、第３段は１段同様の縦沈線、第４段は残存部が少ないが、爪形の刻みをもった隆帯で横長の楕円を連続させているものとみられる。内面はヘラに

より横位のナデ状の調整が施されている。焼成は良く、赤褐色を呈す。9は、口縁に4単位の突起が上がる深鉢形土器で口径約24 cm、残存高24 cmである。成形時の歪みがあるが、外反度を増しながら口径部に至る器形をとるものと考えている。文様は、突起から下部へ派生する隆帯を中心として、ヘラ状工具によりやや巾太の沈線を全面にぎっしり描いている。部分的に刺突文を施すところもある。胎土は粒子が粗い特徴的なもので、赤褐色を呈する。内面の下端は黒変している。10は、口径30.5 cm、一応深鉢形土器の範疇で捉えるが、胴部中位が大きく張って、樽状とでも云うべき器形を呈す。口縁に巾広で扁平な突起が1ヶつく。文様は、口縁部に巾8 cmの無文帯を残すのみで、それ以下と突起部外面には横位のRL縄文が全面に施されている。外面無文部分と内面は、ヘラで横方向に調整されている。厚手で重量感に富む土器である。11は、口径16 cm、底径9 cm、器高24.5 cmを測る深鉢形土器で、口縁に1ヶ所、波状の突起をもっている。器形は、底部際と胴上半に張りをもち、他はほぼ直線的に外開していくもので、口縁の波状部には径1.5 cmの大きな凹みが設けられている。施文は、口唇部及び波状突起にヘラ状工具を用いてある他は、口縁部下3 cmと底部より4 cmの部分に無文帯を残してその間にRL縄文を充塡している。

石器（第35・36図89・90・92～94・96・99・101・102）

縄文時代中期に伴う各種石器・石製品が出土している。89・90は定角式磨製石斧で、90は刃部を折損、89にも刃部に傷がある。いずれも使用時の傷と考えられる。90には、僅かだが着柄痕もみられる。一般に磨製の石器・石製品は、研磨により異なる石の目が磨き出されその母岩を判定するのは困難とされているが、一応89は美しい青白色を呈し、蛇紋岩製、90は石英閃緑岩製と推定しておく。92・93は、乳棒状磨製石斧である。92は重量感に富むもので基部を折損しているが、折れた面に敲打痕も観察できる。93も一見基部折損の様に感じるが、基端にまとまりがあり、基部中程に着柄痕らしきものもうかがわれる。刃部は端正に研磨されている。92・93とも敲打と研磨という段階をふんで作られている。94・96は粗製石匙である。94が横型、96が縦型とみられるが、94はやや厚手となる。99は完形の石皿で、径22 cmのほぼ円形を呈し厚さは約4.5 cmである。皿部が広く円形を呈し浅いので縁辺部の高さがあまりない点が特徴的といえる。皿部の中央に対し縁辺の方がすれて目が細かくなっている。安山岩製。101・102は安山岩製の石棒である。101は先端を男根状につくり出した有頭のもの、102は棒状にそのまま円くおさまる無頭のものである。いずれも下半部を欠損しているが、太く大きな優品である。この時期の石棒は、完形品では2 mを超えるものもあり、また折れても用いているので、本遺跡出土品が本来はどのくらいの長さがあったかは推測しかねる。

3　前田遺跡出土品

土器（第24・25図12～18）

多くの土器が出土、採集されているが今回図示できたものは7点、編年的にみると13をのぞき概ね縄文中期後葉の前半に位置づけられる。12は、釣手土器で現在高25.5 cmを測り、この器種として

は大形品といえるだろう。浅鉢を基調とし、それに厚さ約1 cm、巾7～9 cmの粘土板を2枚並列させてアーチ状に架け渡し、両者を連続させる粘土棒製の桁を4本渡している。文様は隆帯により渦巻とクランクをつくりそれにそって半月状の竹管文を連続させている。胎土に長石、石英粒を多く含み赤褐色を呈している。13は、口径12 cmを測る小形の深鉢形土器の胴部上半である。横位の文様帯構成で、第1段がヘラ状工具による縦位の平行沈線、第2段が横位のRL縄文を満たした上に2条の結節沈線、第3段は第1段と同様になると思われる。器形と文様からみて、本品は今回図示の前田遺跡出土の縄文土器とは時期的に異なり、編年的には縄文中期中葉以前に位置づけられると考えている。14は、口径14 cm、底径7.5 cm、器高21 cmの小形の深鉢形土器で口縁部が僅かに欠けているが、他の部分は全く割れていない。胴部下半位に張りが、頸部に括れが僅かずつあり、無文の口頸部は大きく外開して少々丸まり気味におさまる端部に至っている。文様では、頸部に大きな「x」字状把手が4単位で配される点に特徴があり、その上下及び下方へ波状の粘土紐貼りつけを行い、間隙を半截竹管による1回ずつ重ねの縦の平行沈線で埋めている。底部付近も無文につくっている。15は頸部以上を欠損する深鉢形土器で、底径7.5 cm、残存部高17 cmを測る。胴部中位が張り、欠損している口頸部は直線的に大きく外開する器形を呈していたと思われる。文様は小形の「コ」の字型の隆帯を縦1列に4ケずつ貼りつけたものを3単位配したのち、半截竹管による横位の平行沈線を等間隔で全面につめて引き、その中間に1組の平行沈線を縦に引きおろしている。16は、頸部以上と底部周辺を欠くが、深鉢形を呈すると思われるものである。器形及び文様は先の15に良く似ている。特に文様構成は「コ」の字状の貼りつけ隆帯が15とは逆を向いていること、縦に5本ずつ並んで、それが6単位で旋っていること、半截竹管に横位の平行沈線のうち2本ずつが押し引きになっていること等の相違点を鮮明にしても、尚類似するとの感をぬぐいきれない。残存部高18 cmを測る。17は、底部を欠き口径16.5 cm、推定器高25.5 cm、同底径8.5 cmを測る小形の深鉢形土器で、ごく僅かに反りながら立ち上がる胴部と直線的に外開する口頸部からなる。頸部に1条の隆帯を廻わし、それ以上は無文、それ以下はまず縦の隆帯で器を縦位に4分割してその間を半截竹管による縦の平行沈線で埋めている。これらの文様は底部際までは及ばず、その上方4 cm付近で途切れて無文部をつくるところに特徴がある。18は、口径14 cm、底径6.5 cm、器高23.5 cmの小形深鉢形土器である。器形や文様帯の配置が14や17に類似し、時期的な特徴をよく表している。ただし胴部下半位の張りが14の様に全体的ではなく局部的で底部への収束度合も多少大きい。文様の面では、外開する口頸部が無文、頸部は2本の横位隆線で巾を区切り、その内部はまず半截竹管による左下りの平行沈線で充填した後、それに交差する様に右下りの粘土紐を貼りつけて構成している。胴部は単なる縦の隆起線と、十字状に粘土紐を貼りつけた隆帯で縦位に4分割し、その間を縦の平行沈線で満たしている。

石器・石製品（第36図95・100）

多種の石器が出土しているが、今回は2点しか提示できなかった。95は縦型の粗製石匙である。長さ11 cm、36.5 gを計り、かなり自然面を残している。100は、完形の石皿である。長径32.5 cm、短径24 cmの楕円形を呈し、裏面も丸味を帯びて、坐りが悪そうである。皿部は細長く、断面形もかなり窪んでいる。安山岩製である。

4　石行(いしこ)遺跡出土品

土器・土製品（第26～30図19～34・36～60）

本遺跡からは縄文晩期後葉に属すると思われる土器が多量に出土している。そのうち今回は、図化したもの16点、拓影25点を提示し得たが、その総量の極く一部にすぎない。

まず図化したものを扱う。19～23は浅鉢形土器である。19～21は口縁が外反し肩が張るもので19は口縁に一条の小隆起をもつ隆帯がめぐりそれ以下は無文、20は口縁に同様の隆帯がめぐるがやや波状となり、肩部に変形工字文風の浮線文をもつ。21も口縁に小突起をもつ隆帯をめぐらす点は同じだが、肩部に刻目のある一条の隆帯をもつ。22は身が浅い皿形で底部は平坦面をもたず安定しない。平面形が楕円を呈している。文様は全く無く、内外面ヘラケズリ調整されている。23は口縁部外側面に僅かな凹帯をつくり肩部が張る様になるもので、丸味がある。やはり無文で内外面を丁寧にヘラケズリ、ヘラミガキされている。24～31は深鉢形土器である。24は口径40.5 cmを測る大形品で、ゆるやかに外反する器形をとり、棒状工具による突刺文をもつ把手を附している。把手下5 cmのところに円孔の痕がみえる。口縁外側端に指頭圧痕状の凹みを連続させる隆帯をめぐらしている以下は無文である。器面は荒れているが、粗いヘラケズリとミガキが観察できる。25は口径37 cmを数える、全く無文のものである。一旦括れて頸部をつくり、ゆるく外反しながら口縁に至り短く外方に屈曲する器形で、非常に厚手である。外面は粗くヘラケズリされる。26は無文の胴部下半で底径12 cm、残存高25 cmを測る大形品である。内面は横方向に、外面は下から上へ向ってヘラケズリを施されている。外面には黒色附着物があり、内面底部付近も黒変している。27は口径23 cm、やはり外反気味に開く器形を呈す。口縁外側に小突起をもった隆帯をつくり、さらに口縁上端は平にして指頭圧痕状の凹みを連続させている。28は径16 cmの口縁部付近の破片であるが、他とは一風変っており、壺形土器と捉えた方が適切かもしれない。斜走する条痕状の沈線が頸部下から充塡され、その上端に袋状突帯がめぐっている。29～31は胴部上半位に稜があり、それ以上は外反しながら外開、以下はわずかに張りをもって底部に至る器形に共通性がある。いずれも、稜以下に斜ないしは縦の条痕状沈線、口縁端外側面に小突起を伴った隆帯を全周させている点も同じである。相違は、29・30が僅かな波状口縁となるのに対し31は平縁な点、29の稜部には沈線が引かれ小突起が附されている点、30の条痕状沈線には疎らに横走するものがある点などである。29は推定口径30 cm、30は27 cmの大形破片、31は口径30 cm、底径11 cm、器高30.5 cmを測る遺存状態の良いものである。32はミニチュアの手捏ね土器で、口径3.3 cm、器高3.7 cm程のものである。内部に赤色顔料を入れ

た痕跡と思われるものがある。34は丸底の深鉢形土器になると思われ、残存高7 cmである。器面がかなり荒れているが、横走する条痕文が認められる。類例をみない器形であるが、その時期等については、藤沢宗平氏は縄文晩期の条痕文土器と考えている。若干疑義も残るが一応この見解に従い、ここに提示した。33は、環状乃至円板状を呈すと思われる土製品の破片である。先端の鋭い工具での刺突と推定する文様をもつ。小円孔が2ヶあり土偶の頭部飾りと考えている。

次に拓影で示したものについて簡単に述べる。36～41は浅鉢形土器破片である。口縁が立ち上がるもの（36)、肩部をつくるもの（37～39・41)、外反気味におさまるもの（40）等の器形に相違がみられ、文様も37・38・40・41等浮線文をもつものと無文のものがある。36は細い隆帯の上に太く短い刻みが連続しているもので、藤沢宗平氏は本遺跡中では異質なものとしている。42～50は深鉢形土器片で48を除き口縁部破片である。口縁端外側に2条の隆起や、小突起をもつ1条の隆帯がまわるものが殆どで、50は更にその上方に小さい凹みを連ねている。器形は43を除き図化した29～31に代表されるものにおさまると考えている。51～60は、条痕文系の土器、類例の見当らないもの、及び底部である。51は外へ折り返した口縁に指頭圧痕状の凹みをならべ、その下部に条痕状の沈線がみえる。52も、51に似るが薄手で連続する凹みも刻み様である。53は4～5本の沈線を不整に平行させたものを描いている。54にはごく太めの櫛描文らしいものが窺える。いずれも類例がみられない。55は土器の把手乃至は土製品と考えられる。厚手で赤褐色を呈している。56は横走する条痕をもつ口縁部付近の破片である。58は底部片で明瞭に網代圧痕が残る。編み方は緯の条が3本超え、3本潜り、2本送り、経の条が4本超え、4本潜りの2本送りと1本送りを交互に繰り返している様に観察される。59は貝殻背による条痕と考えられる。60は、ある程度の単位と幅をもった工具により擦痕状に施文された深鉢の一部とみている。

石器（第35図91）

本遺跡出土と伝えられる石器で今回提示できたのは91の1点のみである。藤沢宗平氏によると、この他、石鏃、凹石、磨石、打製石斧が出土している。91は定角式磨製石斧で刃部片側が摩損している。基部に着柄痕らしい傷がみられる。妙なことに、藤沢氏の報告では本品には触れられていない。

5　その他の遺跡出土の縄文時代遺物（第35図86～88、第36図98）

86～88は磨製石斧の一種と考えるものである。86は清水林遺跡出土品で、磨製石斧にしては細すぎる感がある。全面的に敲打痕があり、断面形は中央部でほぼ円形になる。87は、北洞下堤を築いた時に出土したと伝えられるものである。全面に研磨が及んでいるが、両側面(縦斧―axe―とみて前後側面という方が適切か）をつくらず、両主面が断面レンズ状に直に接している。左主面に着柄痕らしい傷が残る。88は、刃部に傷が残るが、87同様に側面をつくらないものである。86は83.01g、

87が125.6g、88が181.5g。98は北原遺跡出土のヒスイ製垂れ飾りである。長径11.3cm、短径2.8～4.2cm、細長い楕円体の完形品で、表裏に長径方向の溝をもち、その溝の中間よりややずれた所に円形の貫通孔があけられている。色調は緑乳白色、一部茶色を呈し、全面研磨されて光沢をもつ見事な製品である。

第2節　弥生時代の遺物

1　原度前遺跡出土品（第31・32図61～64）

本遺跡からは、縄文時代遺物の他に、地点集中的に弥生土器も出土している。61～64はいずれも器形及び文様構成を知り得る大形破片で、時期的には弥生時代中期に位置づけられる。61は僅かに張る胴部から緩い外反に転じて口縁端部に至る器形をとる甕である。口径29cm、残存部高16cmを測る。外反部には縦方向、それ以下には横方向に、櫛状工具による平行条線を描いている。62は、口径25cmの甕で、胴部下半を欠く。最大径は口縁端部にあるが、胴部のかなり高い部位で再び「く」の字型に張り、そこから底部へ向かって真直ぐ収斂していく器形になる。施文の順番は5本歯の櫛を、まず口縁下横位に一周させ、次に羽状条線を全面に引いてそれらを切る様に縦に一定間隔をあけて引いている。口唇部の幅の広い刻み目は最後につけられた様だ。内面にはマキアゲ痕を残しヘラナデされている。63は甕の大形破片で、口径25.5cm、推定器高23cmを測る。器形は胴部中位に張りをもつが下方から口縁にむけて外開するもので、口縁端部に最大径がある。文様は太めの櫛を用いて、横位の波状文と平行線文を交互に上方から2段めぐらし、それ以下は斜めに下から上へ5～8cmの平行線を描いている。64は口径31cmあまりの甕で胴部中位でふくらみ、一旦括れたのち外反し、61に似た器形となる。文様は、4本乃至5本歯をもつ先端の丸い櫛歯状工具を用いて施文している。まず口縁直下にゆるやかな波状文を全周させ、その下方から胴部中位まで縦に隙間なく引き、その部分からさらに下方へ、先端をカギ状に曲げて引きおろしている。その上それらの文様の接点部位には短かく弧を描いたものをならべている。内面はヘラで調整された跡があり、口縁部外面に黒変、附着物あり、外面下部は熱変している部分がある。

2　百瀬遺跡出土品（第32図65）

65の1点のみである。本品は立ち上がる口縁部と胴上部が最も張る器形に特徴がある。文様は細かい6本歯の櫛状工具により、口縁に波状文、頸部に簾状文、胴部に羽状条痕が描かれる。内面調整は、ヘラによるが、口縁部付近は僅かにハケメ状のものも窺える。内面底部は黒変している。口径23.5cm、底径6.7cm、器高24.4cmを測る。

第3節　古墳時代の遺物（第33図66～68）

出土遺跡はすべて異なる。66は北洞遺跡出土のS字状口縁台付甕で、一応本節へ含めた。口径13.5cmを測り、最大径は胴部中位にある。脚部は全く欠損する。胴部外面のタテハケメは3段で、1段目と2段目の中にヨコハケメが施されている。器厚は非常に薄く、内面には上半の所々にヨコハケメ、局部的に指オサエのあとがみられる。67は石行遺跡出土の小形丸底土器である。口径17.6cm、器高10.2cm、底部はごく狭いが平らに作っており径3.0cmを測る。底部際から内湾気味に外開し、中位で一旦欠損外反して稜をつくり、更に大きく外開する器形をもつ。内外面をよくヘラミガキされているが、口縁部外面には僅かだがハケメも観察できる。68は、寿小赤地区の公民館北に隣接する畑地から単独出土したもので、須恵器の甕である。口縁端部を全周にわたって欠損しているが、他は完存している優品で、推定口径11.5cm、器高12.0cmを測る。頸部に櫛描波状文、胴部に櫛描列点文をめぐらしている。胴部の文様の上下の沈線はシャープで、穿孔は外側から内部へ向けて行われている。色調は僅かに青味のかかった暗灰色を呈する。

第4節　奈良・平安時代以降の遺物（第34図69・70、第35図71～85）

出土遺跡の内訳は、赤木山遺跡（69）、小赤遺跡（70）、小池遺跡（71～85）である。69は灰釉質のおろし皿で、体部を欠く、底部は外面に回転糸切り痕を残し、内面にはヘラ状工具で縦と横に溝が刻み込まれている。70は口径11.5cm、底径7.5cm、器高23.0cmを測る。灰釉陶器の長頸瓶である。口縁端部と高台を僅かに欠き、胴部の中程に2cm大の穴が1ケあいているが、完形に近い。外器面は荒れて釉は剝げ落ちザラザラしている。色調は基本的には灰白色であるが胴部1/3位が加熱を受けたように鉛色をしている。小池遺跡からの出土品には、土師器（71～79）、須恵器（80～84）、灰釉陶器（85）、磁器（86）がある。71～75は土師器の坏で、ロクロナデされ底面に回転糸切り痕を残す。76～78は土師器甕片で、76・77が底部及びその付近、78が口縁部である。79は土師器の羽釜片で、貼り付けの鍔は水平で、口縁部は直立する。80・81は須恵器の坏底部、83は蓋、84は長頸壺の口縁部と思われる。82は須恵器の甕乃至は四耳壺の底部付近と考えられ、格子目状のタタキが一部にみられる。85は灰釉陶器の埦で、一部に釉がみられ底面に糸切り痕を残している。

第5節　赤木山遺跡群出土品の提起する諸問題

以上の節で提示した遺物について、時期的な事及び分布等で若干だが、注目すべき、或いは問題となるべき点を挙げてまとめとしたい。

第1点は、原度前遺跡出土の縄文中期初頭の土器群（1～3）についてである。前期末とみるむきもある。図示したものの他、古屋氏宅には付近から出土した類似品が少量あり、同遺跡がこの時期の包含層をもっていることは確実と考えている。該期の土器を出土する遺跡は、松本市内でもいくつかあるが、いづれも従属的・伴出的な出土であり、その実態はあまり明らかにされていないのが現状である。本遺跡及び出土品は充分、注目に値すると考えられる。

第2点は、木下・前田遺跡と出土の縄文中期土器についてである。両遺跡は赤木山遺跡群の南端に近く、西向きの緩斜面上に、東西に隣り合って存する。赤木山遺跡群の中では最も縄文時代中期の遺物を出土しており、南東に続く白神場（白樺）遺跡とともに、当遺跡群における該期遺跡の核的存在と考えられている。この両遺跡のうち、木下遺跡は縄文中期でも中葉、藤内盛期に前後する土器ばかりを、また前田遺跡は後葉曽利Ⅰ式併行乃至は唐草文系1段階のものを中心に出土している。土器の量と遺存状態等からみて、かなりの集落址遺跡であるという推定は勿論、更に、両遺跡を1つの遺跡とまとめてみてもおかしくない立地・地形にある中で、同じ縄文中期でも、それぞれ時期的に著しい集中がみられる点に気付かされる。今後の調査等の結果を待たなければ何とも言えないが、面白い傾向であろう。土器自体についても、木下遺跡出土の9は最近注目されている半隆起線と独特な施文をもった土器の一方の系統にはいるものであるし、前田遺跡においては18等の唐草文系土器の初源タイプと考えられているものに混じって所謂「X字状把手」をもつ曽利系の土器が出土している。特に後者は、松本平では縄文中期後葉初源期の資料の集積が充分ではない現在の研究段階において貴重である。

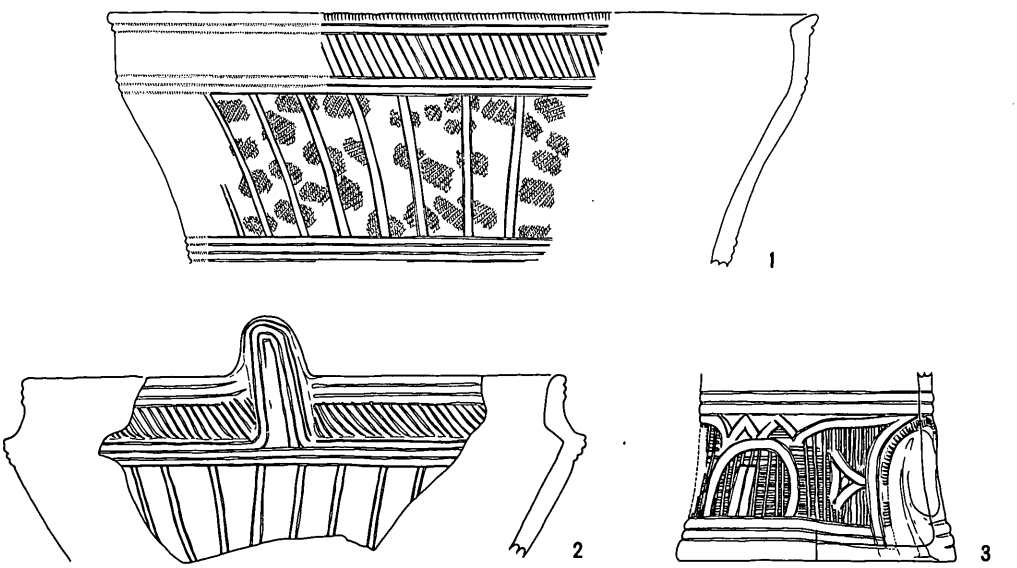
第3点は、石行遺跡出土の縄文時代晩期土器群である。筆者の不勉強で、詳しく触れることはできないが、縄文晩期も後半のものが多いとみている。さらに、古屋氏が所蔵している同遺跡出土品の量はきわめて多く、今回の提示に、藤沢宗平氏による以前の報告を合わせても、総量の1/10にも及ばず、不完全である。同遺跡出土品の充分な検討を抜きにして、松本平の該期土器を語るのはむずかしいと信ずる。

第4点は、この石行遺跡やその東の原度前遺跡を中心とする、赤木山遺跡群の中央部支群とでも言うべき諸遺跡についてである。この区域には、ほぼ東西に東から、横山城・原度前・北洞・三経塚・清水林・石行と、遺跡が連なるが、縄文時代晩期から、弥生時代中期前半の遺物を出す遺跡が多い。石行遺跡の土器群、原度前遺跡出土の石冠等はその縄文時代晩期の一例であり、原度前遺跡出土の弥生土器のうち61・63・64は中期前半へ遡る可能性のあるものと考えている。更に東端の横

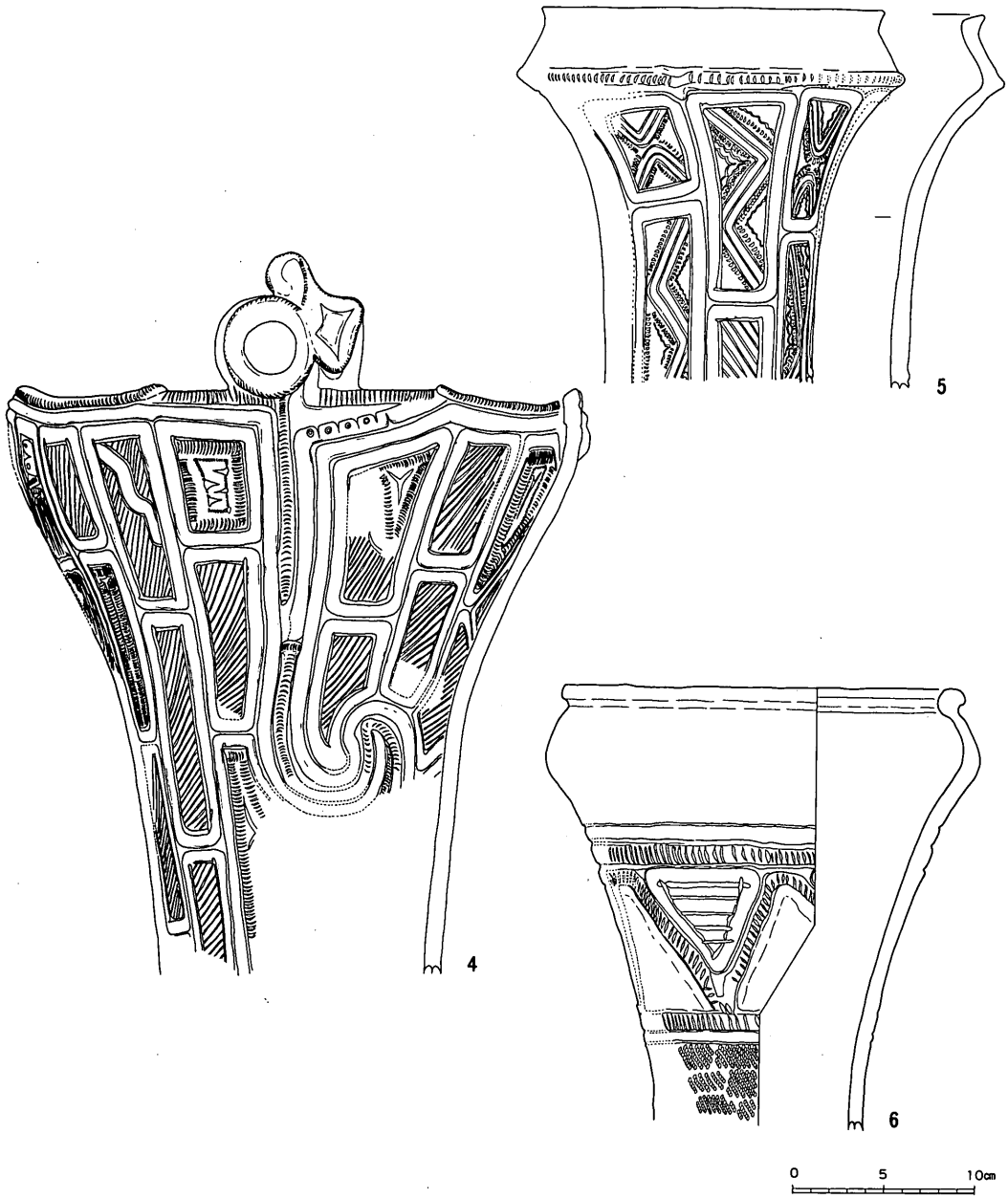
山城遺跡は、発掘調査によりその一連の時期の遺物を出土する遺跡であることは周知されており、赤木山遺跡群において、この仮称中央部支群は、仮称南支群（前田・木下・白神場遺跡）が縄文中期における核的位置をしめるのと同様、縄文晩期から弥生中期にかけての核的位置を与えられるものと思われるがいかがであろうか。加えて言うなら、松本平においてこれだけの広範囲で、一連の時期が捉えられる所は数少く、赤木山遺跡群の考古学的な重要性もこの点にあると考えるのである。

第５点は、北洞遺跡出土のＳ字状口縁台付甕（第33図66）についてである。松本平においては、その報告例は極くまれで、貴重なものといえる。出土状態や遺構が明確でないことは残念であるが、採集遺物のためいたしかたあるまい。松本平では、弥生時代後期後半から古墳時代前半期は、その遺構・遺物が、古く塩尻市平出遺跡の発掘において捉えられて以後、調査報告例が殆どなく、近年、大町市借馬遺跡の調査によって、その様相の一端が明らかにされたにすぎない。いわば研究上の空白とも言える時期である。更に、忽然と出現する松本市弘法山古墳の謎を解明する重要な鍵を握る時期でもある。今回のＳ字状口縁台付甕は、赤木山中という、該期の集落が大規模に展開しているとは、まず考えられない遺跡からの出土ではあるが、当地域における類例の少さと、当該時期の遺物の少さという点から、充分注目に値する。後者の視点からすると、同掲の石行遺跡出土、小形丸底土器（第33図67）も同様であろう。

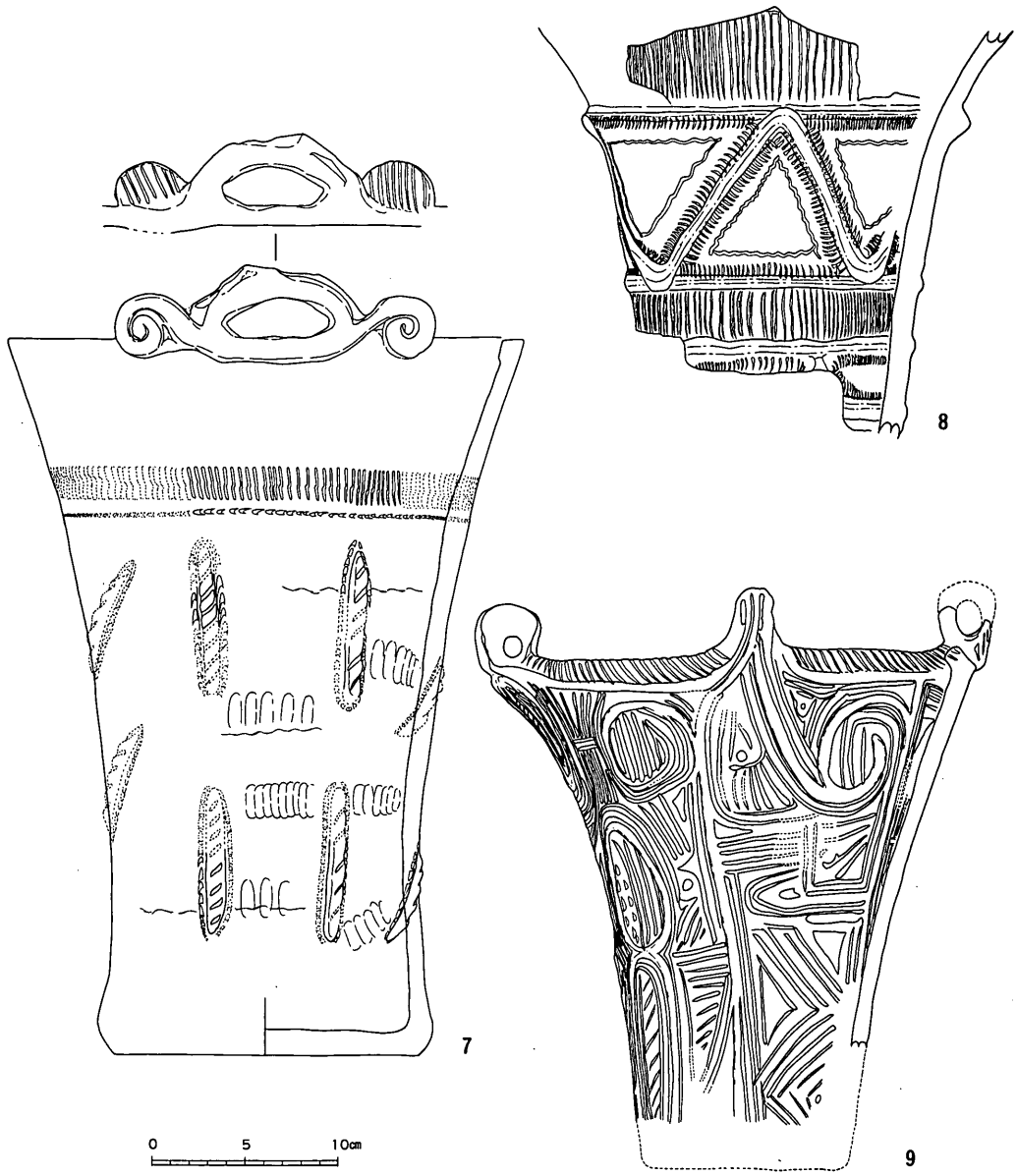
以上５点にわたり、ほぼ時代順に、今回提示の遺物について、注目すべき、問題となるべき点を、思いつくままに列挙してきた。筆者の力不足ゆえ、より深い追究がなされていない点が多々あると思うが、お許し頂きたい。しかし、それにも増して、これ程多様な様相をもつ赤木山遺跡群の重要性を理解して頂ければ、本章の目的を一応果たせたことになり幸いである。　　（直井雅尚）



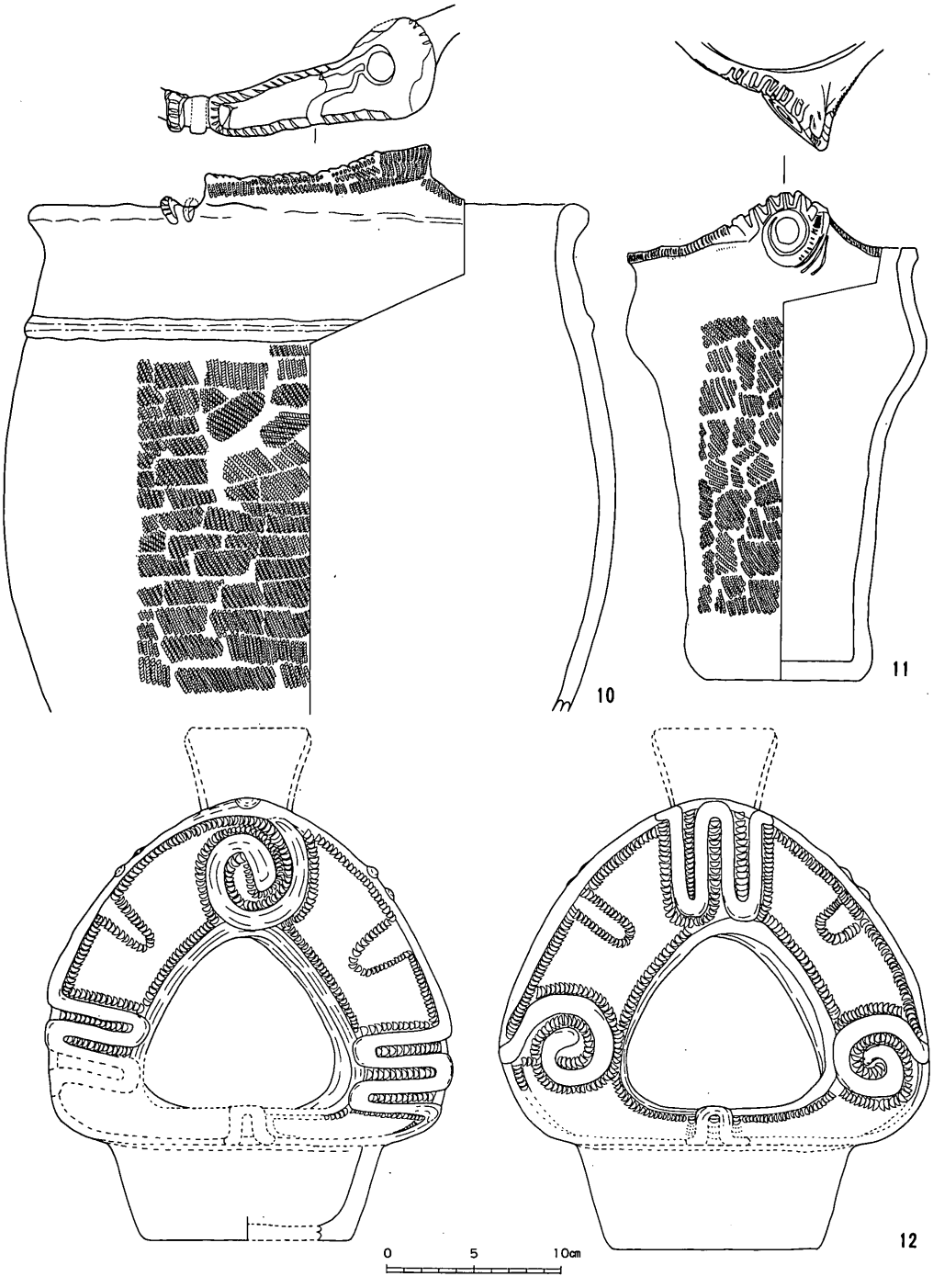
第21図　周辺遺跡出土遺物実測図（１）



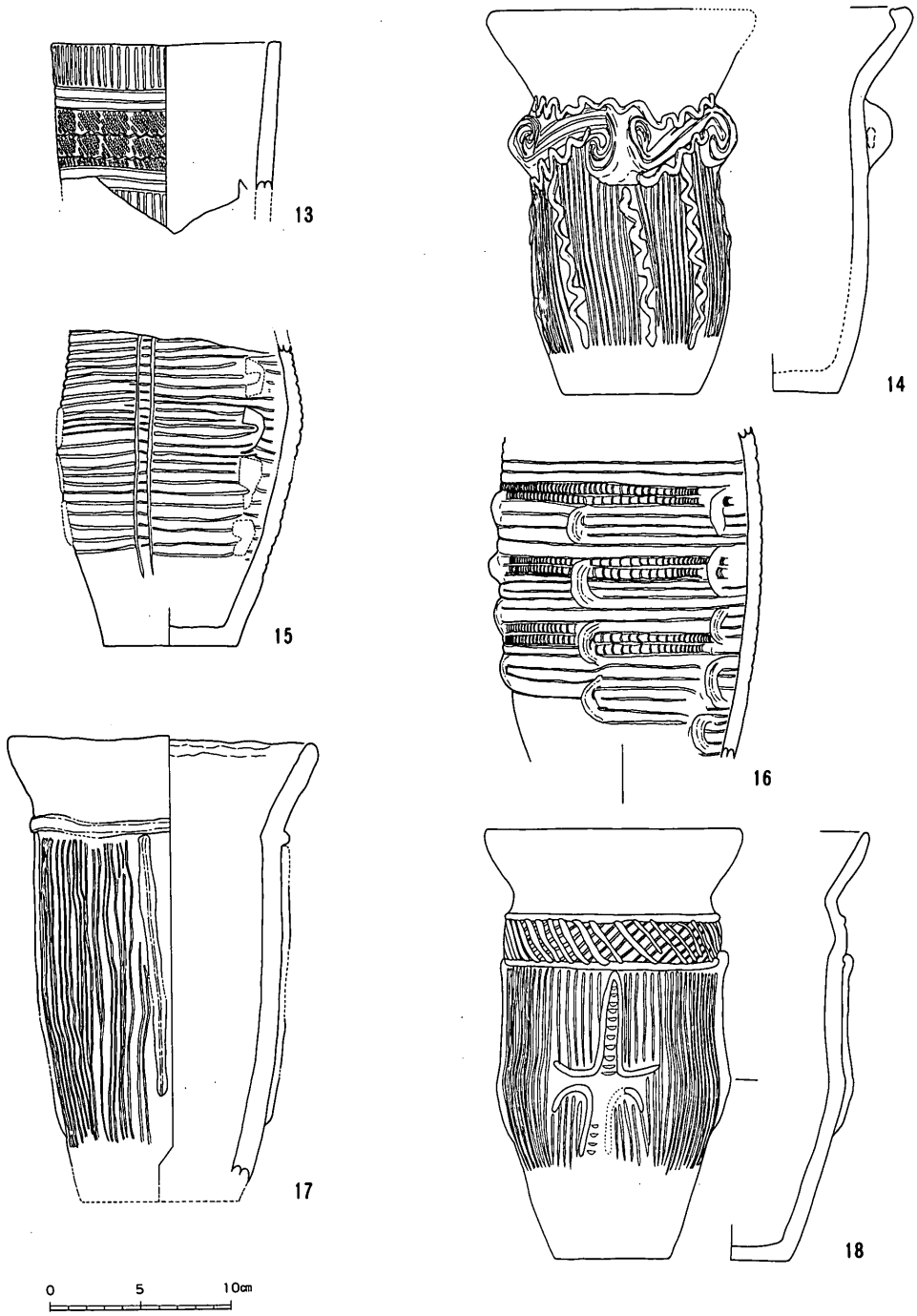
第22図　周辺遺跡出土遺物実測図（2）



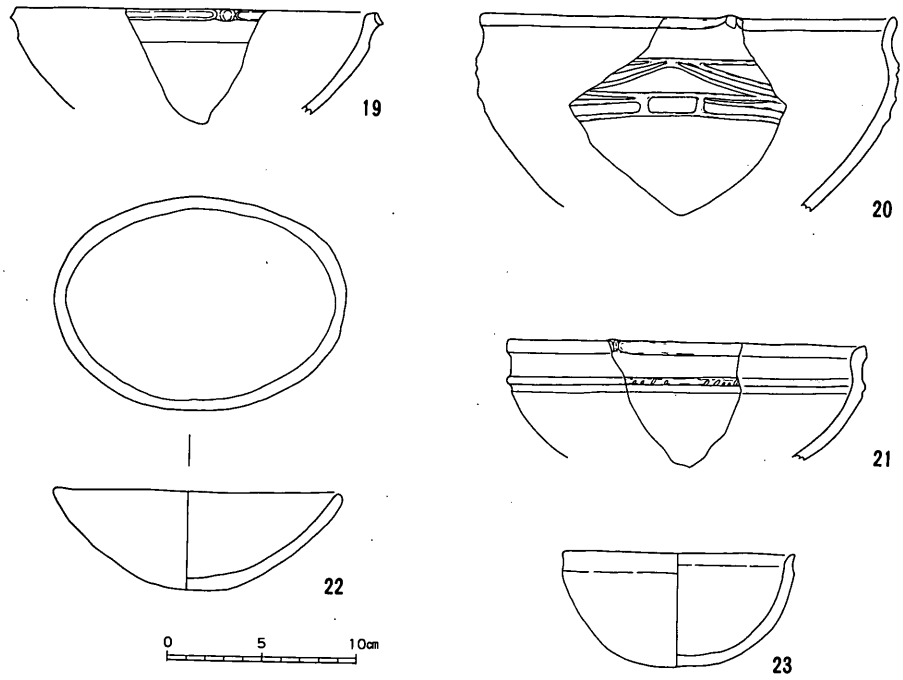
第23図　周辺遺跡出土遺物実測図（3）



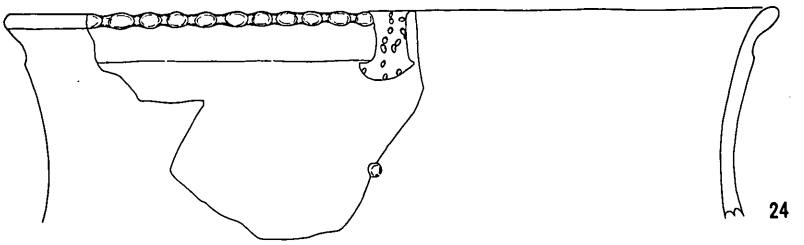
第24図　周辺遺跡出土遺物実測図（4）

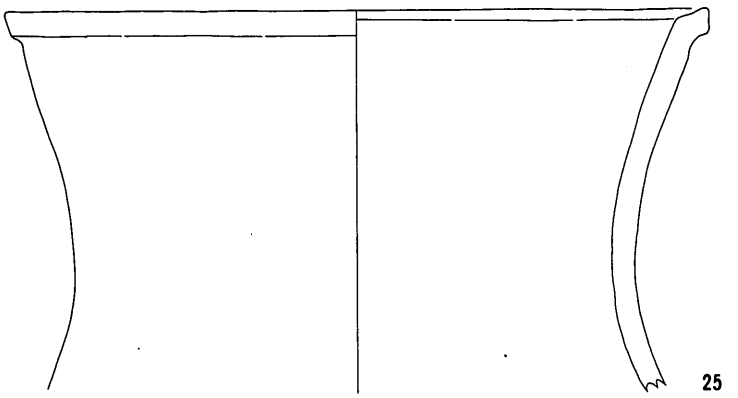


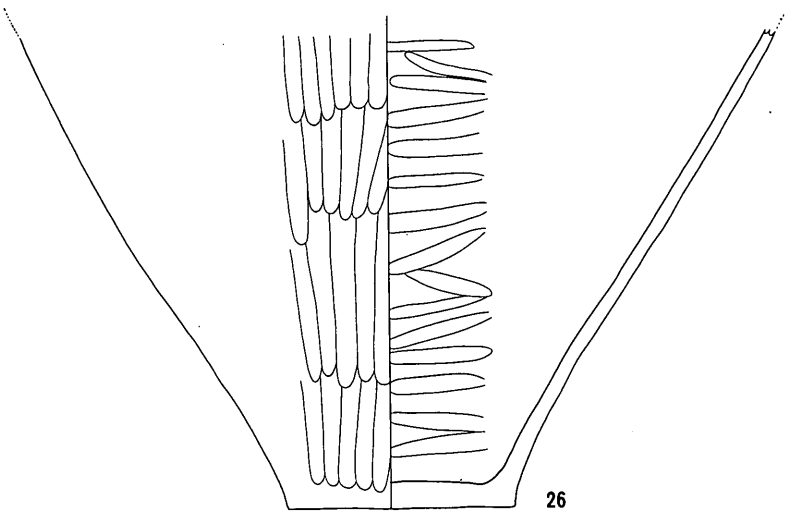
第25図　周辺遺跡出土遺物実測図（5）

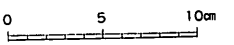


第26図　周辺遺跡出土遺物実測図（6）

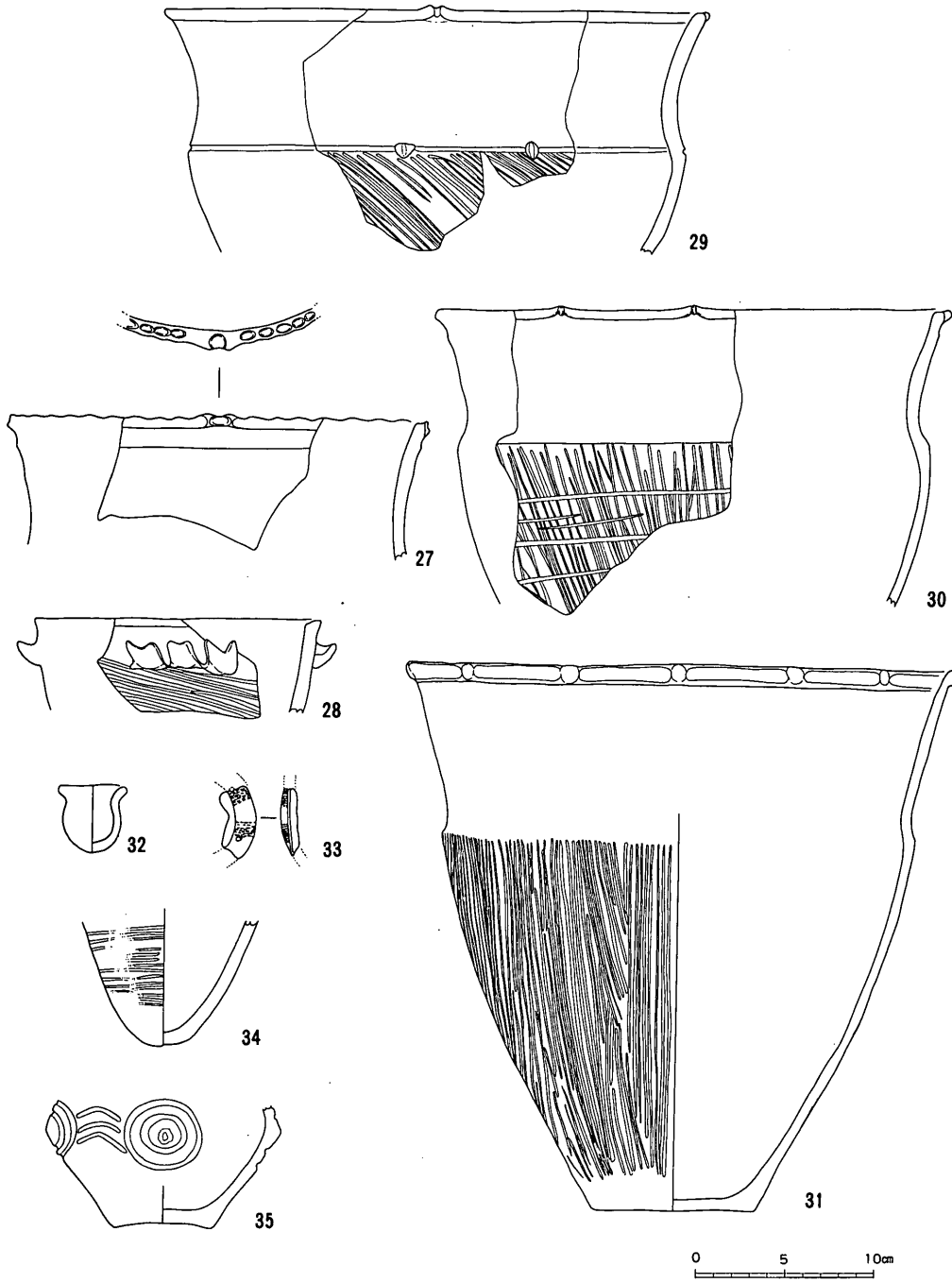




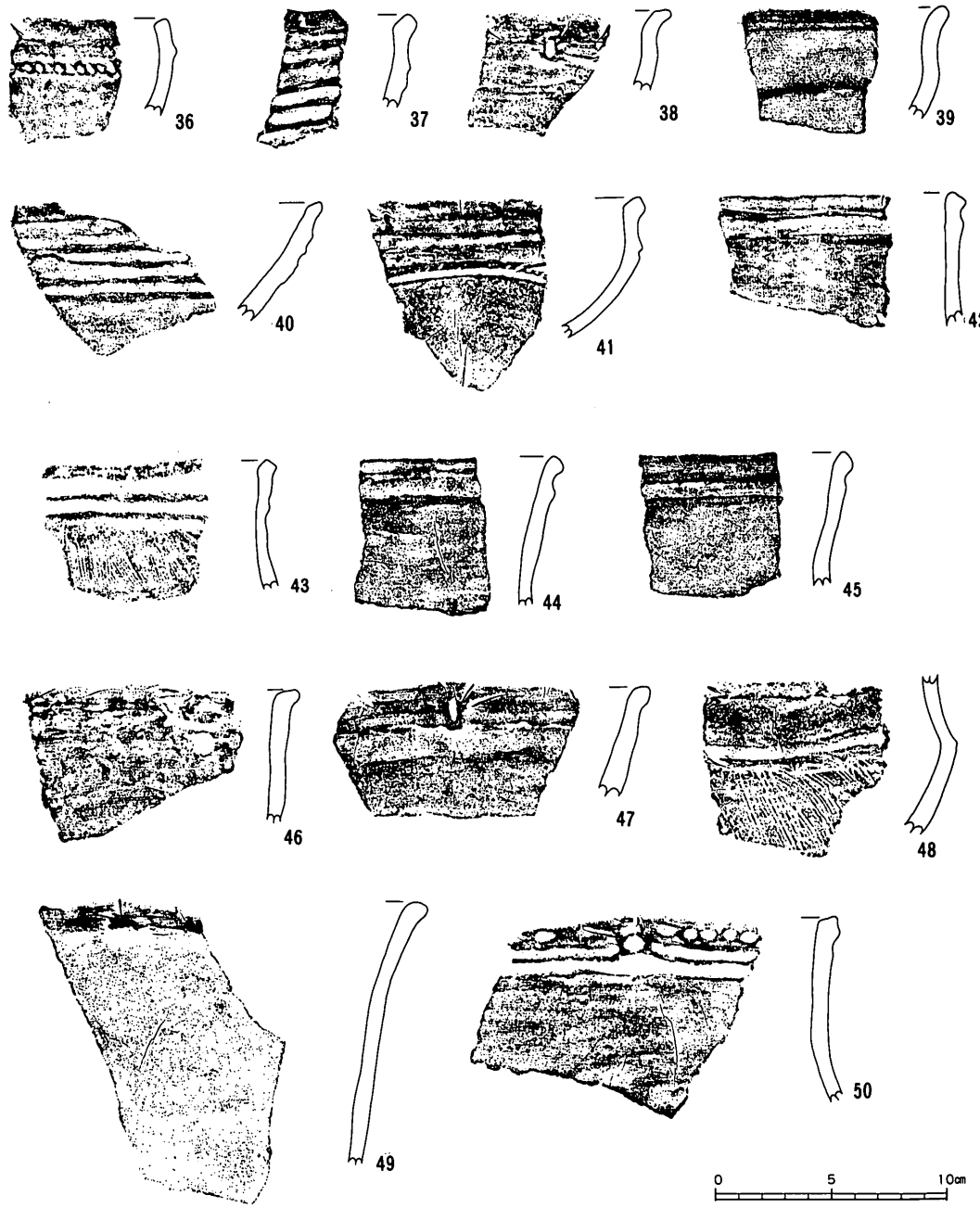




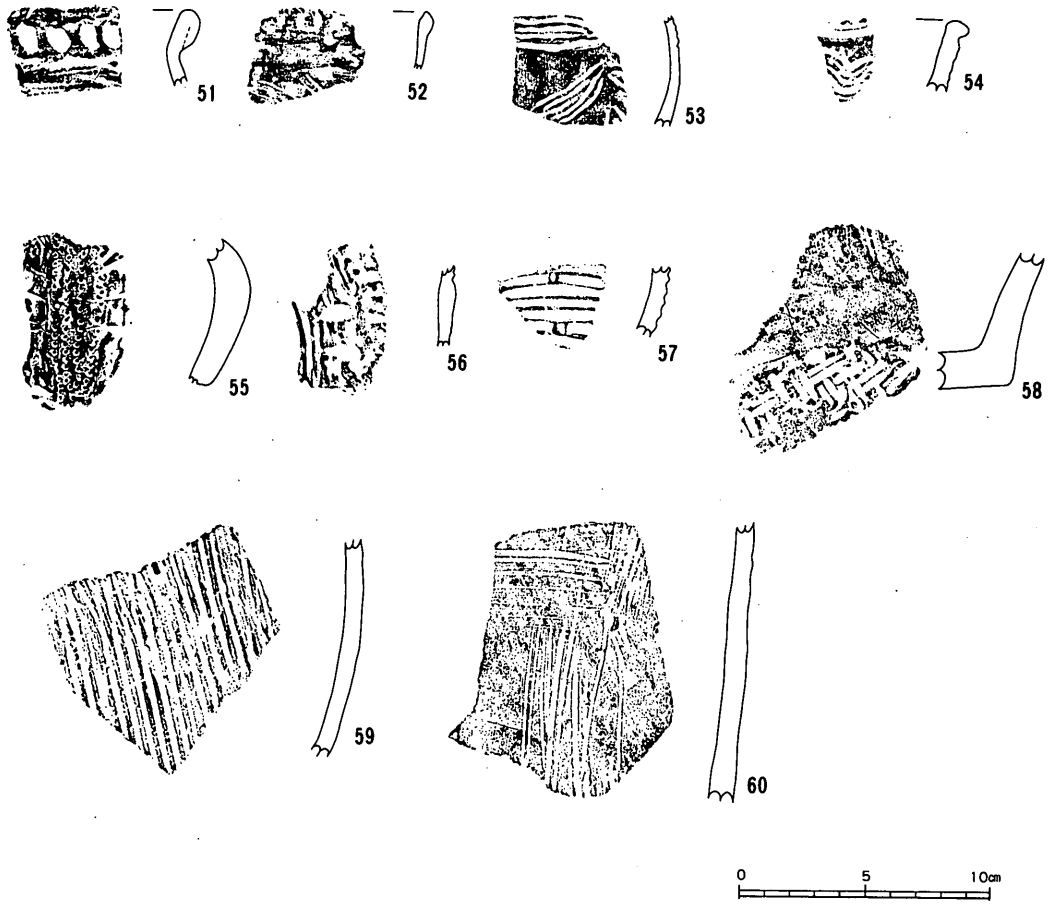
第27図　周辺遺跡出土遺物実測図（7）



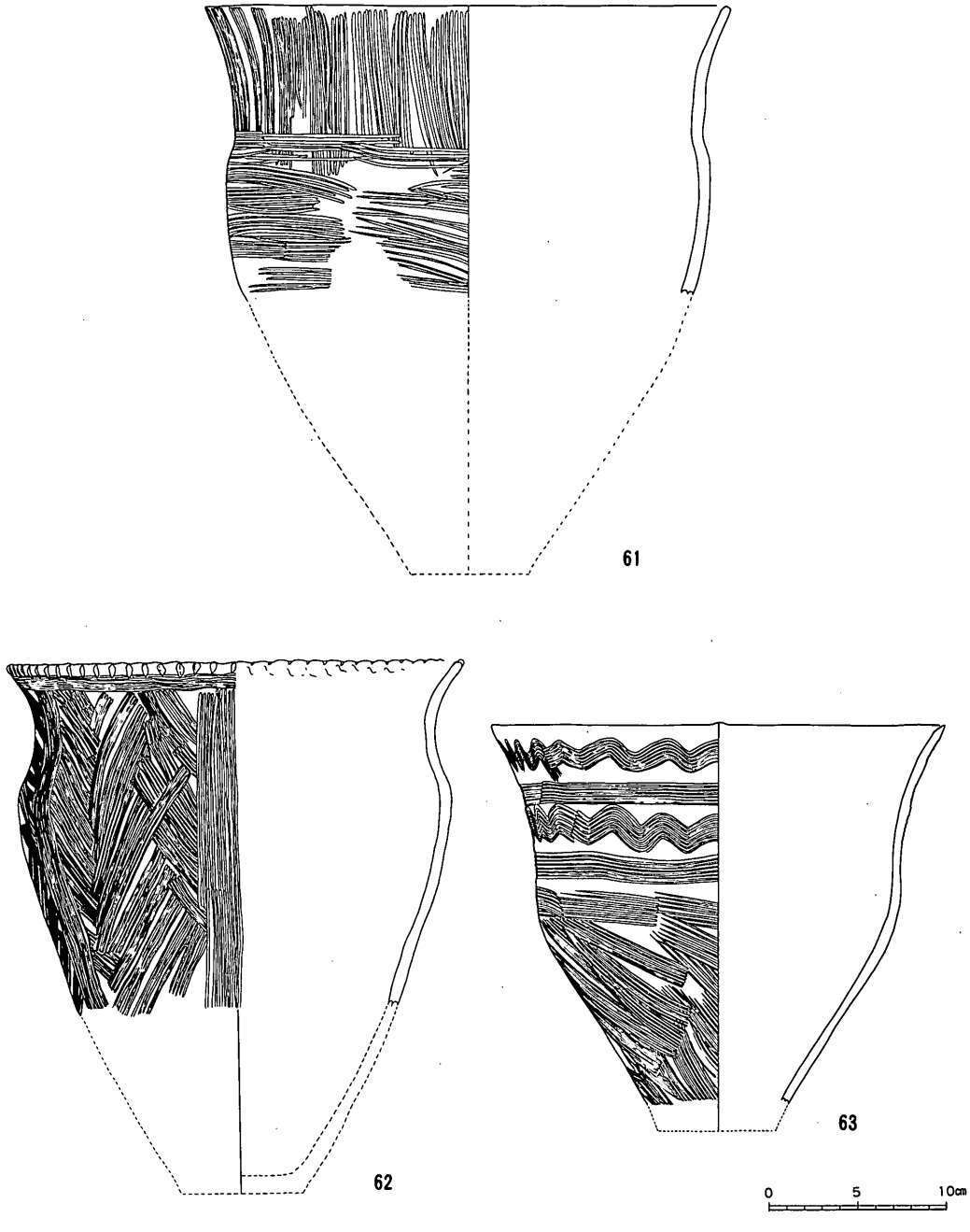
第28図　周辺遺跡出土遺物実測図（8）



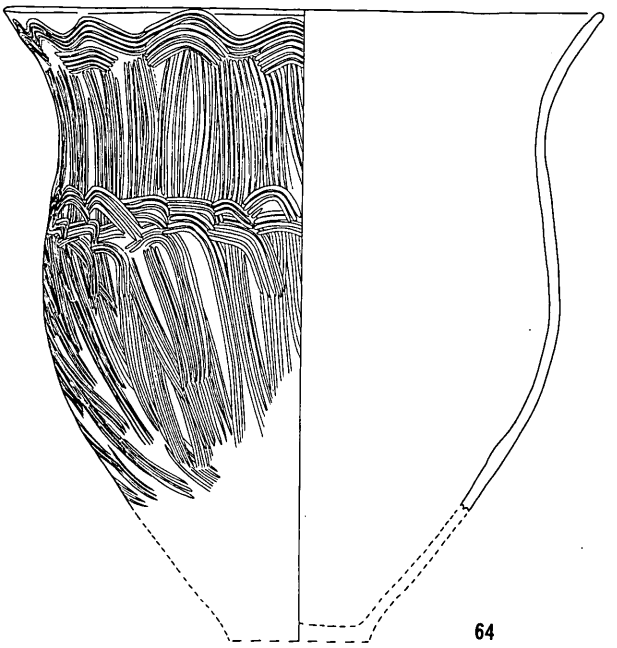
第29図　周辺遺跡出土遺物実測図（9）

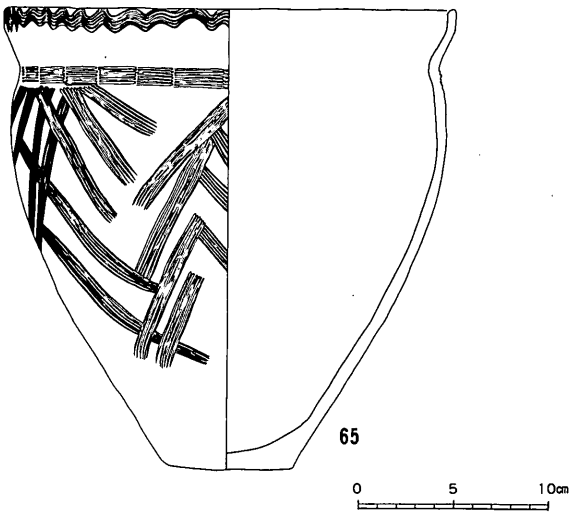


第30図　周辺遺跡出土遺物実測図(10)

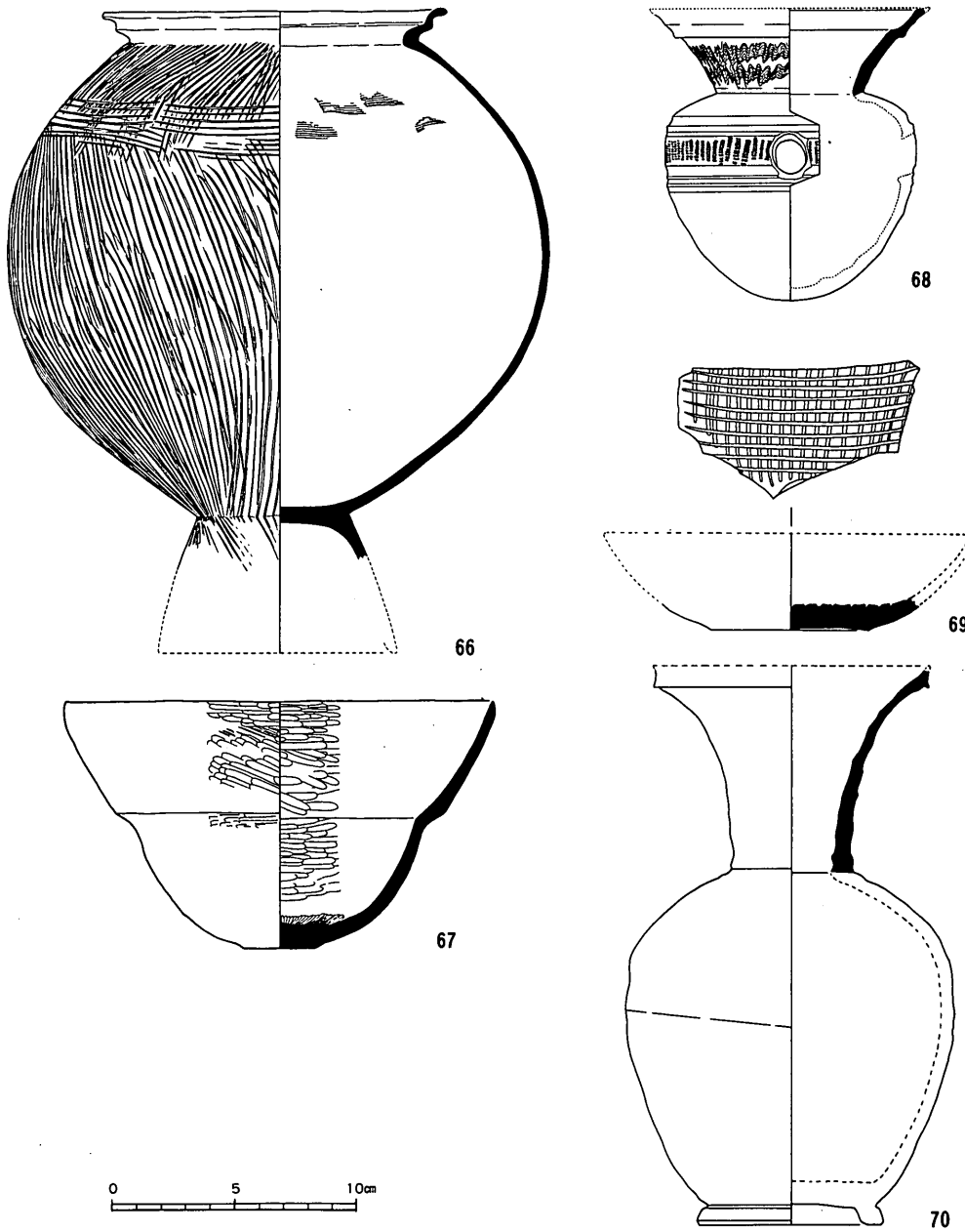


第31図　周辺遺跡出土遺物実測図(11)

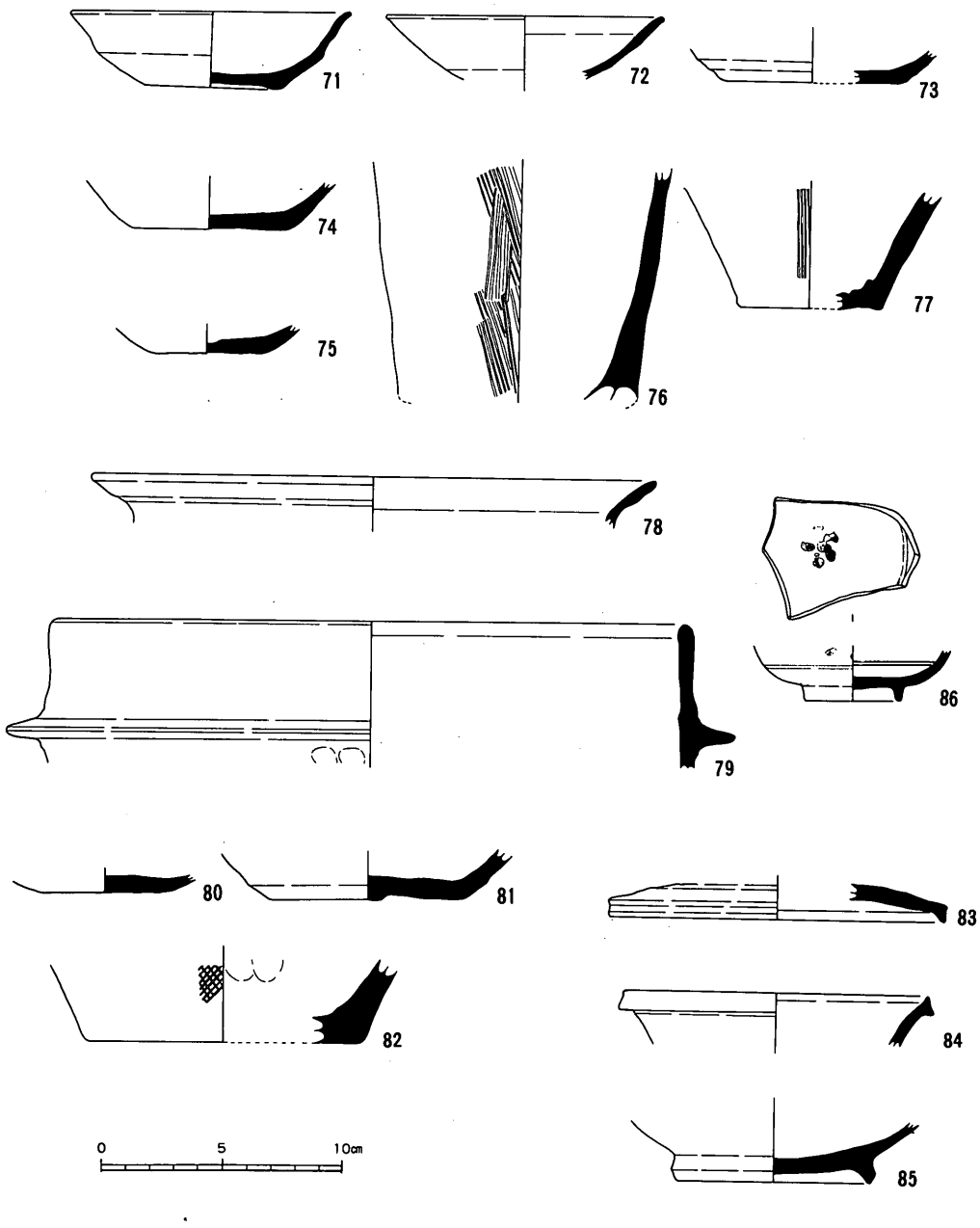




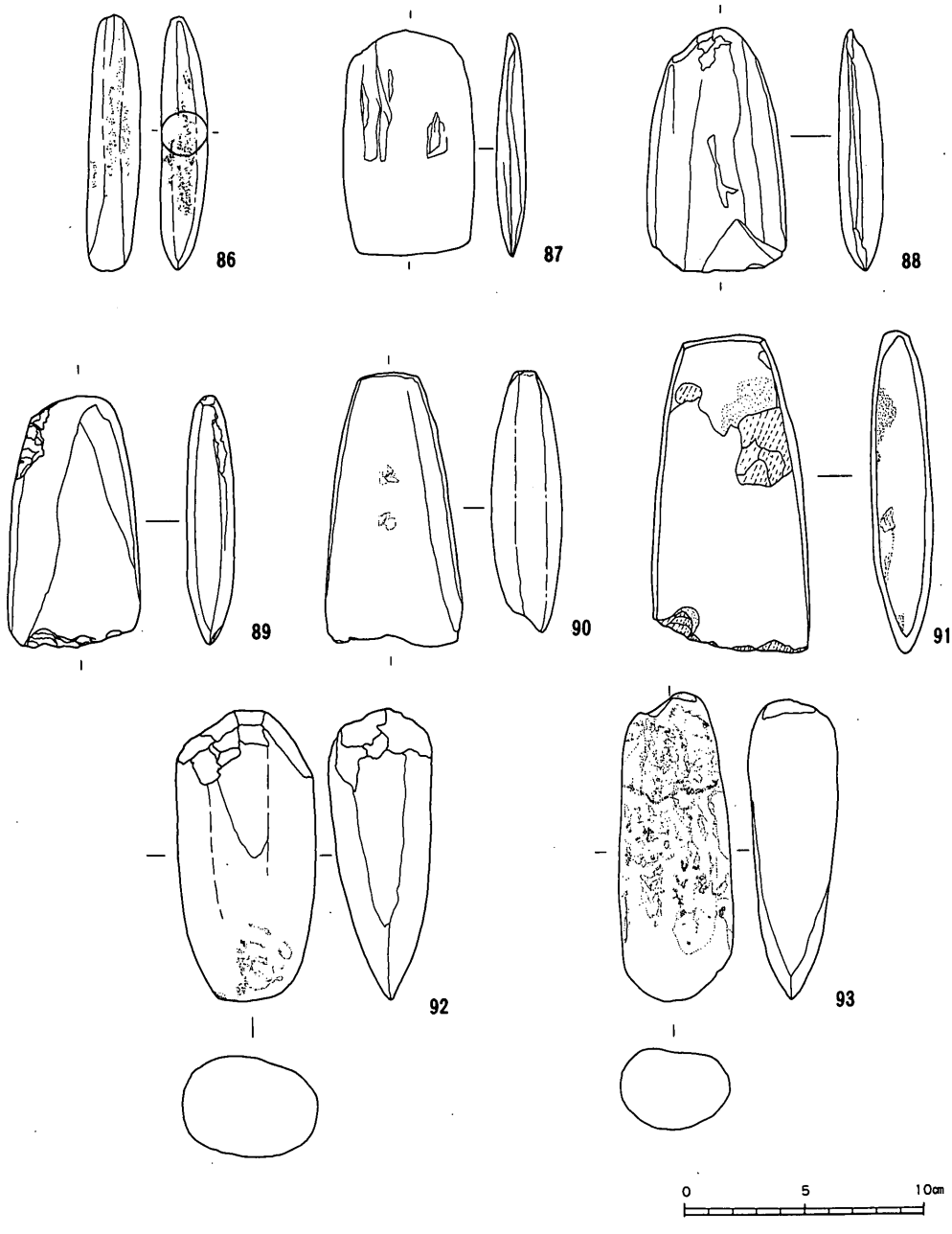
第32図　周辺遺跡出土遺物実測図(12)



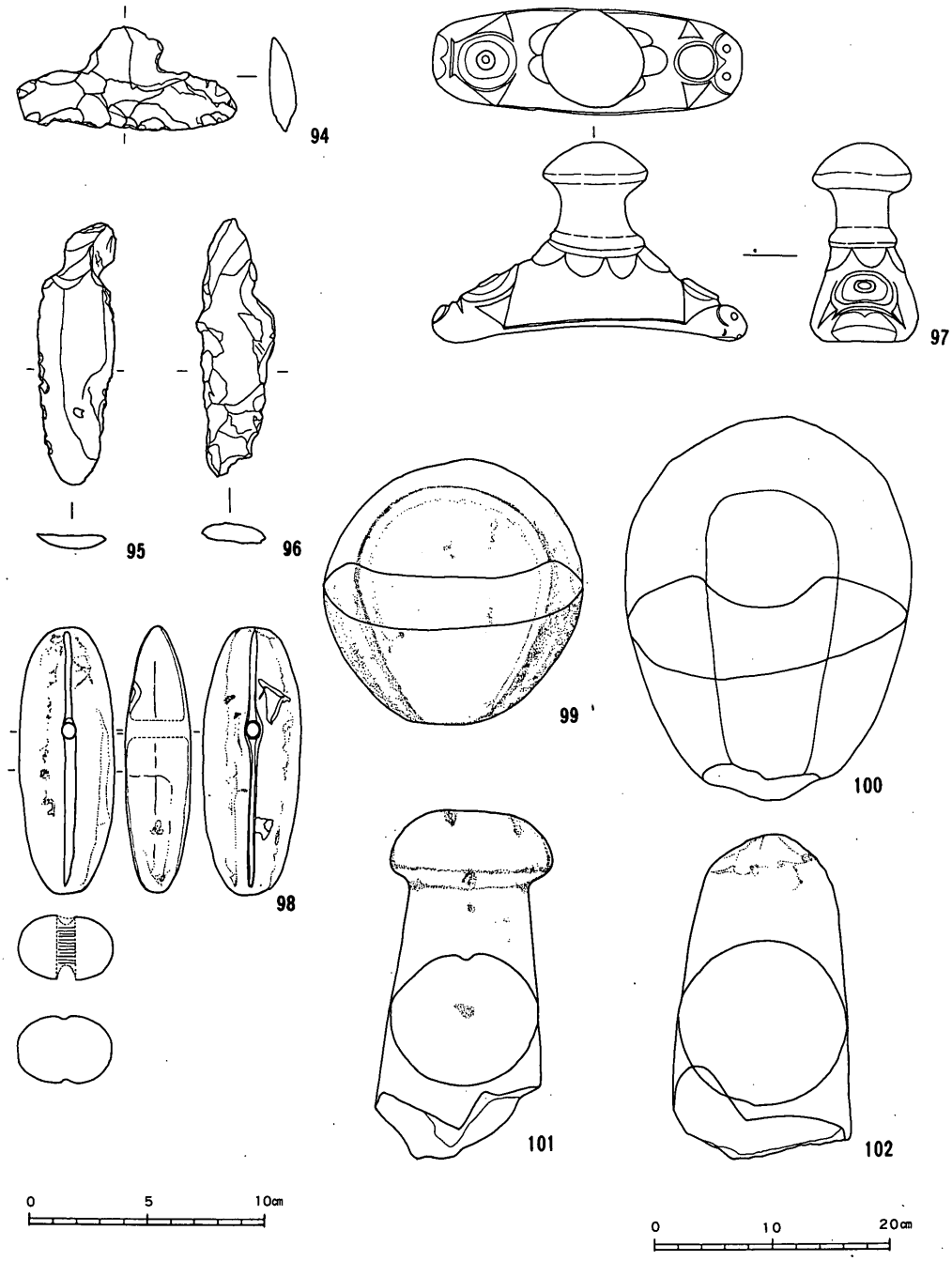
第33図　周辺遺跡出土遺物実測図(13)



第34図　周辺遺跡出土遺物実測図(14)



第35図　周辺遺跡出土遺物実測図(15)



第36図　周辺遺跡出土遺物実測図(16)

第5章　ま　と　め

第1節　暗渠排水溝址について

本遺跡A・B地区の暗渠排水溝址は①溝を掘って礫を入れたもの、②溝を掘り木の樋を入れたもの、③溝を掘り、二本の丸太を平行に並べ、その上に拳大の礫を入れたもの、④溝を掘り2本の丸太を平行に並べ、割板で蓋をしたもの、等があり、樋を使ったものも、途中で作りかえたか、丸太を2本配したものと接続したり土管を接続したり、更にはビニールパイプを用いているものまで検出され、この排水溝が昭和もつい最近まで使われていたことを伺わせる。

B地区は湿気の多い水田であり、東北隅は湿田になっていて菖蒲が生えており、西側水田でも水口に水を溜めて、苗おこしの散水用に使っていた。上記様態の暗渠排水溝は当地では一般に作られていたものと言われ、松本市惣社・宮北遺跡でも、同様の礫列があり、畦畔と並行することなどからして、これも同様な暗渠排水溝と思われる。また湿田改良に溝の中に粗朶を敷いた方法も行われていた(1)との話もきく。

暗渠排水溝は俗に〝ガニ水道〟とも言われ岡谷市川岸の追鶴沢遺跡(2)諏訪市の城山遺跡、茅野市の入の日影遺跡(3)、鼎町切石の山岸遺跡などで報告例があり、城山遺跡では一辺30cm程の平石を側壁に立てて土崩れを防ぎ、内部に円礫をつめて上に平石を置き蓋をしているものと、側壁の石を使用しないで、円礫、石蓋を用いているものがある。(4)山岸遺跡では側壁の石に平板の石蓋をのせたものが、弥生時代の住居址を切っているとの報告がある。(5)坂城町の開畝製鉄遺跡では、第1号集石址が巾1～2m、厚さ10～20mの帯状の集石で、石は径30～50cmのかどのとれた山石であった。集石の間には内耳土器が存在したが、掘り上げた溝状遺構と集石とは同時期ではないが、共に中世のものであり〝ガニ水道〟かも知れないとしている。(6)

これら〝ガニ水道〟は砂泥によりその役を果さなくなると、その脇へ新しく設けられたと思われ、本址の場合もAの上をB、Cが走り、Gの上をD、E、Fが走り、Eの上をFが走り、FとGは合流する。勿論ビニールパイプが一番新しく、次いで土管が接続されているBが新しいなど、ある程度の時間差をとらえることができる。土管使用例としては奈良・平安時代に截頭円錐形状を呈する土管を検出した大宰府の報告(7)もある。

本址は近世より昭和20年代更には昭和30年代まで下る遺構ではあるが、収穫の少い水田を改良し、増収をはかるために種々の工夫をこらした遺構として記録にとどめておきたい。

（神沢昌二郎）

引用・参考文献

1．松本市惣社宮北遺跡緊急発掘調査報告書。1982。松本市教育委員会。

2．長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書。岡谷１、２。昭50。長野県教育委員会

3．長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書。茅野・原村２。昭50。長野県教育委員会

4．長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書。諏訪１、２。昭50。長野県教育委員会

5．長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書。阿智・飯田・宮田。昭50。長野県教育委員会

6．森島稔、百瀬久雄「開畝製鉄遺跡」第２次調査報告。1978。坂城町教育委員会

7．「大宰府史跡」昭和56年度発掘調査概報。昭57。九州歴史資料館普及会

第２節　中世陶磁器について

本址より出土した遺物はそのほとんどが中世に位置するものであり、それらは青磁、須恵質陶器、白瓷系陶器、常滑系陶器、土師質土器と分けられる。このうち、本稿では青磁、白磁などの輸入陶磁器について出土遺跡の分布を主として考えてみたい。

1　県内における輸入陶磁器出土例

県内の遺跡総数は12603ヶ所であり、そのうち中世の遺跡は603ヶ所、寺院跡、経塚、城跡、館跡を中世として加えると848ヶ所(1)で全県の遺跡のうち6.7%に当る。これを地域的に大きく分けてみると、北信地区4.8%、東信地区5.3%、中信地区7.5%、南信地区8.6%となり、中・南信地区が多い。これはあくまでも概数であるが、これからみると中世における繁栄の度合や、文化の流入路をおぼろ気ながら感じるのである。

同様に県下の中世遺跡における輸入陶磁器の出土遺跡をみると昭和53年の資料(2)では22例であるが、昭和56年発刊の『長野県史』遺跡地名表から中世遺跡を拾い出し、更に出土遺物欄から青磁、白磁、染付を出土しているものを拾い出したものに、近年の報告例などを加えると表４のようになり、圧倒的に南信地区が多く、約７割を占めることになる。南信地区に多い理由は研究不足で俄かに断定できないが、中世遺跡所在数について上述したことと一致すると思われる。

中信地区についてみると、遺跡数の少いことは今までの発掘調査が比較的山麓に位置する縄文・弥生・古墳時代にかたよっていたためと思われ、今後激増する中央道および中央道関連工事にからむ平坦地における発掘調査によって、出土例が増えることが期待される。

需要層も官衙、寺院、城址などと、一般的な遺跡とを比べると一般的な遺跡の方が多く、この時期になると、かなり青磁などが上流階層から一般農民のある程度まで巾広く使われていたのではないかと思われる。

2　松本市内における輸入陶磁器の出土例

松本市内では表出の島内法住寺跡、大村堂田廃寺跡、松本工業高校遺跡より青磁片が検出されているが、いずれも小破片であり、その器形をも推定し難い。しかし昭和57年度発掘調査を行った遺跡からは、三遺跡から青磁小破片の出土をみ、それらはいずれも碗で、外面に蓮弁文を付したものと、文様の有無の不明なものとであり、１片だけ内面に劃花文かとおもわれる文様が僅かに残る破片がある。

遺跡は57年度出土のものは、新村秋葉原遺跡(古墳及び江戸時代の墓址、土座敷)、推定信濃国府分布調査(平安時代)、本遺跡の三遺跡で遺跡そのものと合致するものは本遺跡のみである。需要層もはっきりしないが、碗が多いということから推して、全県的傾向と一致して、かなり広い層まで使用されていたのではないかと思われる。　　(神沢昌二郎)

註

1.「長野県史」考古資料編遺跡地名表　昭56. 3.

2. 矢部良明『日本出土の中国陶磁』「中国陶磁出土遺跡一覧表」東京国立博物館　昭53. 3.

表4　地　区　別　遺　跡　数

	中世遺跡	寺院跡	経塚	城跡	館跡	遺跡総数
北信地区	84	10	5	40	8	3,046
東信地区	119	2	1	28	2	2,885
中信地区	110	7	2	23	13	2,072
南信地区	290	3	5	93	3	4,600
計	603	22	13	184	26	12,603

(長野県史遺跡地名表より)

表5 磁器出土の遺跡一覧表

栗林遺跡	中野市栗林	青磁
小曽崖城跡	中野市新野	〃
牧之島城跡	信州新町牧野島	〃
水内坐一元神社遺跡	長野市柳原小島	〃
篠ノ井遺跡	長野市塩崎平久保	〃
屋地遺跡	長野市松代東条屋地	〃
北日名経塚遺跡	埴科郡坂城町北日名	白磁
北村遺跡	小県郡青木村奈良本北村	磁器
信濃国分寺跡	上田市国分仁王堂	青磁
東の宮遺跡	上田市浦野東の宮	〃
中井遺跡	上田市中塩田保野	〃
塩田城跡	小県郡丸子町	〃
一本柳遺跡	佐久市岩村田一本柳	磁器
市道遺跡	佐久市野沢三塚	青磁
こや城遺跡	東筑摩郡明科町中川手明科小屋	〃
法住寺跡	松本市島内下平瀬	〃
大村堂田廃寺跡	松本市大村	〃
長野県立松本工業高等学校遺跡	松本市筑摩	青磁 白磁
大沢遺跡	木曽郡上松町荻原倉本	陶磁器
中村A遺跡	木曽郡木曽福島町大原	磁器
田代遺跡	木曽郡上松町小川寝覚	青磁
花岡城跡	岡谷市花岡	〃
小田井遺跡	岡谷市花岡小田井	陶磁器
神場木遺跡	岡谷市小坂神場木	〃
殿村遺跡	諏訪郡下諏訪町高木	青磁
地獄久保遺跡	諏訪郡下諏訪町	〃
十二ノ后遺跡	諏訪市有賀	〃
女帝垣外遺跡	諏訪市有賀町屋	〃
旧御射山遺跡	諏訪市四賀桑原霧ケ峯	〃
丹羽屋敷遺跡	諏訪市豊田有賀	磁器
荒神山遺跡	諏訪市湖南大熊	青磁
武居畑遺跡	諏訪市中州神宮寺	〃
栃窪岩陰遺跡	茅野市北山相原	陶磁器
東方A遺跡	伊那市西春近東方	青磁
中道遺跡	上伊那郡箕輪町	〃
五輪遺跡	上伊那郡箕輪町中箕輪八乙女	陶磁器
唐沢城跡	上伊那郡飯島町飯島鳥居原	〃
本郷南羽場遺跡	上伊那郡飯島町本郷	青磁・白磁
郷倉遺跡	上伊那郡宮田村南割	磁器
古町遺跡	上伊那郡宮田村南割	青磁
常輪寺下遺跡	伊那市西春近山本	青磁
カンバ垣外遺跡	伊那市西春近南小出	青磁・白磁
丸山遺跡	伊那市西春近南小出	白磁
山寺垣外遺跡	伊那市西春近白沢	青磁
薬師堂遺跡	伊那市西春近下島	〃
駒形遺跡	伊那市東春近田原	〃
男塚遺跡	伊那市東春近田原	〃
的場遺跡	下伊那郡松川町元大島古町	〃
丈源田IV遺跡	下伊那郡松川町上片桐丈源田	〃
赤坂遺跡	下伊那郡阿智村小野川	〃
神坂峠遺跡	下伊那郡阿智村神坂山	〃
吉岡城跡	下伊那郡下条村吉岡	〃
早稲田遺跡	下伊那郡阿南町大下条西条早稲田	〃
城館跡	下伊那郡豊丘村神稲田村	〃
和見遺跡	下伊那郡南信濃村南和田和見	〃
天伯A遺跡	下伊那郡鼎町切石天伯	〃
新井原遺跡	飯田市座光寺高岡	〃
阿弥陀垣外遺跡	飯田市座光寺恒川	〃
流田遺跡	飯田市座光寺流田	〃
宮ノ先遺跡	飯田市伊賀良	〃
小垣外遺跡	飯田市大瀬木	〃
大東遺跡	飯田市大瀬木	〃
酒屋前遺跡	飯田市大瀬木	〃
北平遺跡	飯田市駄科	〃
石子原遺跡	飯田市山本南平	〃
上の金谷遺跡	飯田市北方	青磁・白磁

（長野県史遺跡地名表より抽出）

第3節　結　　語

小赤遺跡は赤木山遺跡群の中に包括される一遺跡で、松本市寿赤木地籍に所在する。今回発掘調査された箇所はその西北部の山麓につらなる平地部で、田畑の県営ほ場整備事業に伴う、事前の緊急発掘調査であった。この赤木山遺跡群内からは、かつて地元の古屋人兄氏によって、別項に報載される如き、旧石器時代より古代にわたる、数々の特筆される遺物が表採されており、かねてより関係者間に注目されると共に、その遺跡群の重要性に関心がもたれていた。依って今回の調査には、当初より大きな期待が寄せられていた。

調査は8月25日より開始され、9月22日に終了するまで、調査団や、あがた考古会、寿史談会等の協力を得る中で実施され、A～E各地区及びI～III各トレンチ内の発掘により合計約2,300m²の内容を明らかにする。その結果主なる事項として、下記の如き遺物、遺構の検出をみるにいたった。

まず遺構として、土壙とそれに隣接するピット群、それに水田の暗渠排水施設があげられる。土壙はIIIトレンチの、東末端部の拡張区に発見されたもので、ピット群の西北部に接しており、規模は東西約2 m、南北約3 mの不整方形状を呈し、その深さは約0.5mを示し、上部面より底部にいたるまで、炭化物や焼土灰が堆積充満していた。これらの堆積物の上部より中部にかけては、長さ約5 cm、直径約0.5cm位の釘状鉄製品が、散在して12個検出され、覆土中及び底部辺よりは、土師器片、白瓷片とみられる細片が微量出土する。ピット群は、この土壙に隣接する南東部に発見されたが、建物跡を推測させるものの、建てかえを感じさせたり、その分布範囲、全体の規模、配列等を追求できず、明確を期せなかった。おそらく両者は密接な関係をもつ施設かと思われる。1箇所のピット内（P_1）より砥石が出土する。又、A地区より関連遺構の検出は望めなかったが、鉄滓の散在と、微量の土師器、須恵器、白瓷の各破片が得られ、これらに混じて、宋代の輸入青磁の碗とみられる破片が若干検出される。前述の遺構に接した地帯であり、おそらく遺構とは共伴関係にある遺物とみてよいかと考えられる。これらの諸資料から、古代末～中世初期にわたる、鍛冶屋場の存在が推考されるが、この様な鍛冶屋場遺構から、鉄滓や土師器、須恵器、白瓷と共に青磁類が検出された事例は、笹賀の神戸遺跡他等にもある。然し本遺跡の場合、鍛冶屋場としての積極的な裏付資料ともなる遺構、遺物に今一歩の感を覚える。

その他主なる遺物としては、地点を異にして散在するかたちで、縄文期の有舌石鏃、黒曜石片、元豊通宝、皇宋通宝等や、中世の内耳鍋片などの出土が挙げられる。

年代は下降して、明治年代を主として、近世末から現代に及ぶと考えられる、水田の暗渠排水施設が、A～B各地区に計10筋検出される。総じて東側より若干北に向をふりながら、西の低所に向けて構築された溝が多く、その内巾も30～40cm程度を示していた。該所が粘土層や不透水層の堆積のため、湿田の排水が目的の施設で、その構築には大別四種の形態がうかがえた。その一は比較的

古い様相を感じさせるもので、人頭大程度の石のみで溝の輪郭をとったもの。二は下に木樋をおき溝としたもの。三は下に丸太をおき、その上に石を入れたもの。四は三に木の蓋をしたものなどが認められた。

周辺遺跡としては、寿の赤木、小池地籍内に赤木山を中心として、縄文中期初頭型式土器や、各種石器類を出土する原度前遺跡があり、前述の古屋氏によって表採された、特殊な石冠が注目されるし、清水林より縄文土器、各種石器の出土が認められ、独鈷石片が得られており、野石からは石鏃や石剣片、南洞より石剣片、小赤より条痕文土器、北原より縄文土器、各種石器に混じて、大形の有孔玉器が知られ、唐沢、前田、野田、小池中村より石器、土器などの出土があって、特殊石器の出土が特に目立ち、その用途と共に他にあまり類例を知らない性格の集落が、存続したのではないかと推測せしめる。又、石行遺跡からは縄文晩期後半の遺物出土が知られており、その主体を縄文晩期におく、北内田のエリ穴遺跡や、塩尻の柿沢山ノ神B遺跡、下松井沢B遺跡とのからみの上で見逃し得ないし、通史的にも縄文後期の塩尻の剣の宮、下西条平林、南内田の小丸山、松座ヤシキ、横山城各遺跡とのかかわりの中で、東山山麓地帯にひらけた、縄文後晩期遺跡の全体像、流れ等を追究する上で、特に注意される。

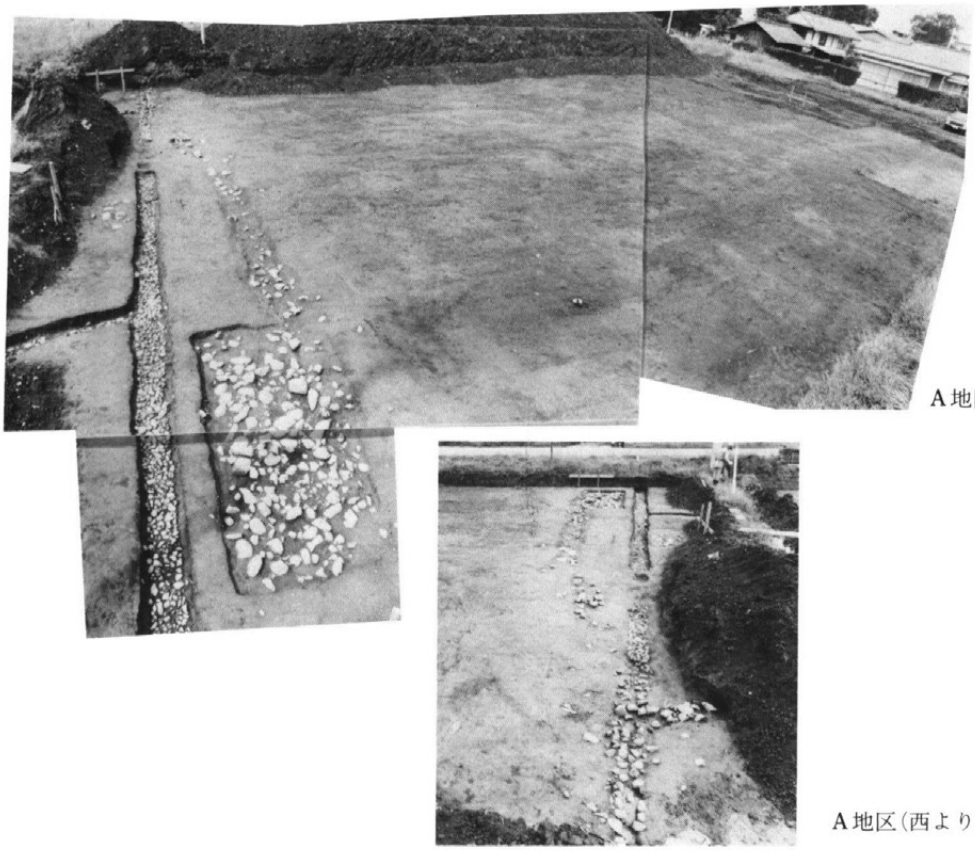
今回調査された小赤遺跡は、赤木山周辺遺跡の中でも、その中心からやや外れた位置に所在し、加えて湿地性が強く、集落立地に不適当な場所と考えられる。為にその調査結果は、前述の如く期待が寄せられつつも、目立った遺物、遺構には恵まれなかった。然し一地域の地下に埋没した過去の歴史を、多少なりとも明らかにし得たのは、必らずしも無意味なものでないことを物語る。

ここに忙中、発掘調査に参加された調査員各位、市教委社会教育課文化係の諸氏、あがた考古会、寿史談会の皆様方の、骨身をおしまない御力添えに対し、一重に深甚なる謝意を表します。

（大久保知巳）

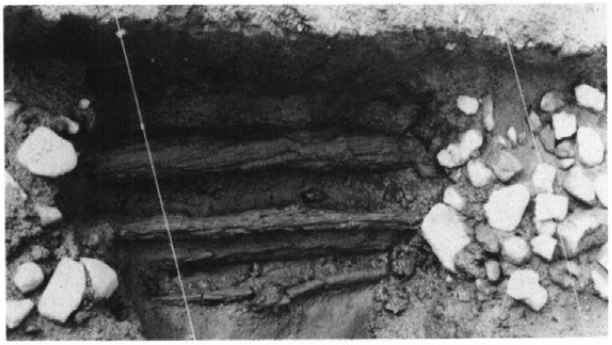
図　　版

図版１　遺跡周辺（上空より）

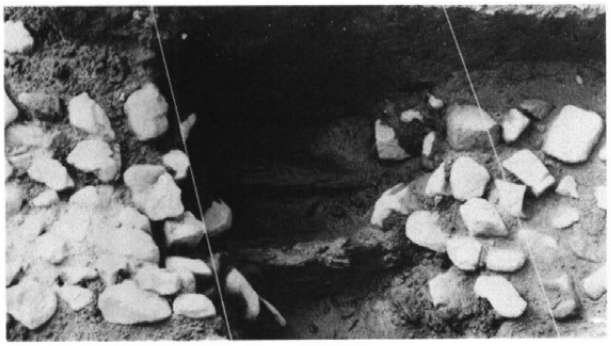


A地区(東より)

A地区(西より)



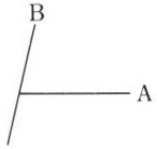
暗渠断面
A－A′



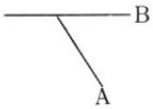
暗渠断面
B－B′

図版２　A地区全景及び暗渠排水溝址断面

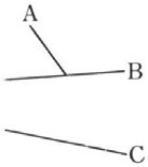
図版３　Ｂ地区暗渠排水溝址　その１



AとB



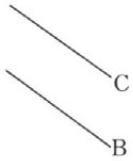
AとB
その横より



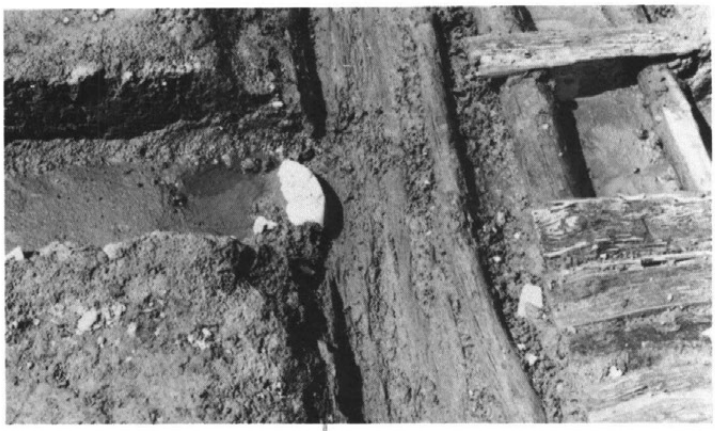
AとBとC

Aとパイプ

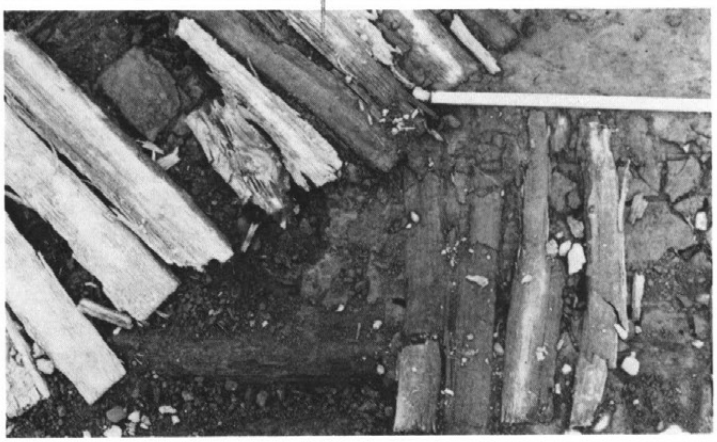
図版４　Ｂ地区暗渠排水溝址　その２

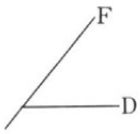


溝B，C



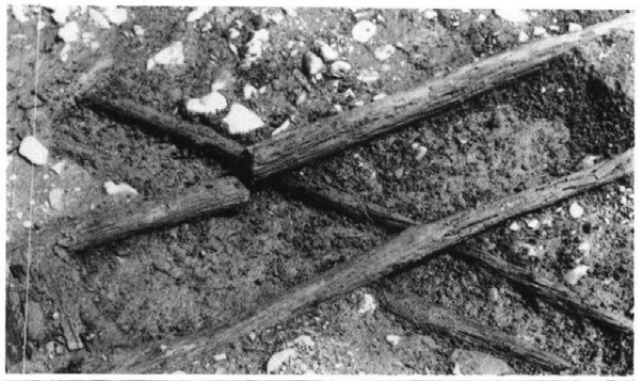
C，B



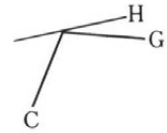


FとD

図版５　Ｂ地区暗渠排水溝址　その３



DとG

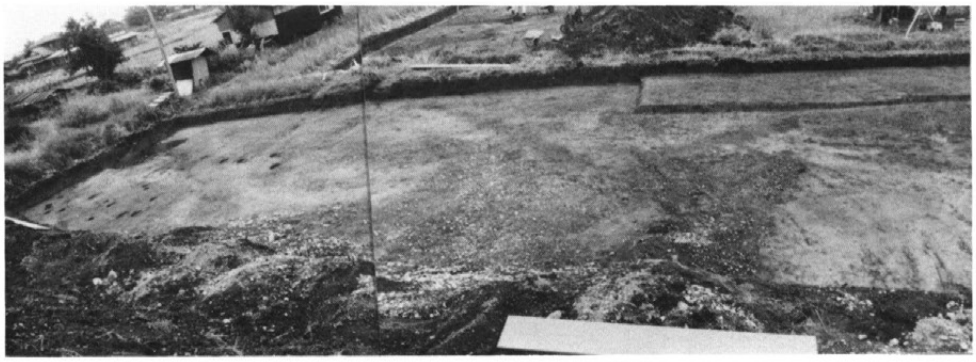


HとGとC

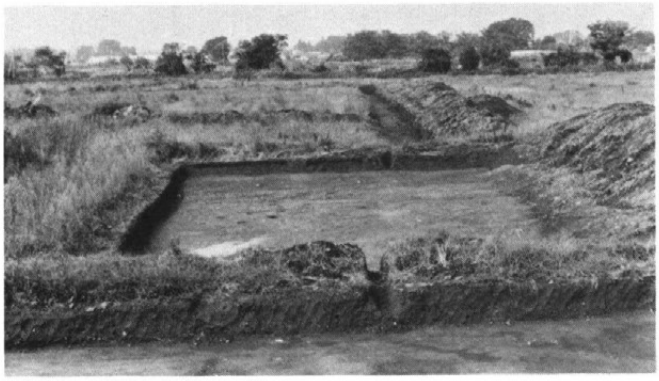
HとGとC
（GとCの蓋板をとったところ）

FとD（分岐点）

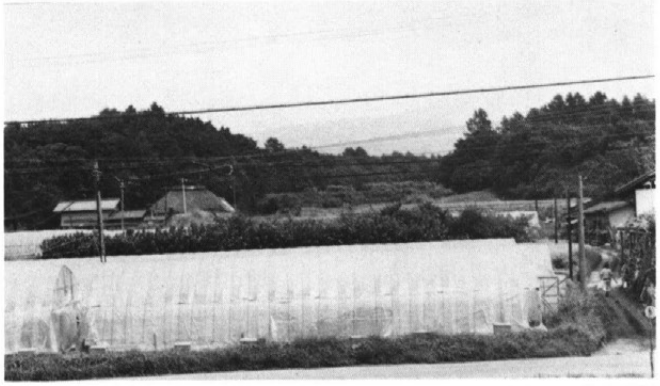
図版６　Ｂ地区暗渠排水溝址　その４



C地区
(東より)



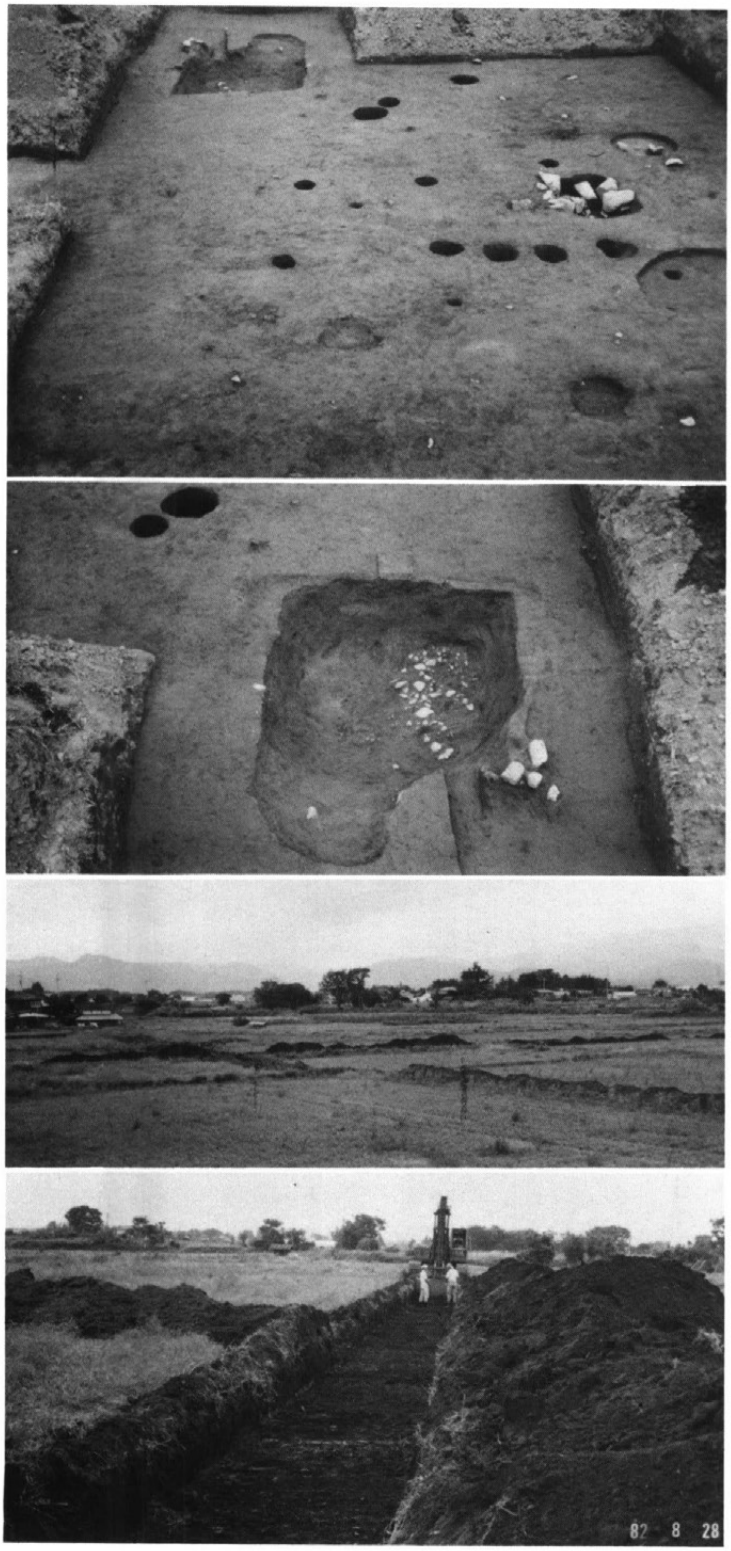
D地区（東より）



E地区遠望(西より)

E地区グリット調査風景

図版７　C，D，E地区全体図及び調査風景

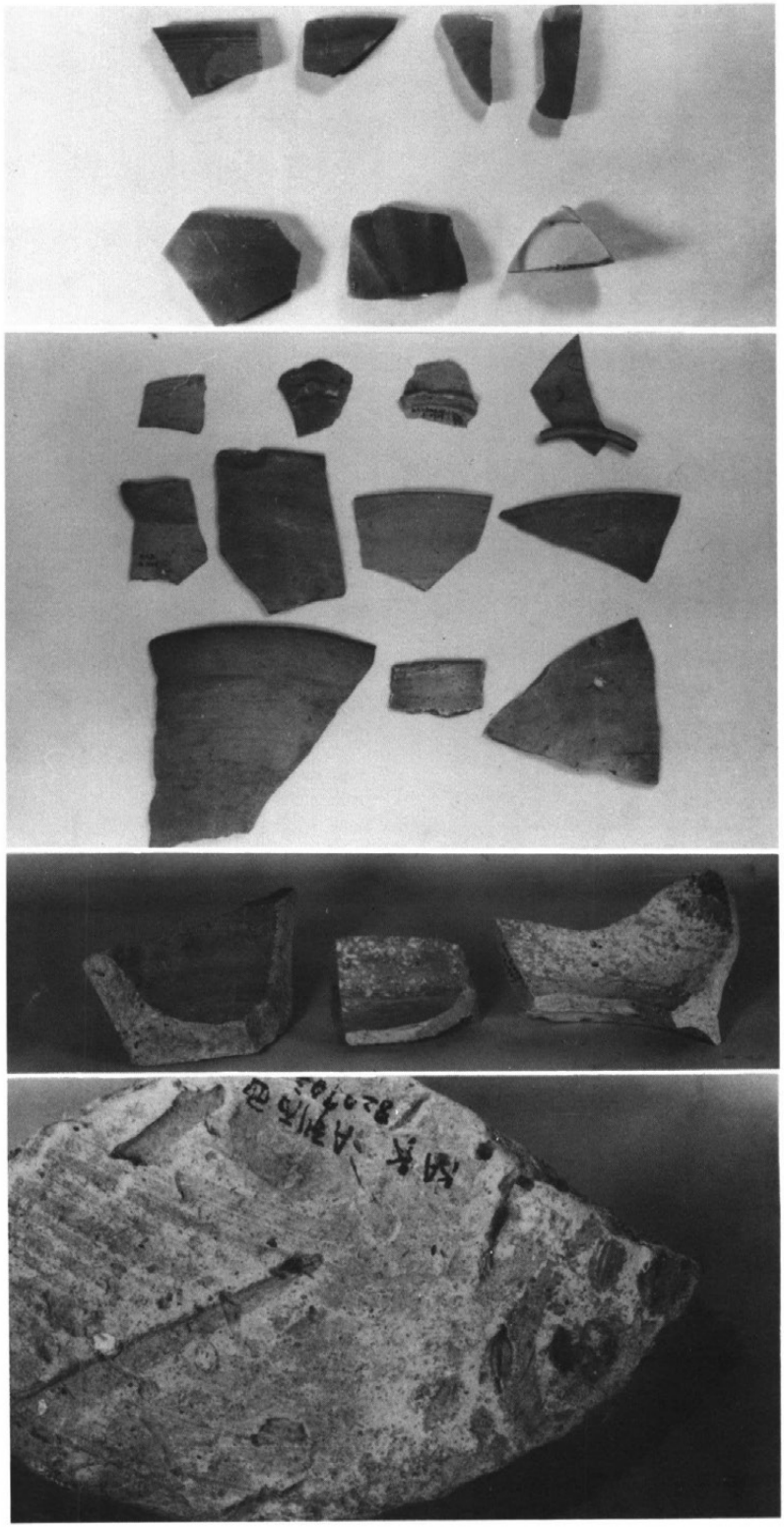


鍛冶屋場遺構

第Ⅰ,第Ⅱトレンチ

第Ⅰトレンチ

図版８　鍛冶屋場遺構全体図及び第Ⅰ・第Ⅱトレンチ



15　17　18　19

20　14　16

1　2　3　4

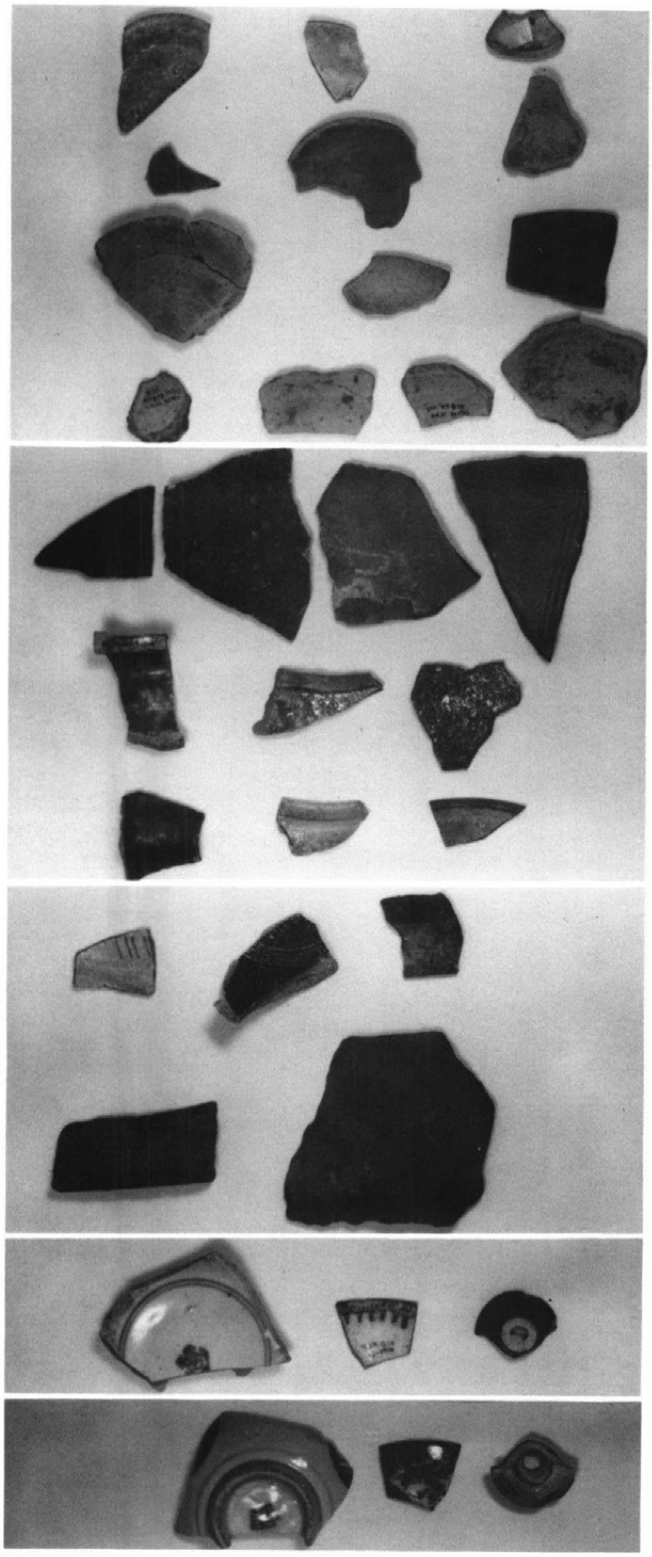
5　6　7　8

9　10　11

23　12　13

23

図版９　出土遺物　その１



32　33　34

35　36　37

38　39　40

41　42　43　44

21　22　24　25

26　27　28

29　30　31

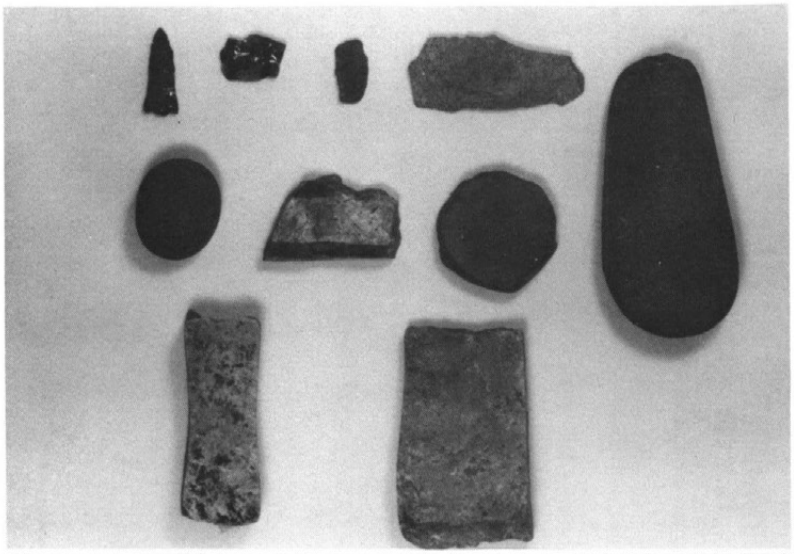
49　48　47

46　45

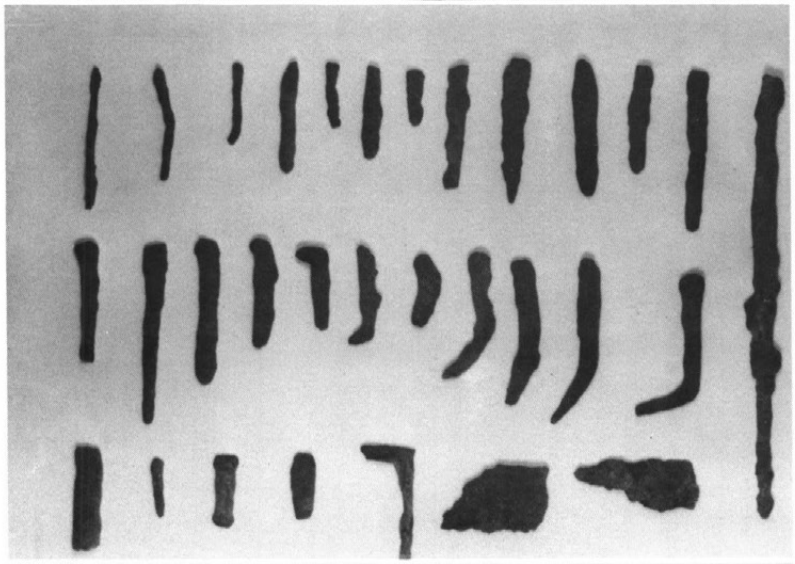
50　51　52

50　51　52

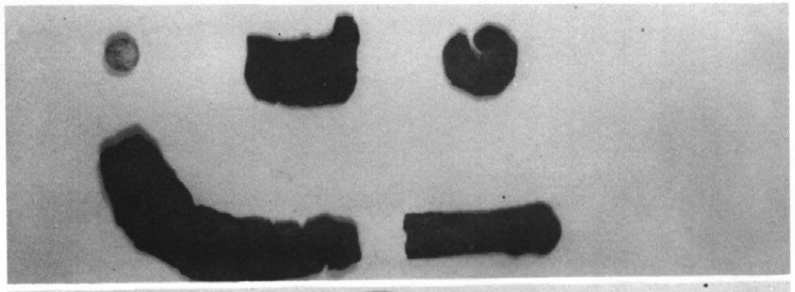
図版10　出土遺物　その２



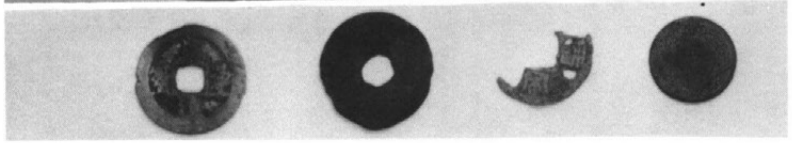
1 ～ 10



1 ～ 31

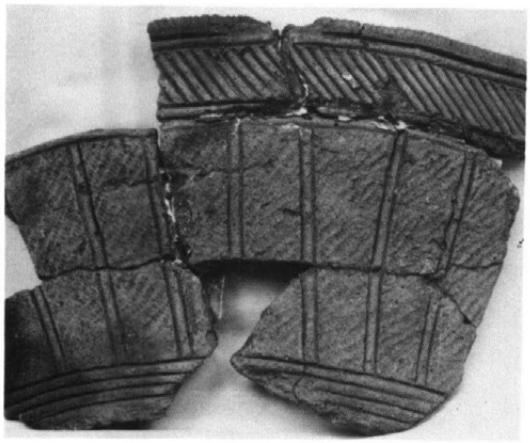


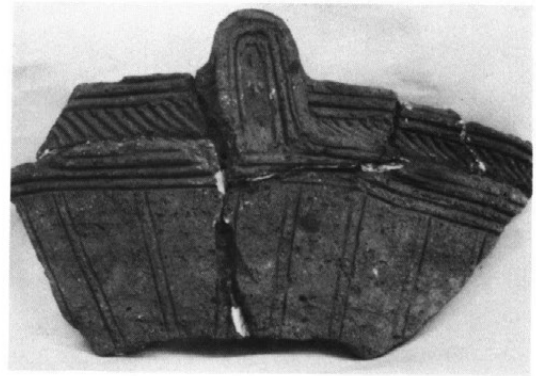
32 ～ 36



37 ～ 40

図版11　出土遺物　その３



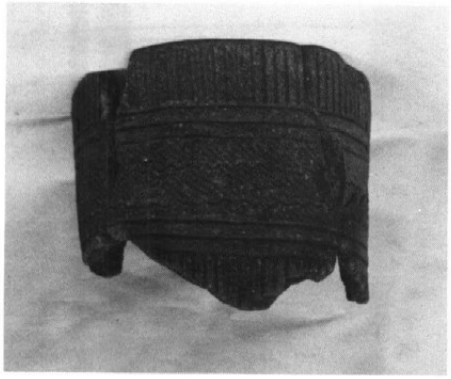


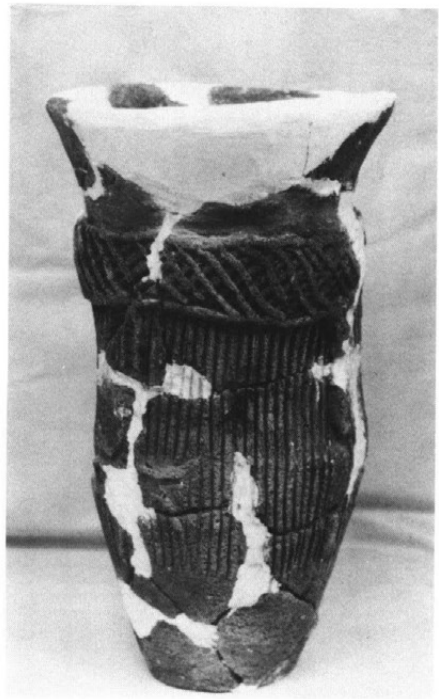
1	2
3	4
5	6

図版12　周辺遺跡出土遺物（1）

7	8
9	11

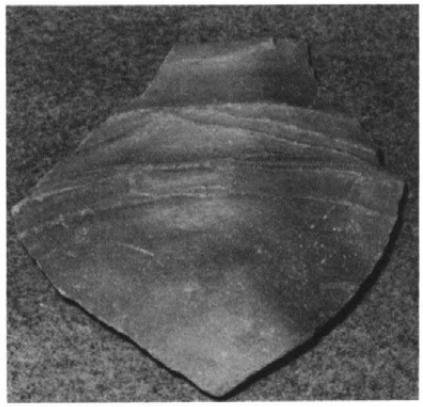
図版13　周辺遺跡出土遺物（2）

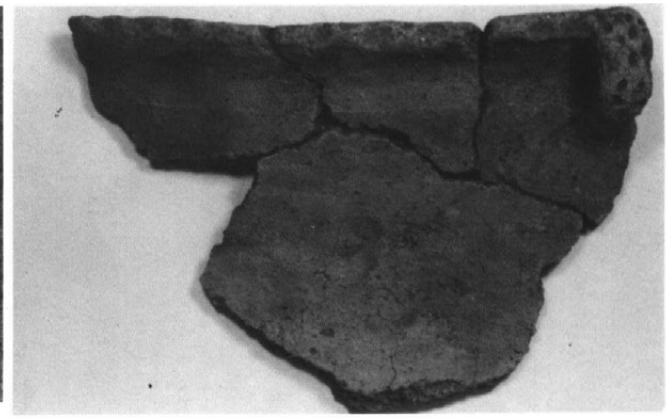


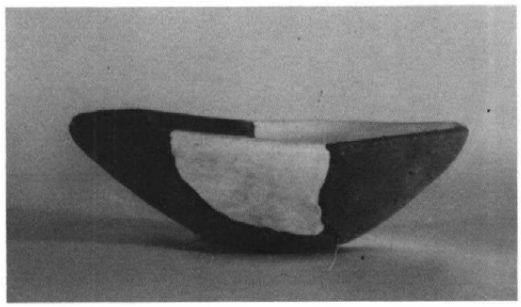


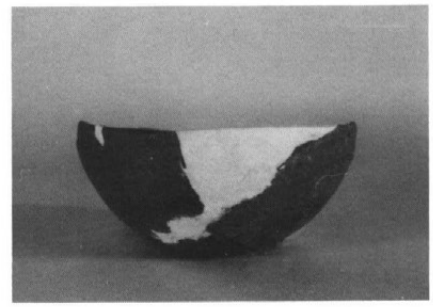
13	14
16	
17	19

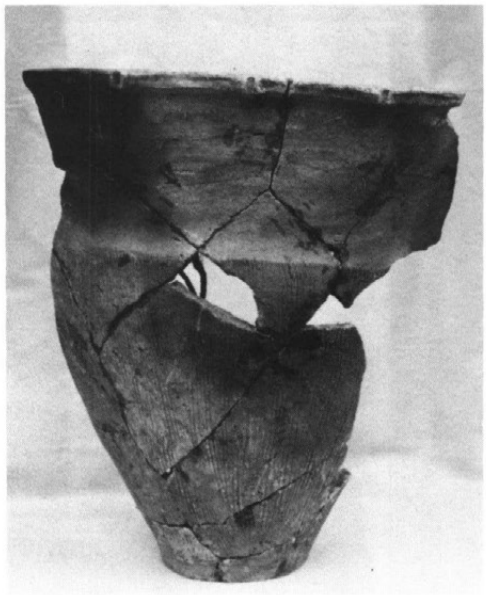
図版14　周辺遺跡出土遺物（3）





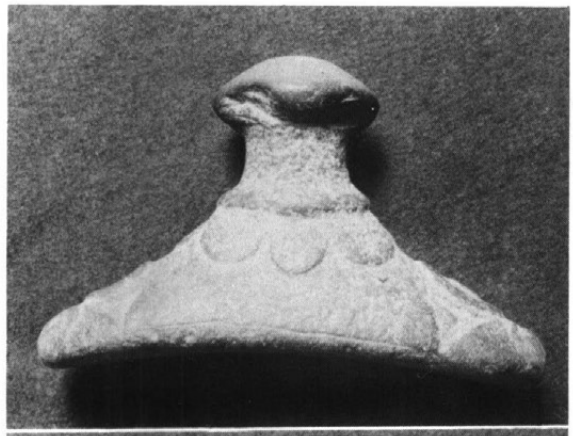


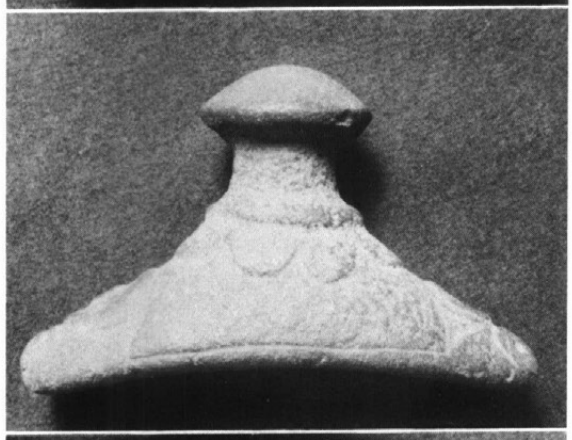


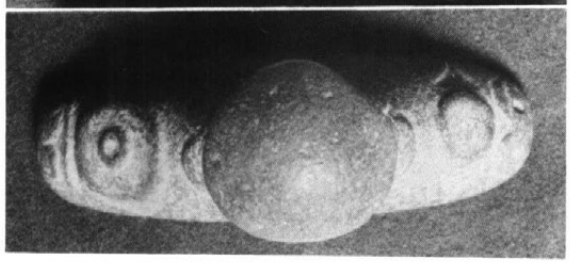


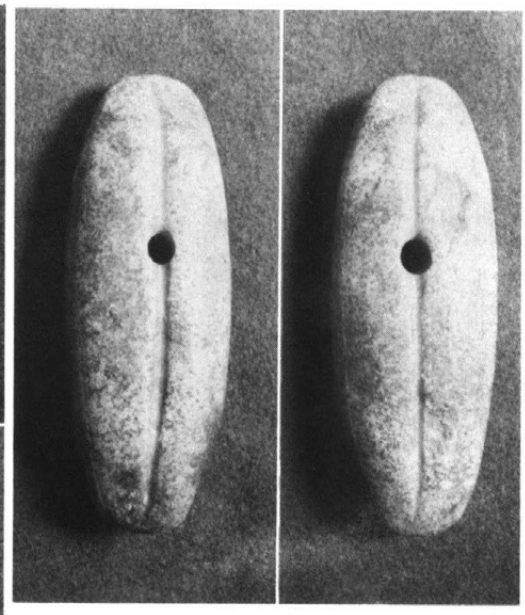
20	24
22	23
31	35

図版15　周辺遺跡出土遺物（4）

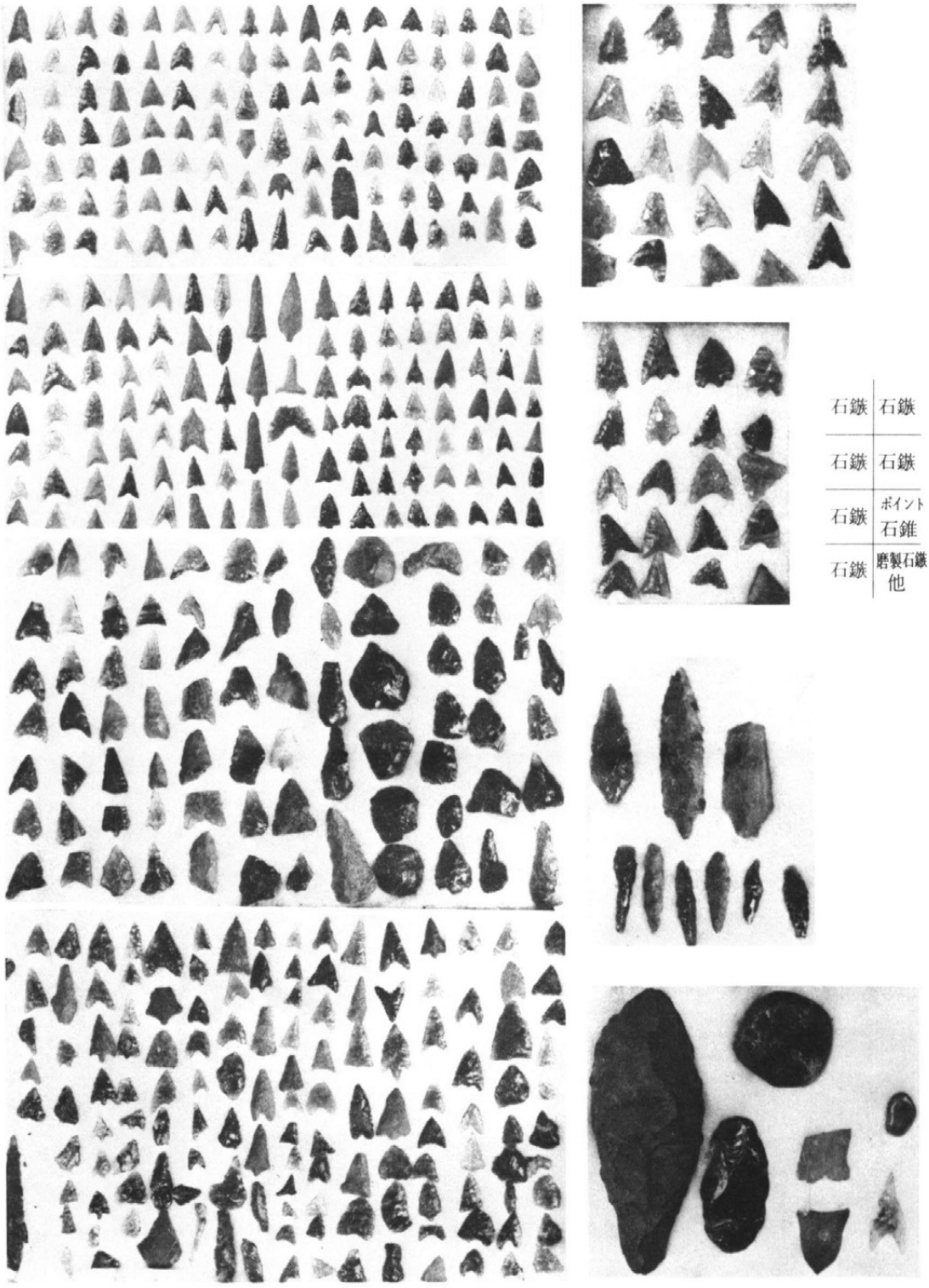








図版18　周辺遺跡出土遺物（7）



図版19　周辺遺跡出土遺物（8）

松本市文化財調査報告No. 27
—松本市寿小赤遺跡緊急発掘調査報告書—

昭和58年3月20日　印刷

昭和58年3月31日　発行

発行　長野県中信土地改良事務所
　　松本市教育委員会

印刷　電算印刷株式会社